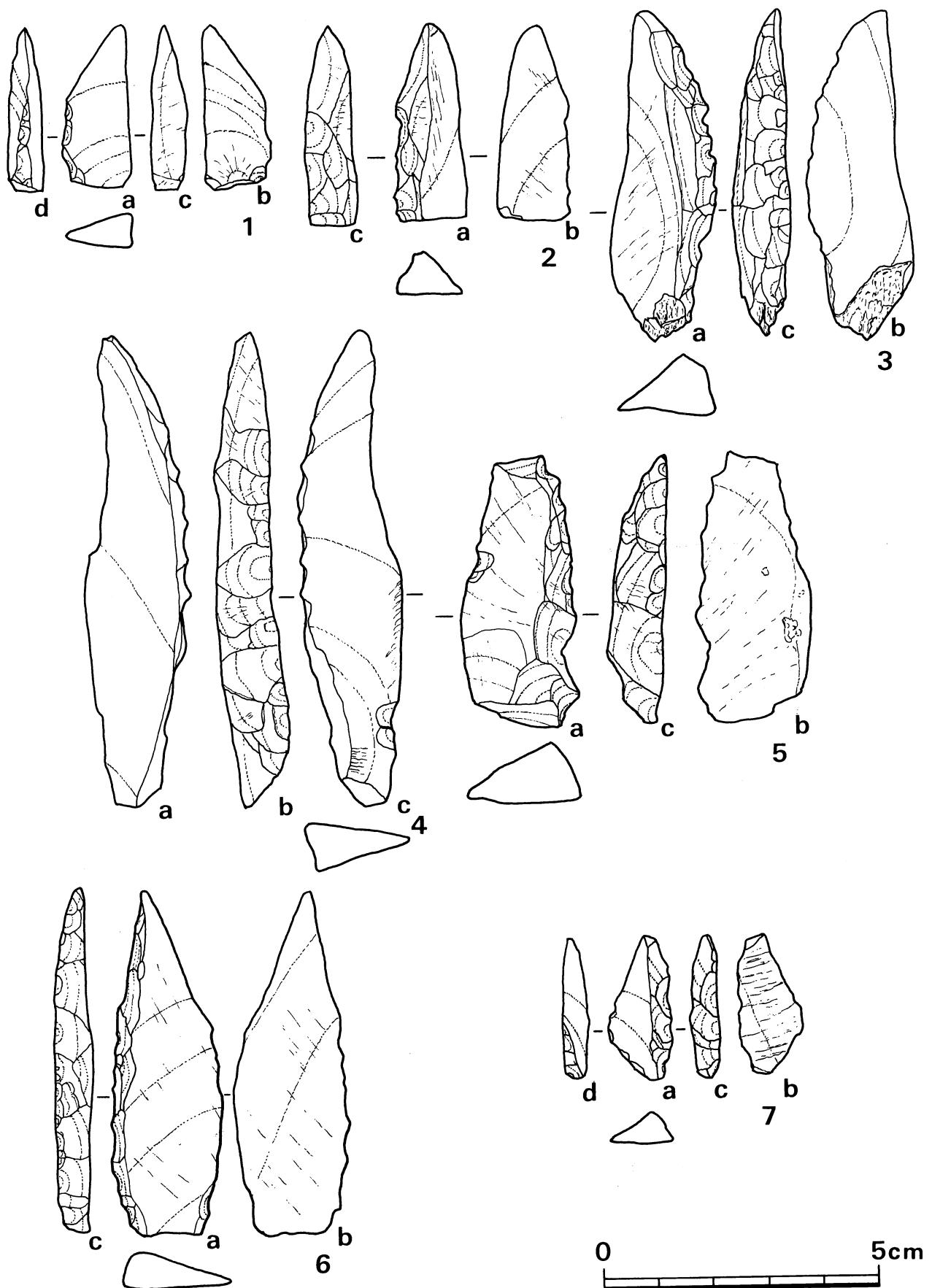
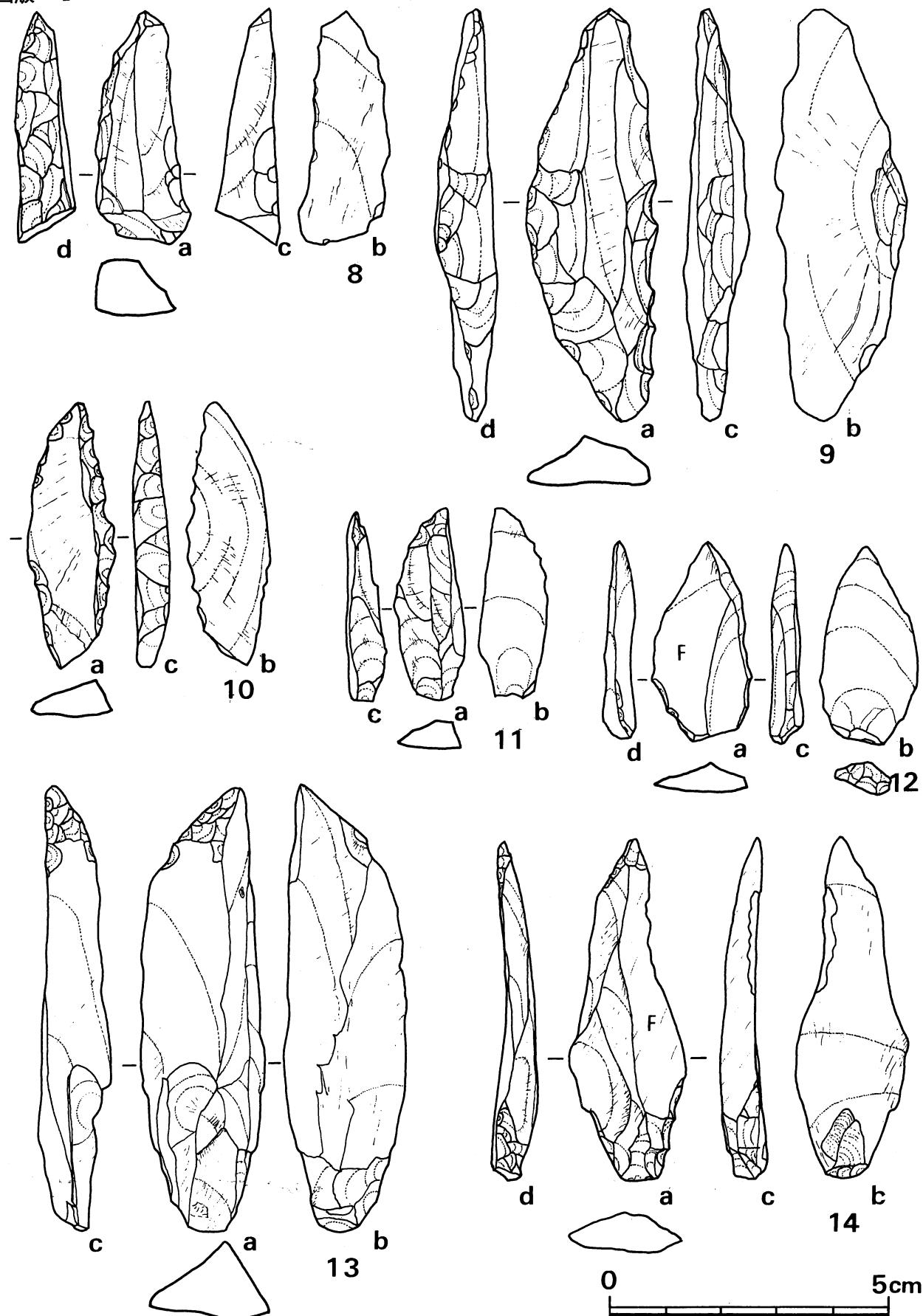


図版

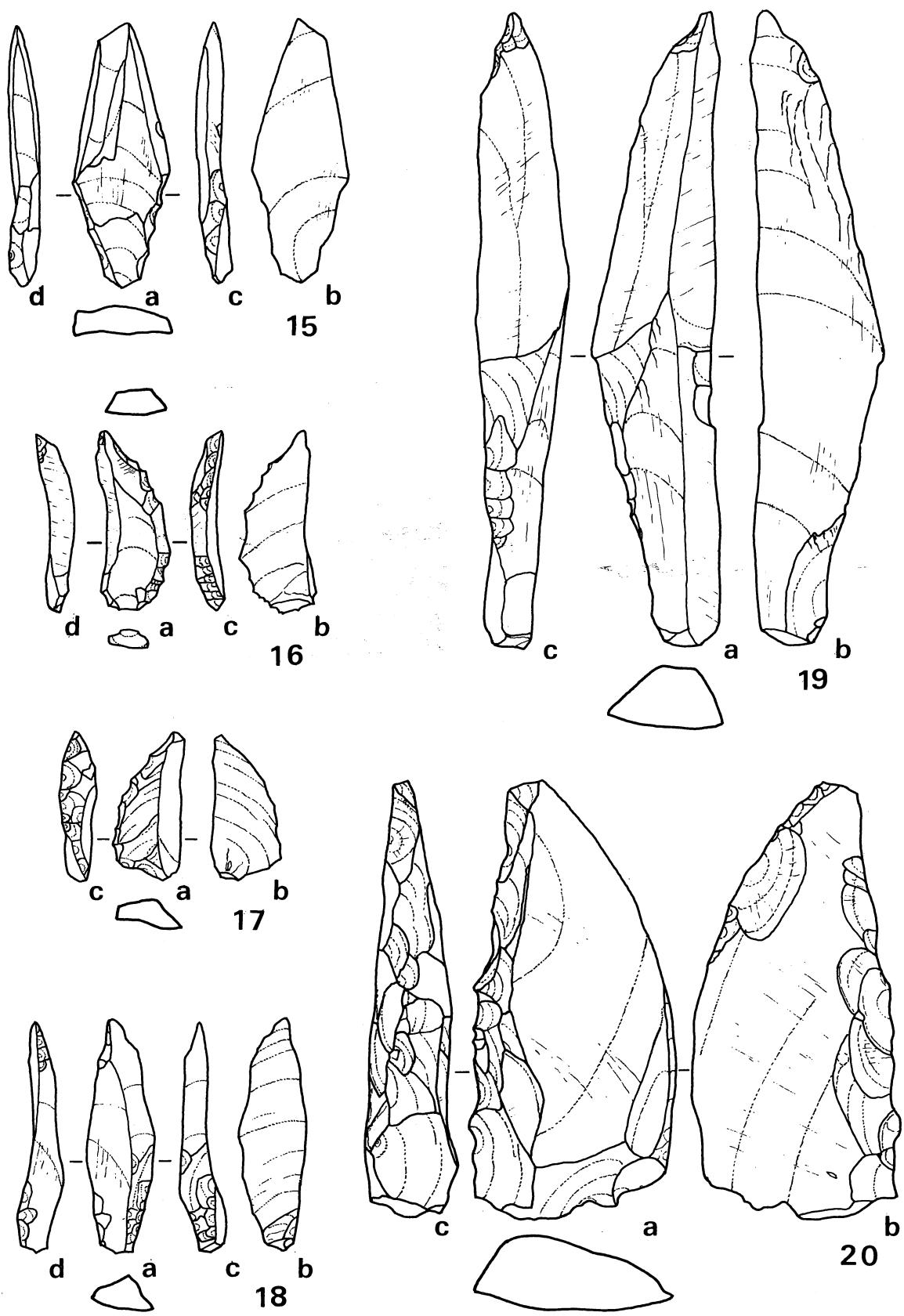


大浦遺跡出土石器実測図 (1)

図版 2



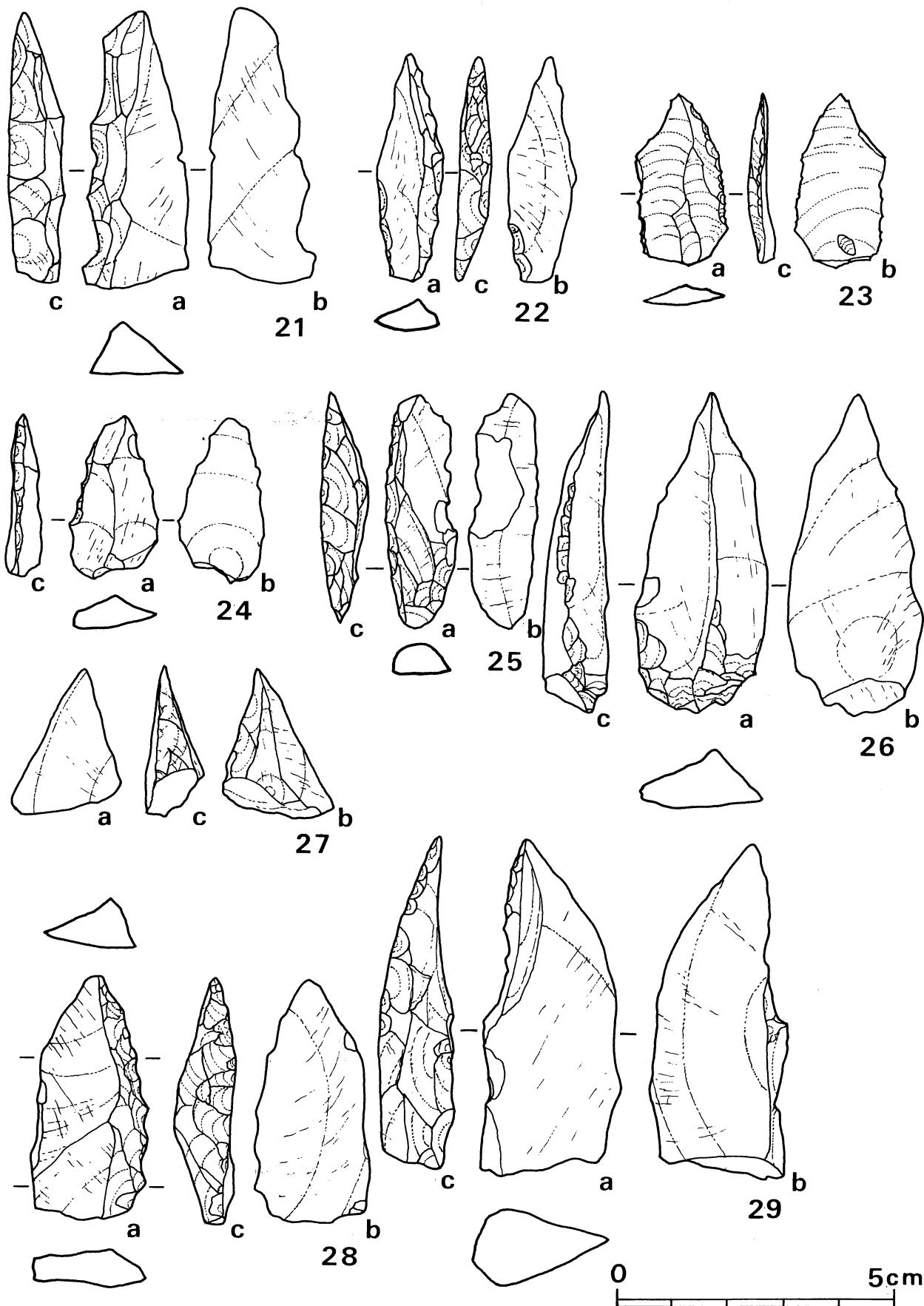
大浦遺跡出土石器実測図 (2)



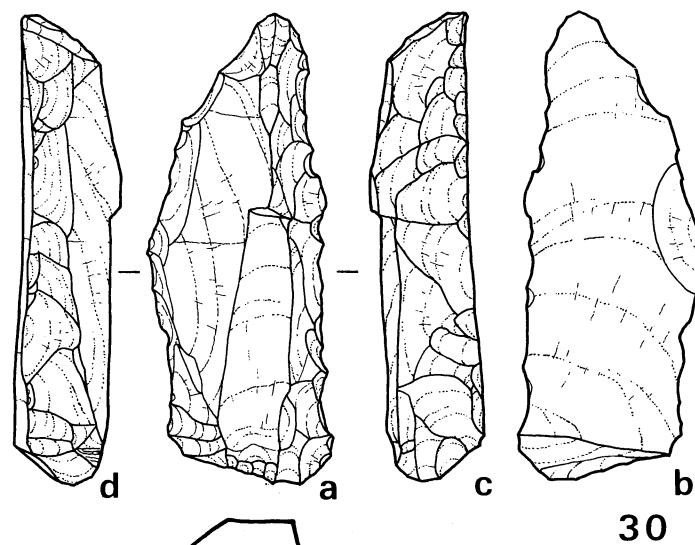
0 5cm

大浦遺跡出土石器実測図 (3)

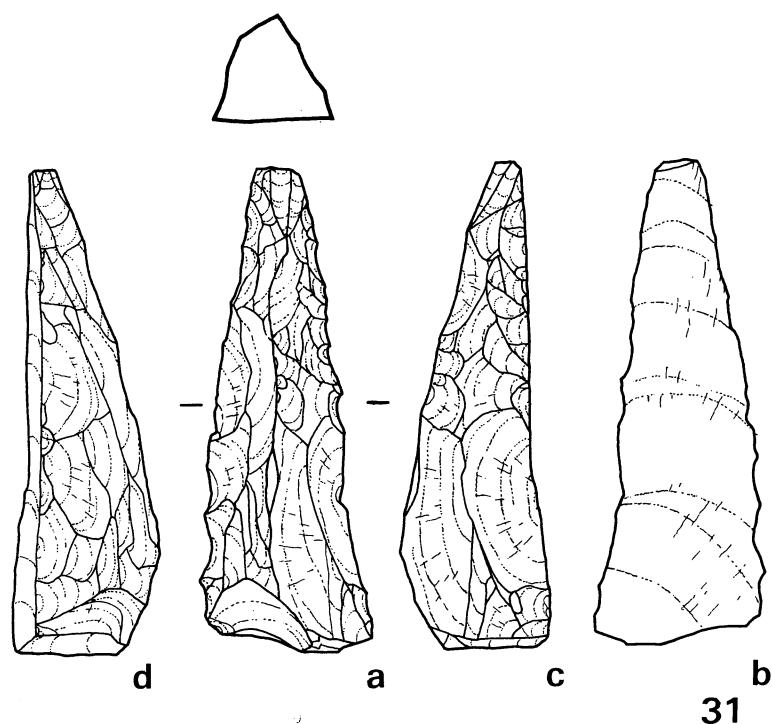
図版 4



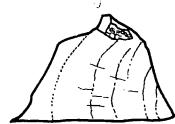
大浦遺跡出土石器実測図 (4)



30



31



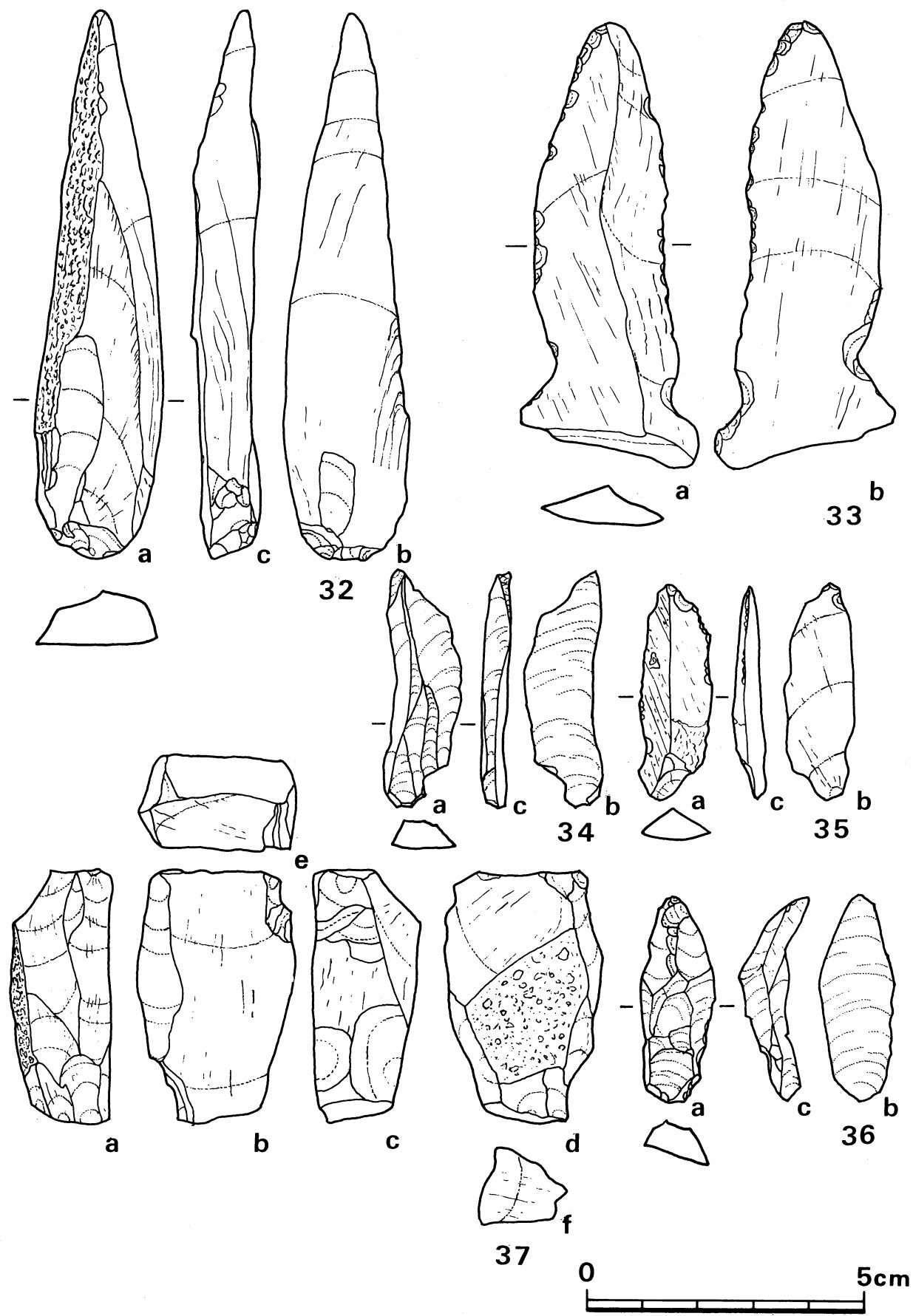
e

0

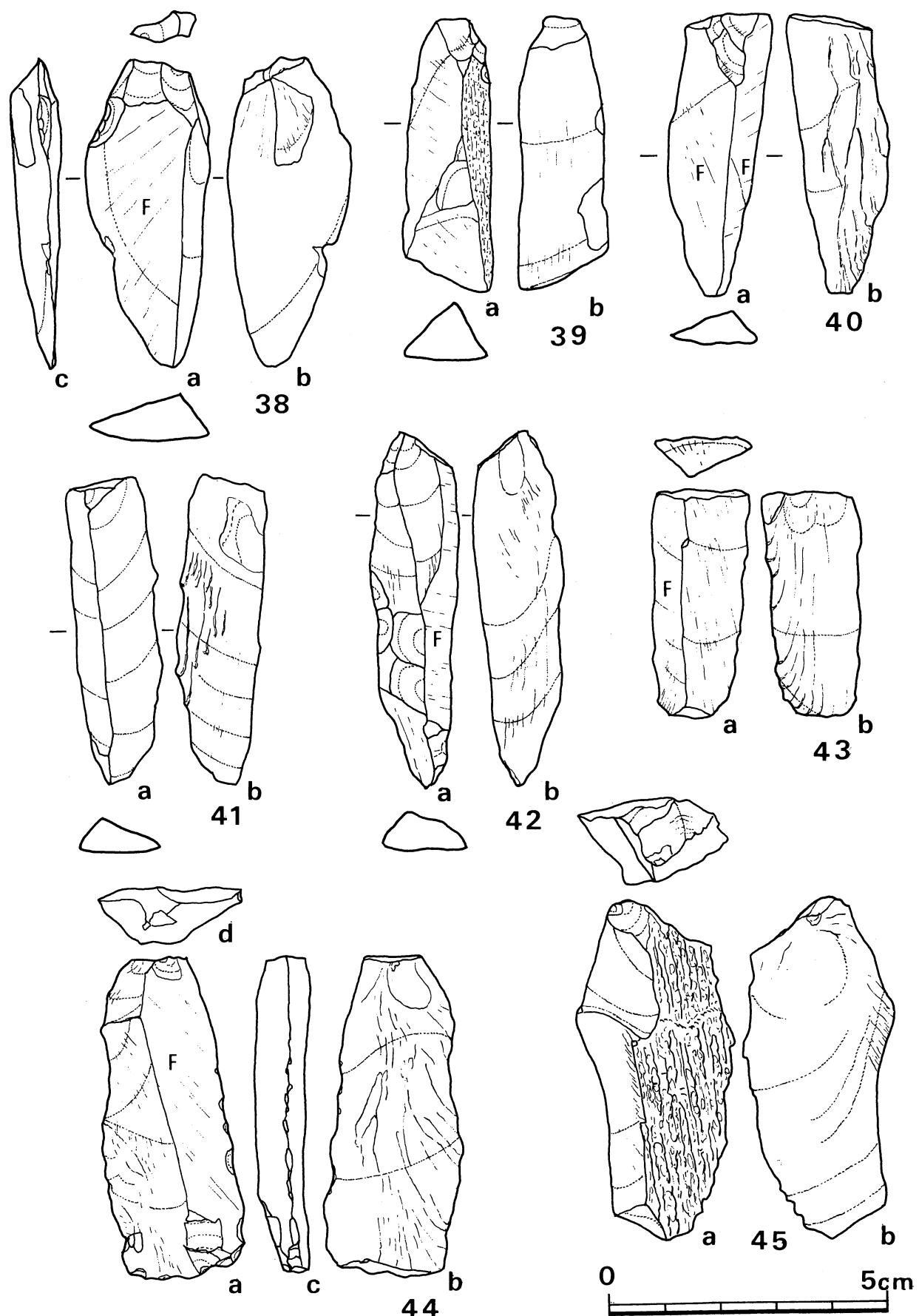
5cm

大浦遺跡出土石器実測図 (5)

図版 6

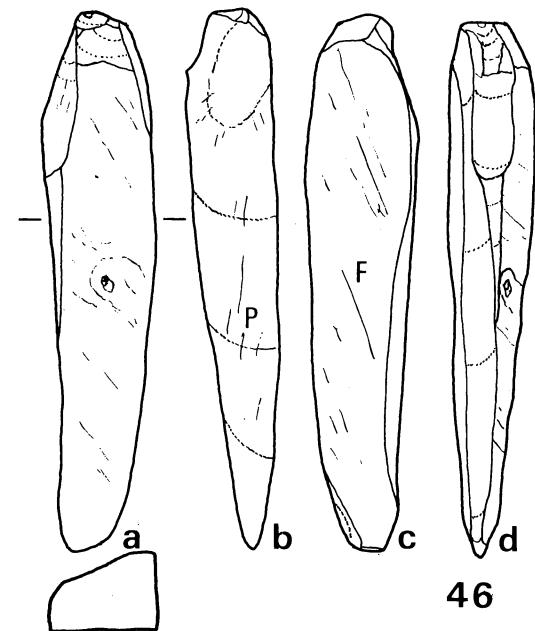


大浦遺跡出土石器実測図 (6)

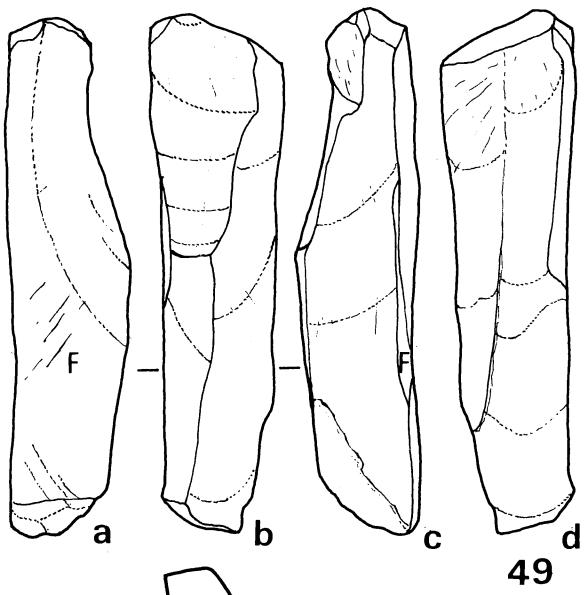


大浦遺跡出土石器実測図 (7)

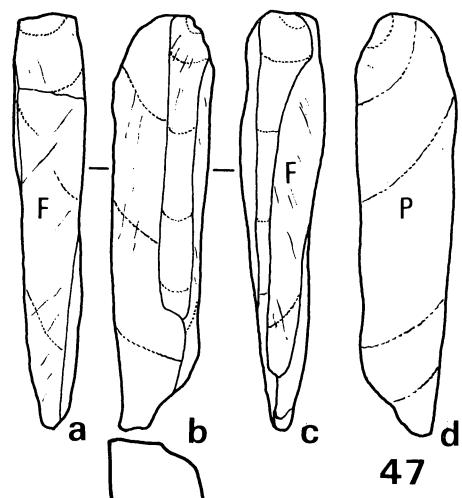
図版 8



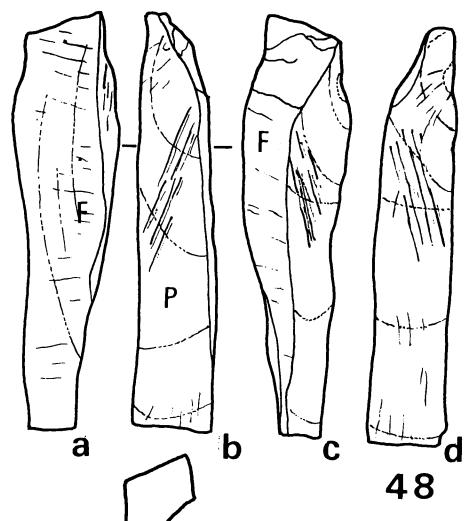
46



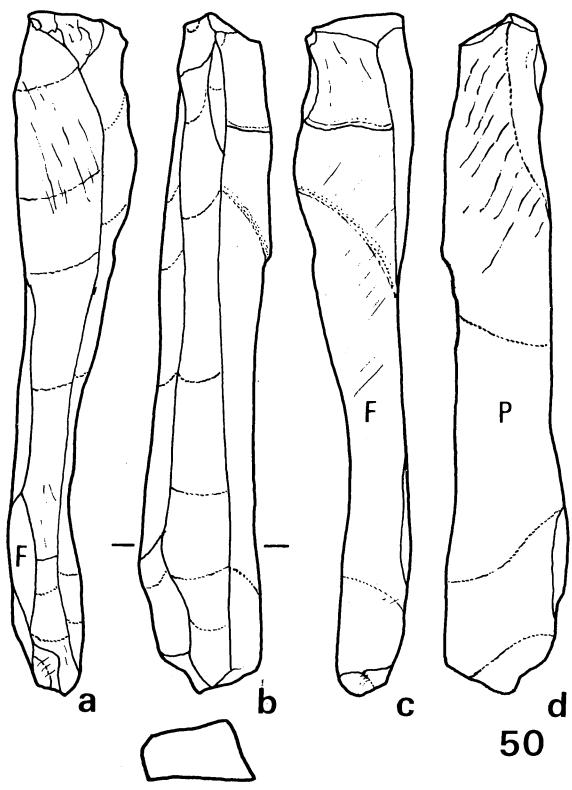
49



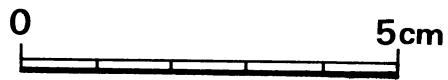
47



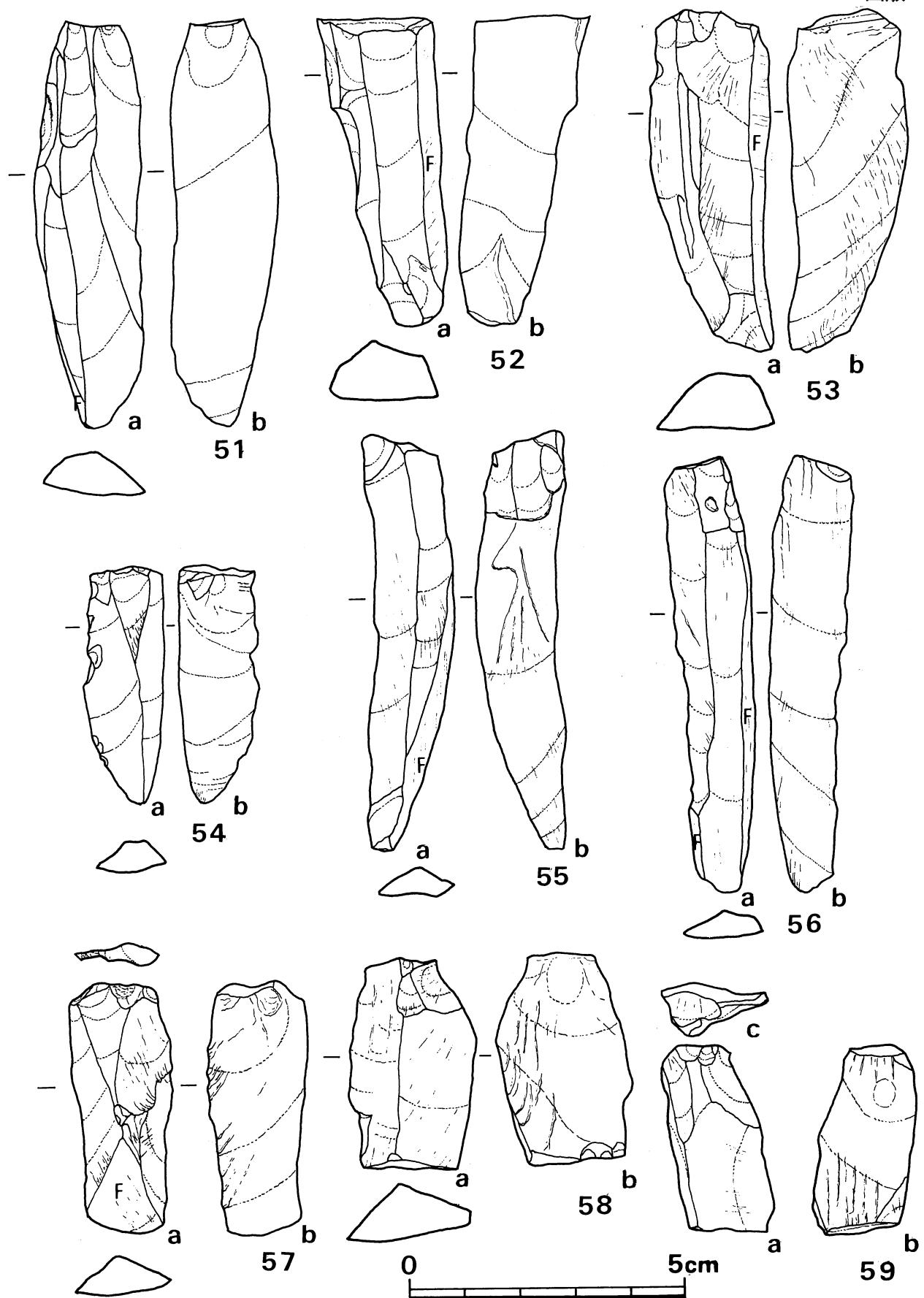
48



50

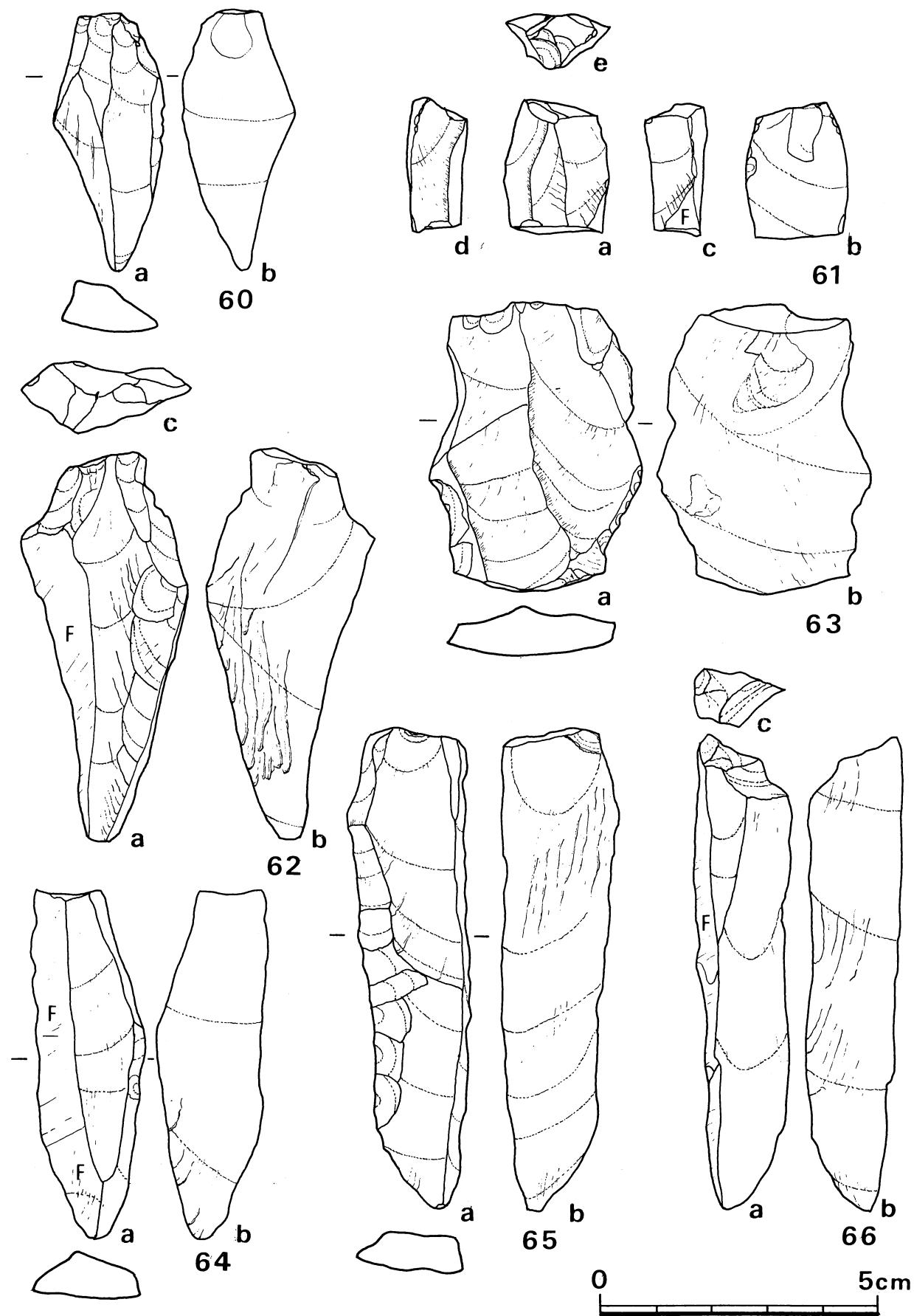


大浦遺跡出土石器実測図 (8)

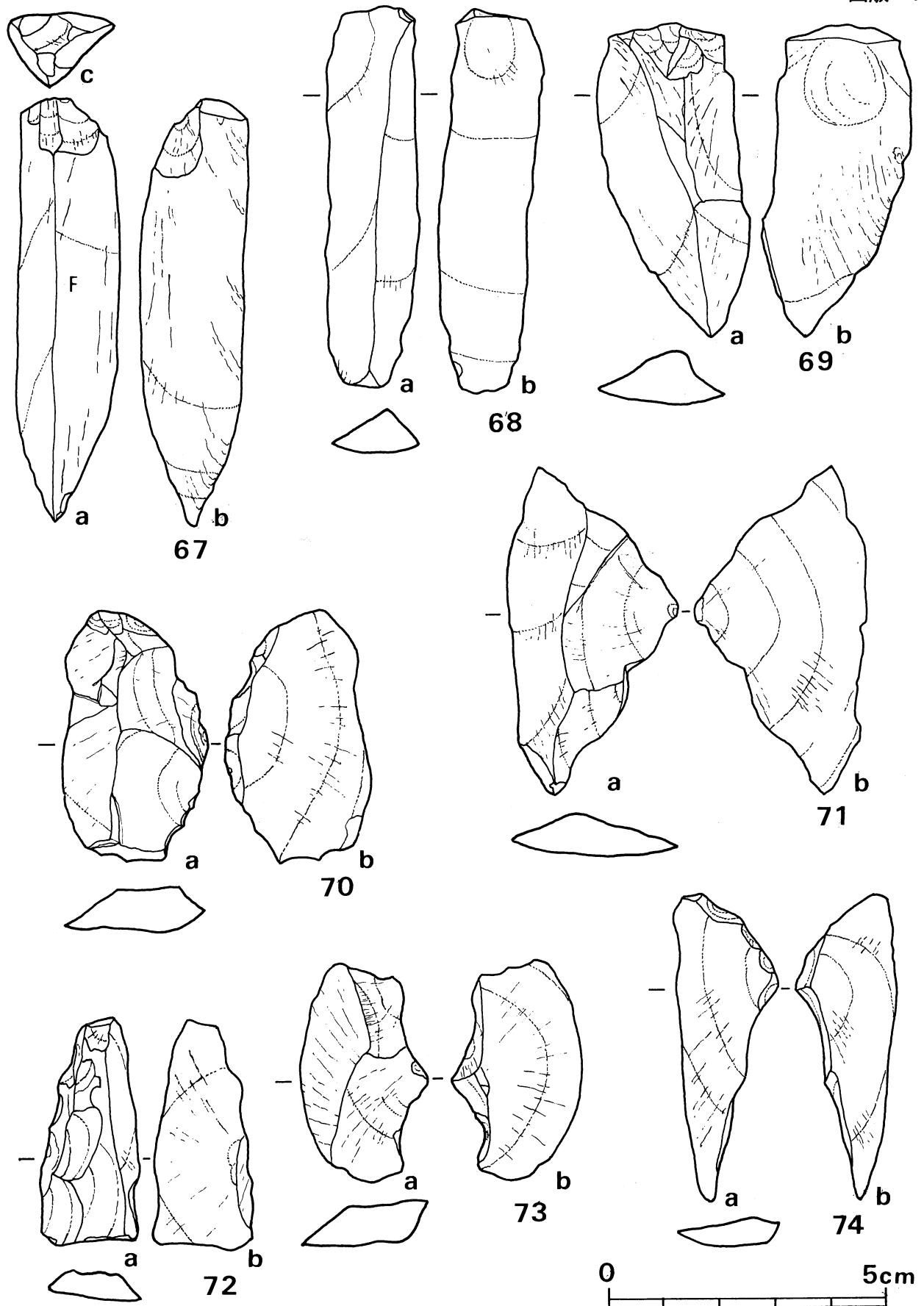


大浦遺跡出土石器実測図 (9)

図版 10

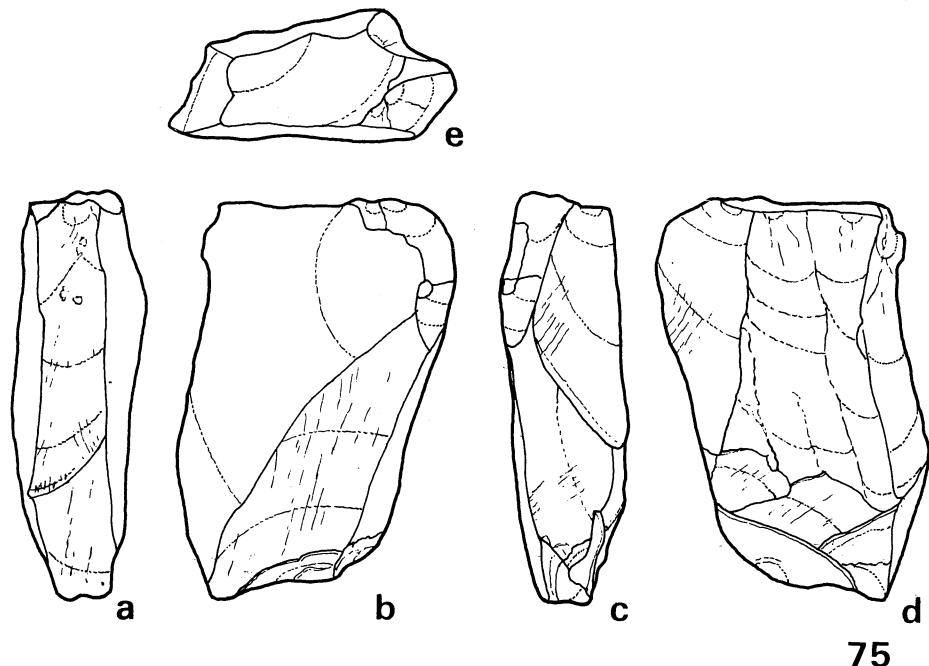


大浦遺跡出土石器実測図 (10)

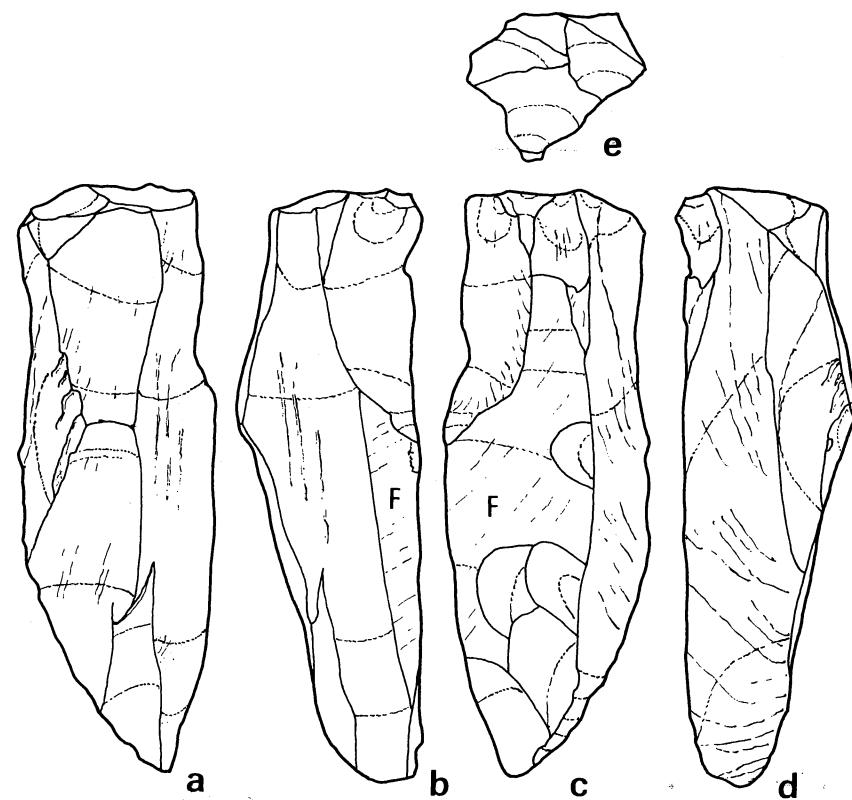


大浦遺跡出土石器実測図 (II)

図版 12



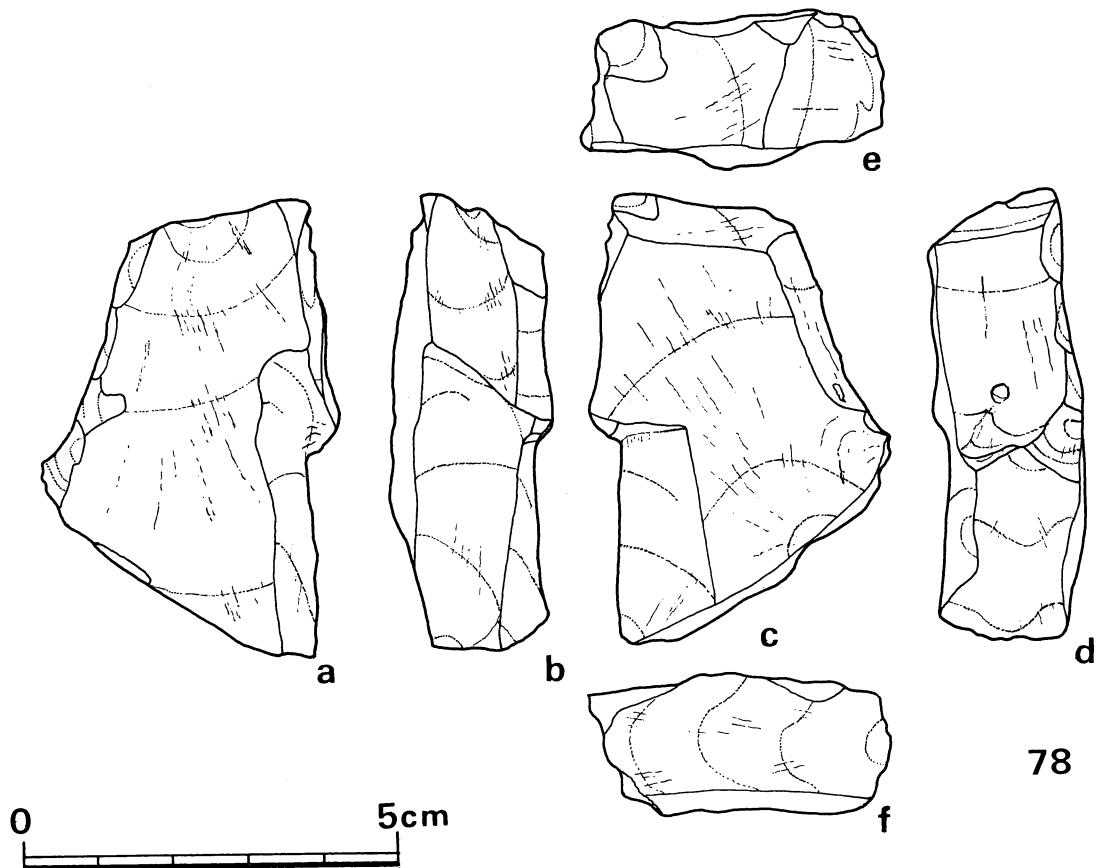
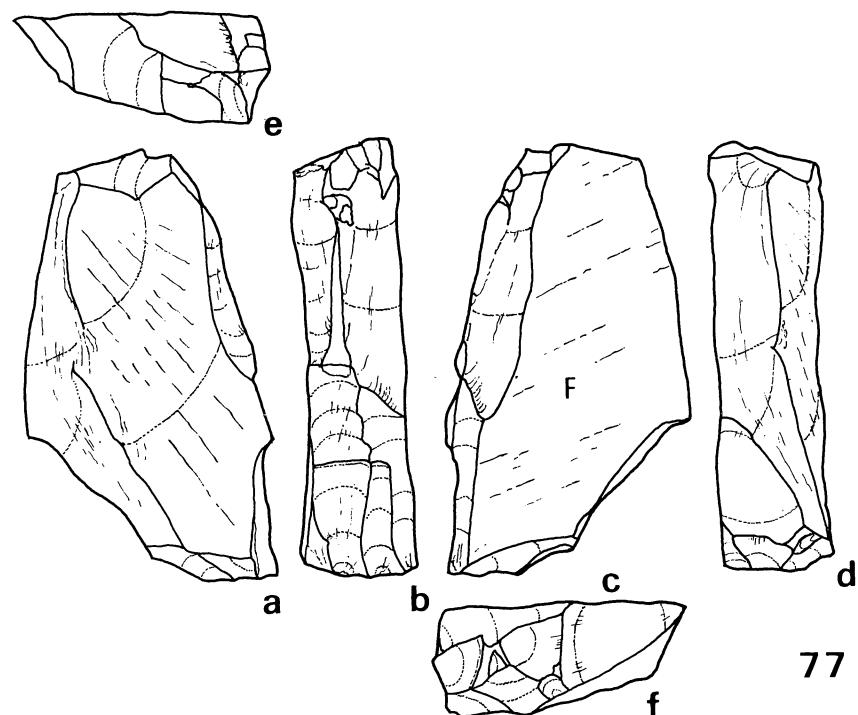
75



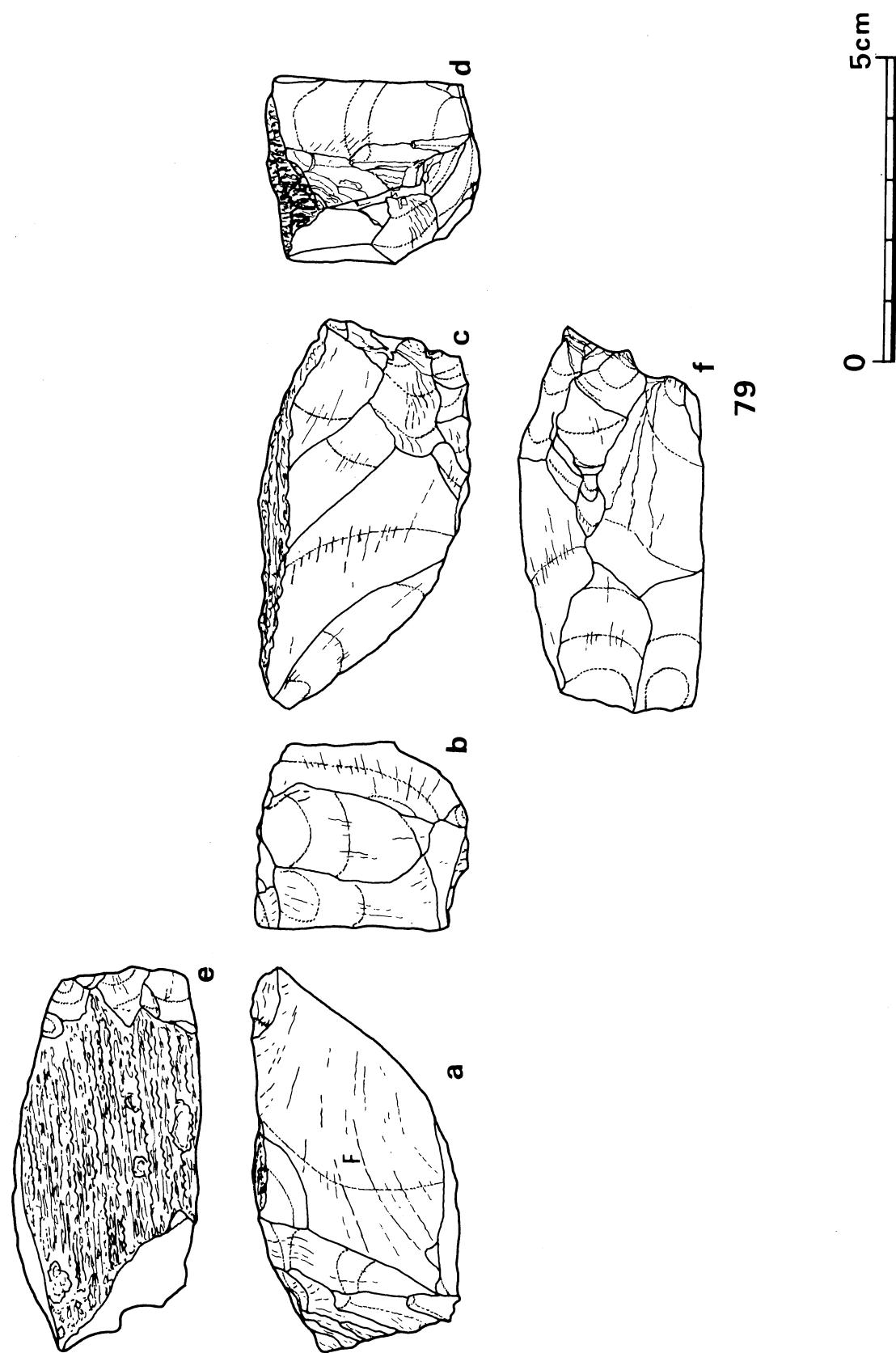
76



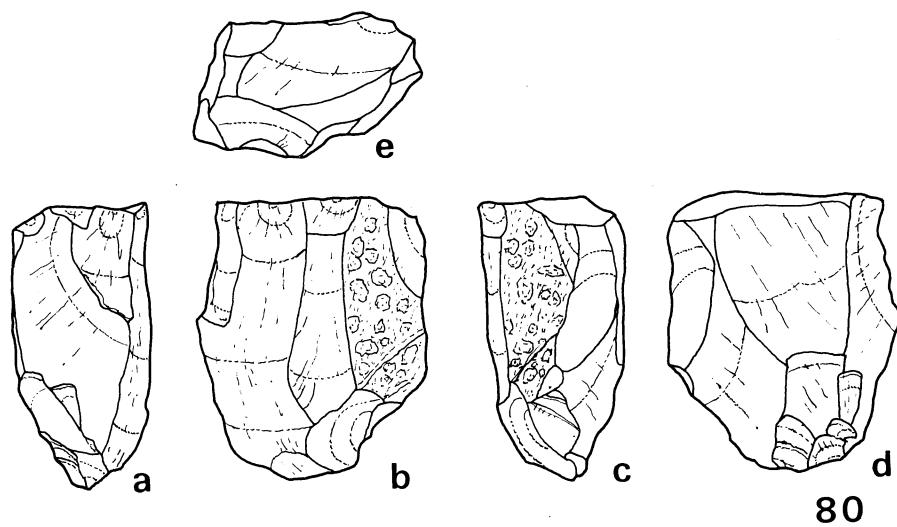
大浦遺跡出土石器実測図 (12)



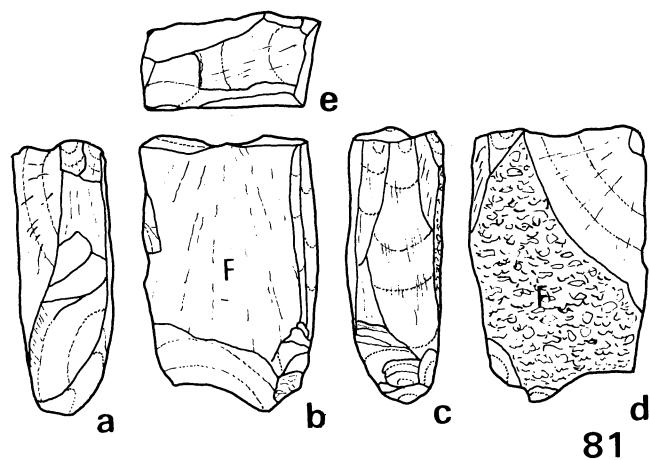
大浦遺跡出土石器実測図 (13)



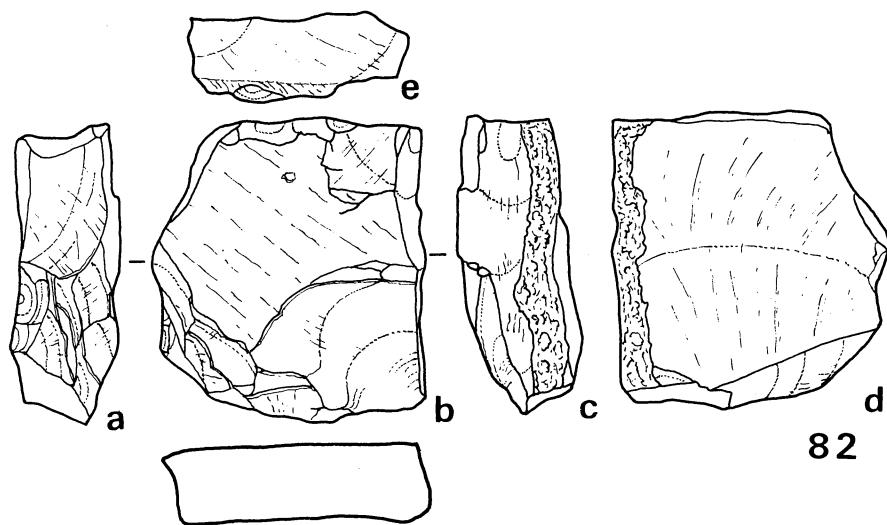
大浦遺跡出土石器実測図 (14)



80



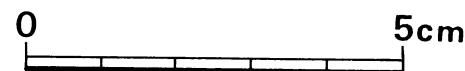
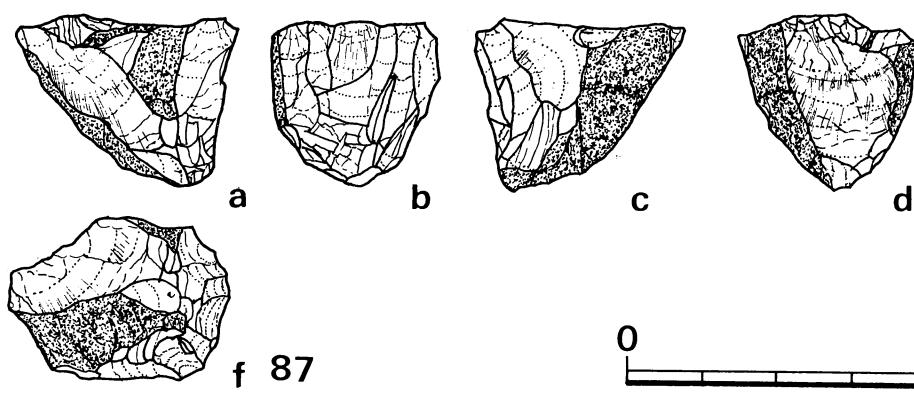
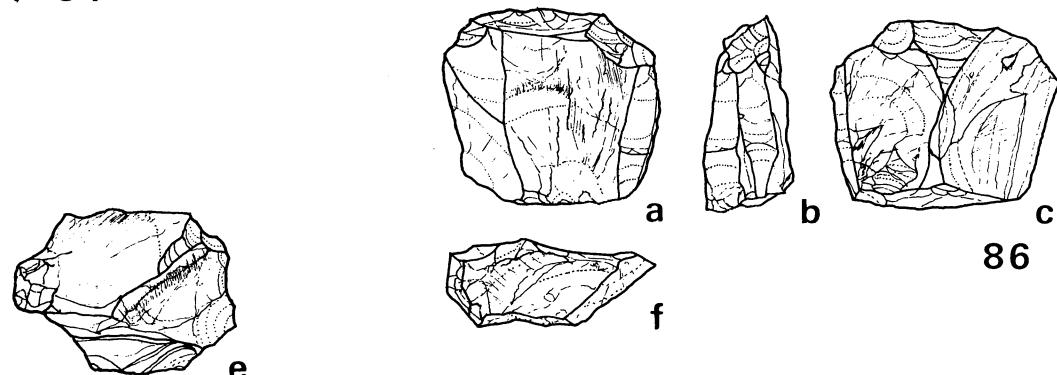
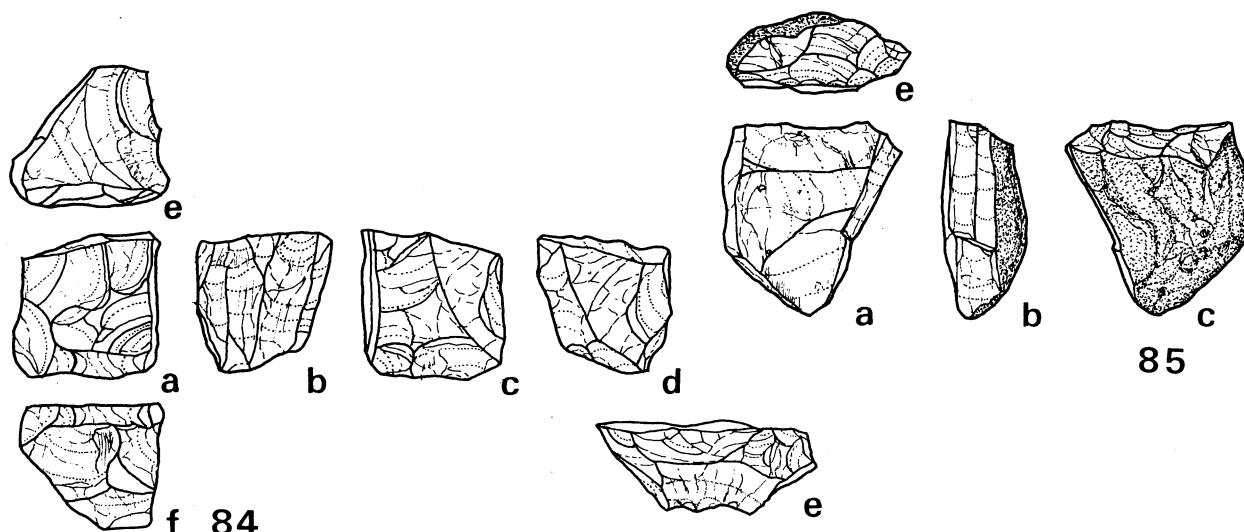
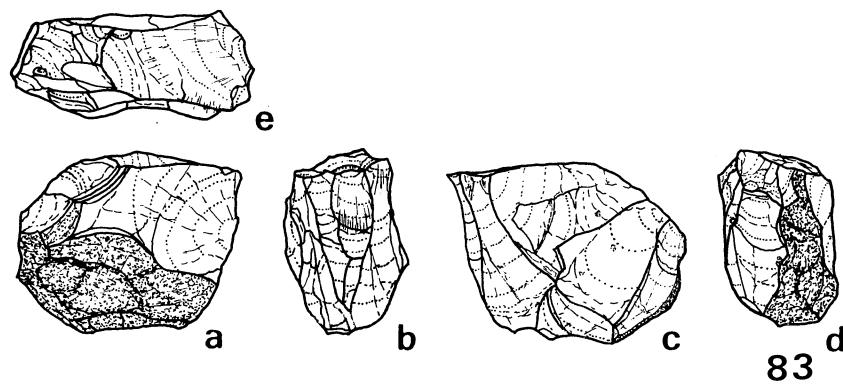
81



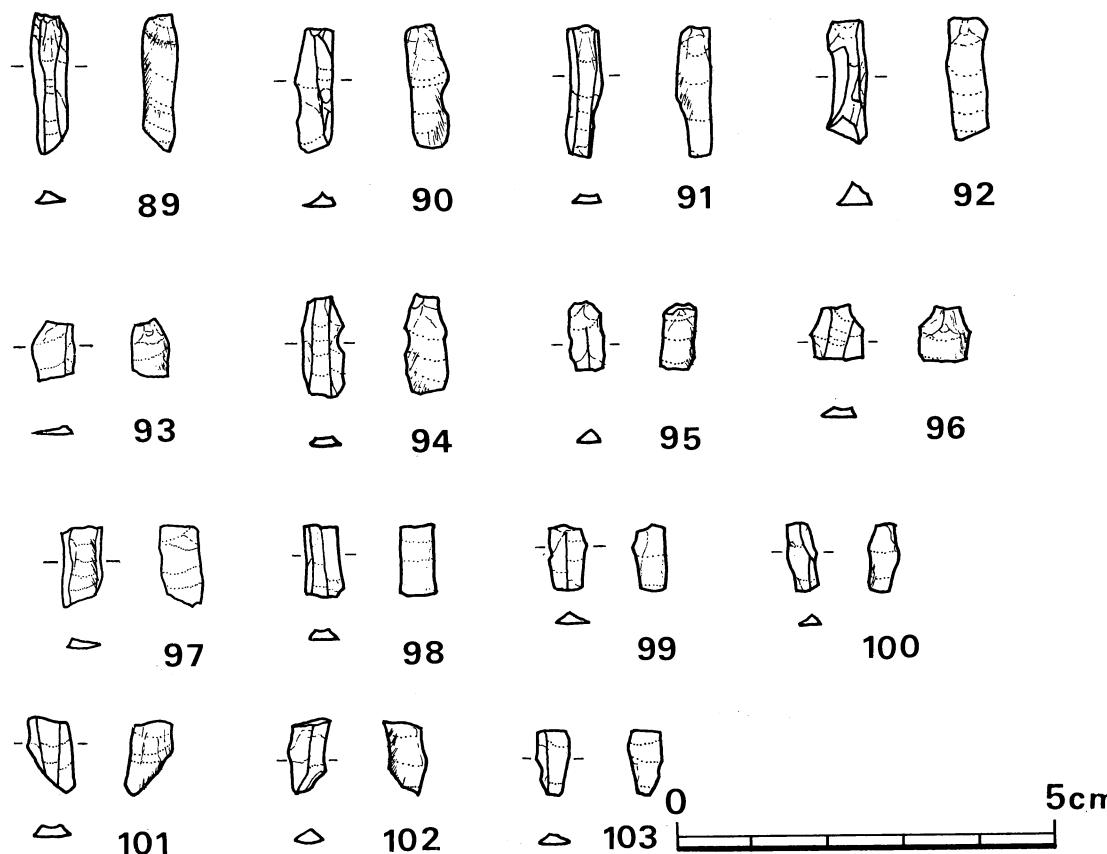
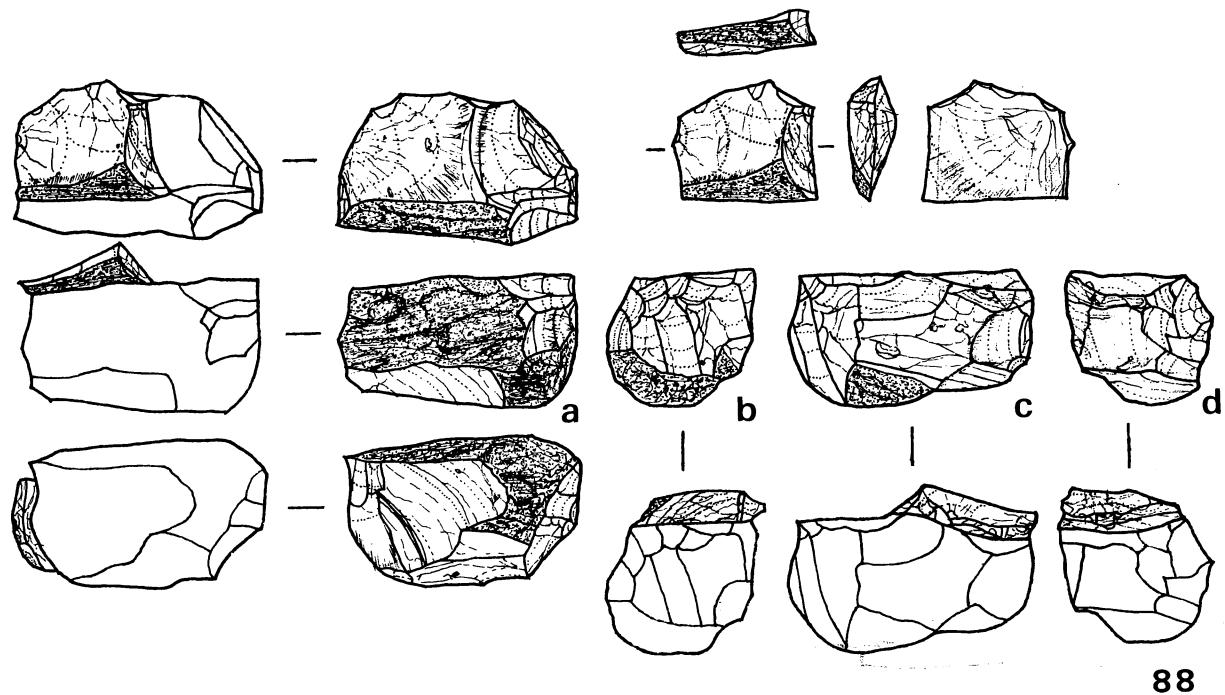
82



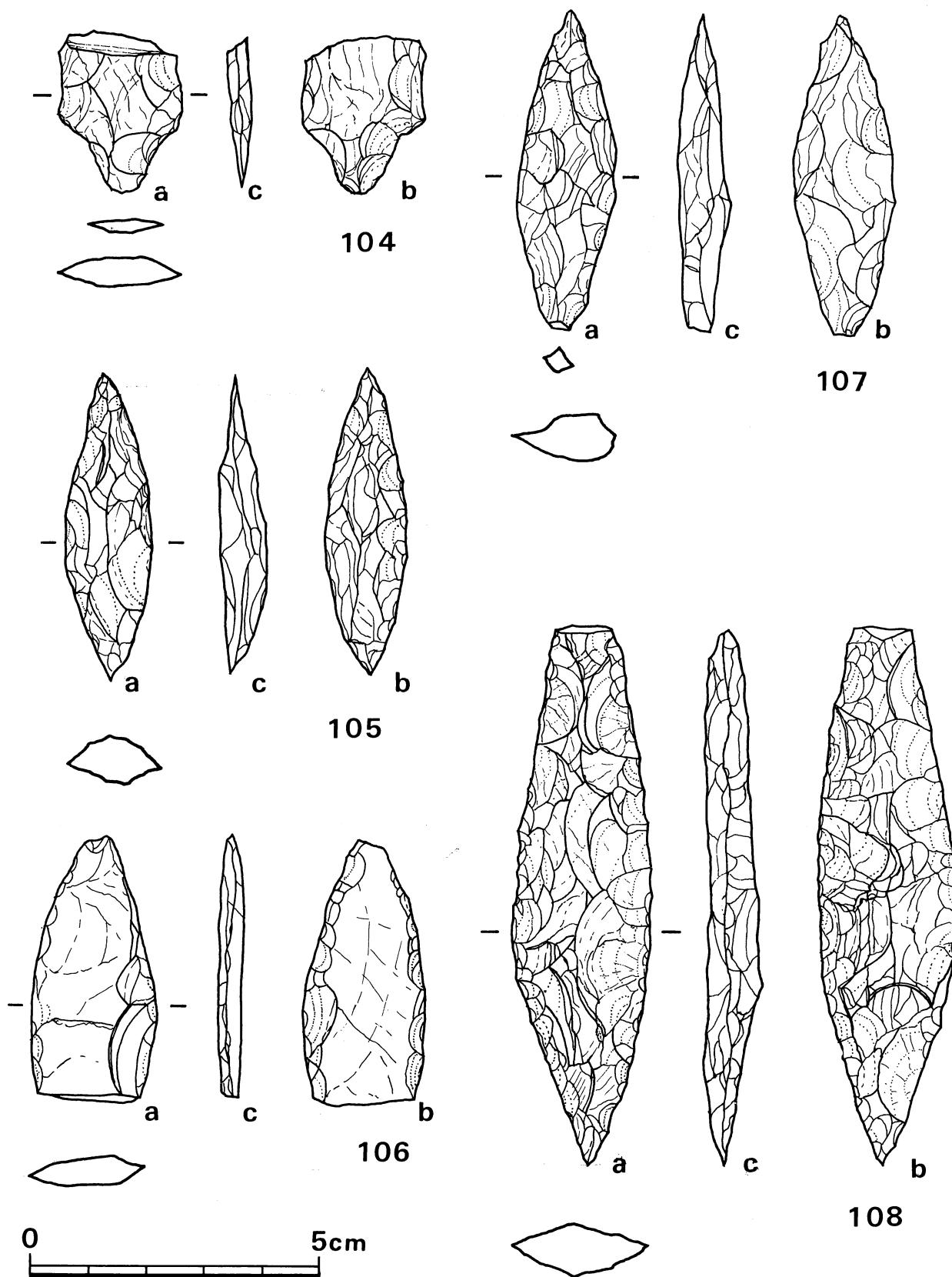
図版 16



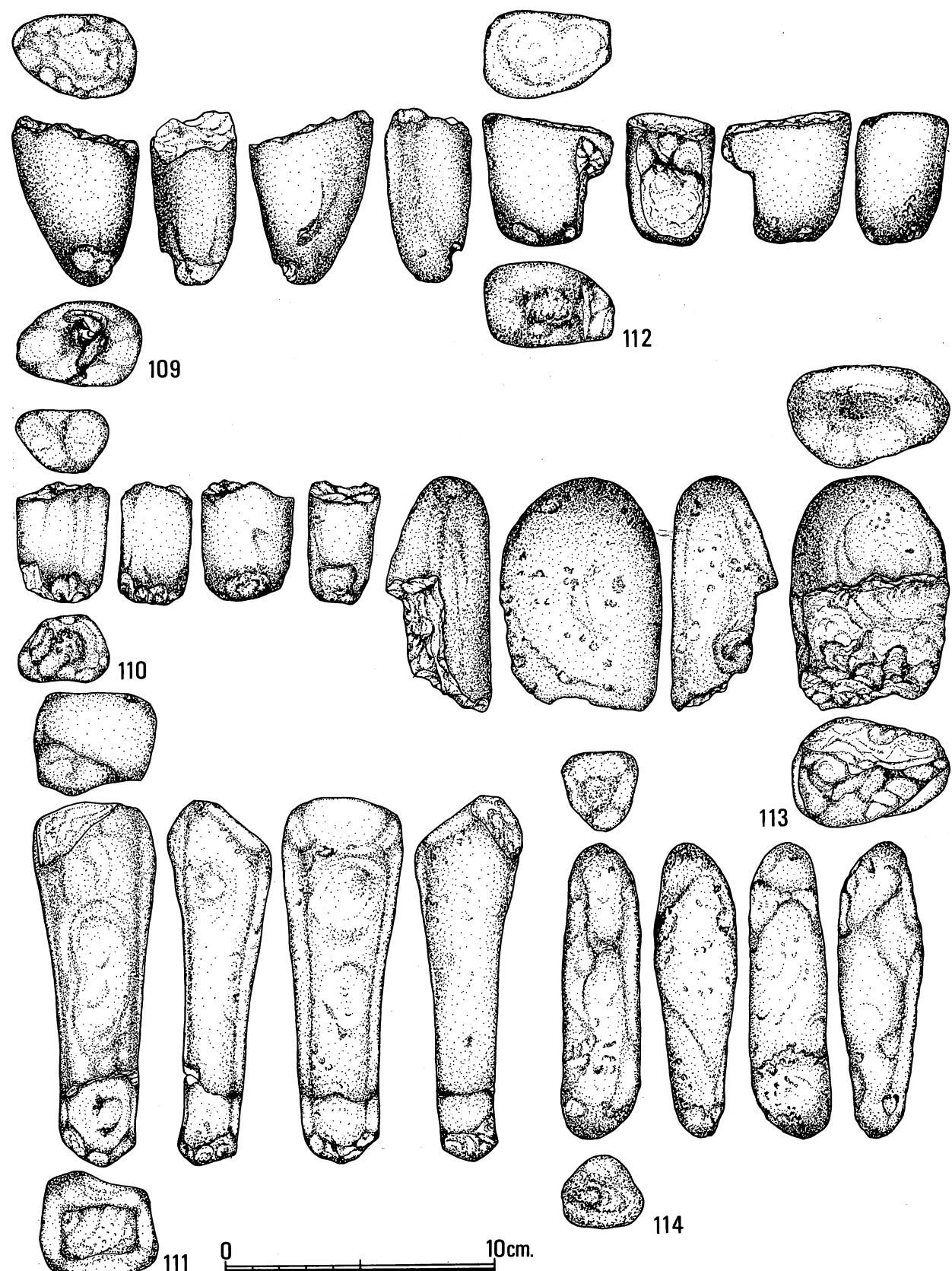
大浦遺跡出土石器実測図 (16)



大浦遺跡出土石器実測図 (I)

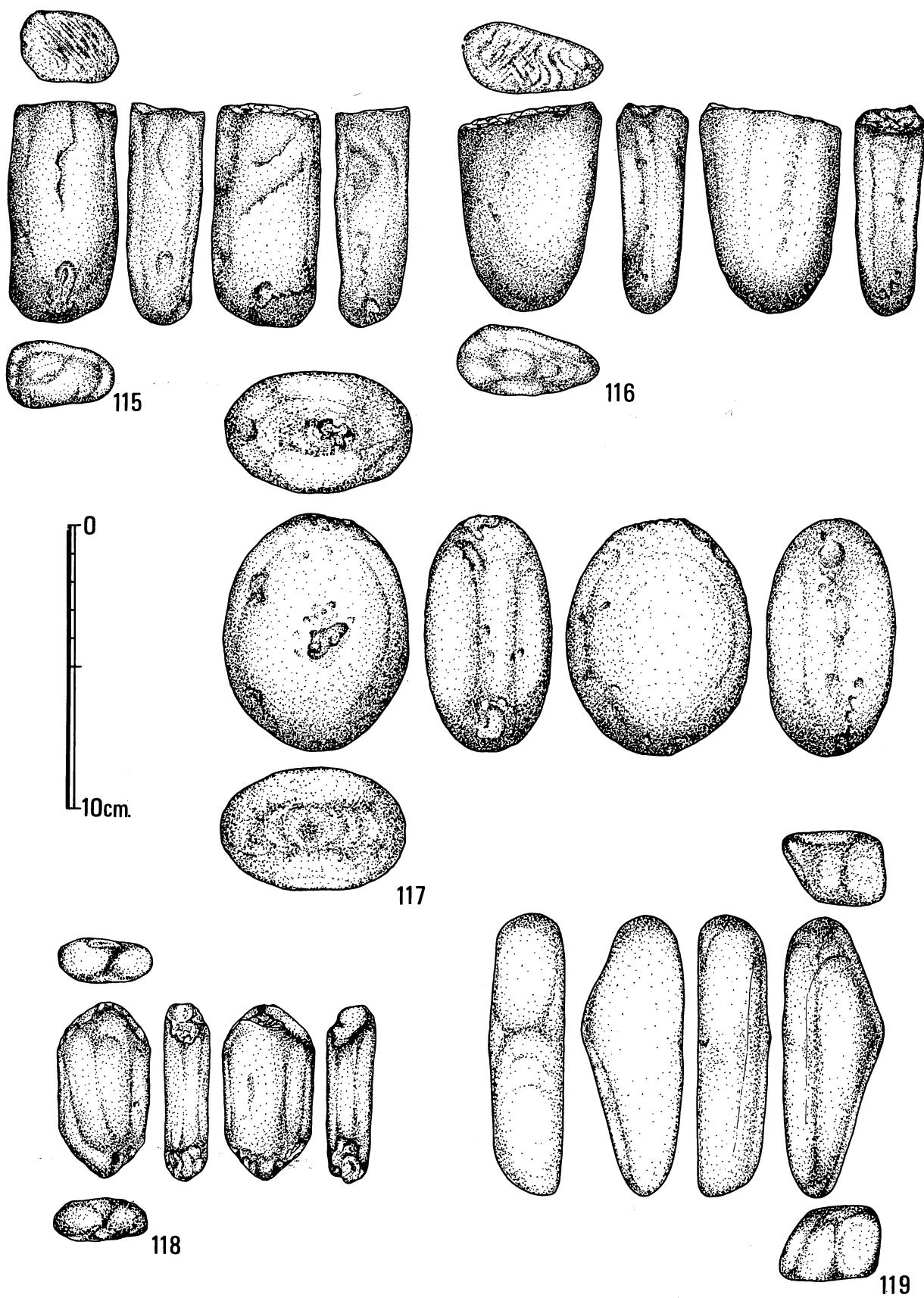


大浦遺跡出土石器実測図 (18)

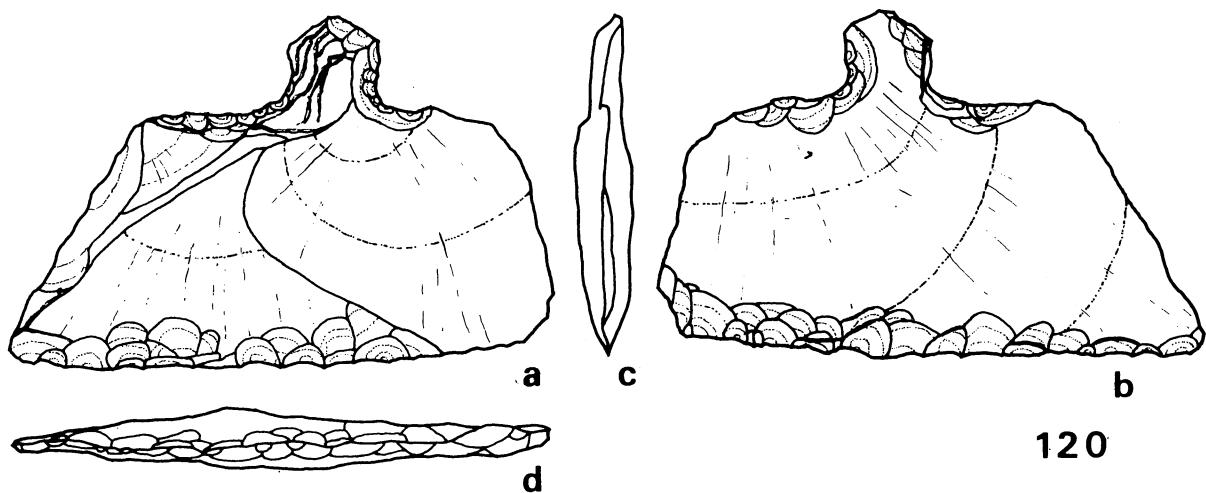


大浦遺跡出土石器実測図 (19)

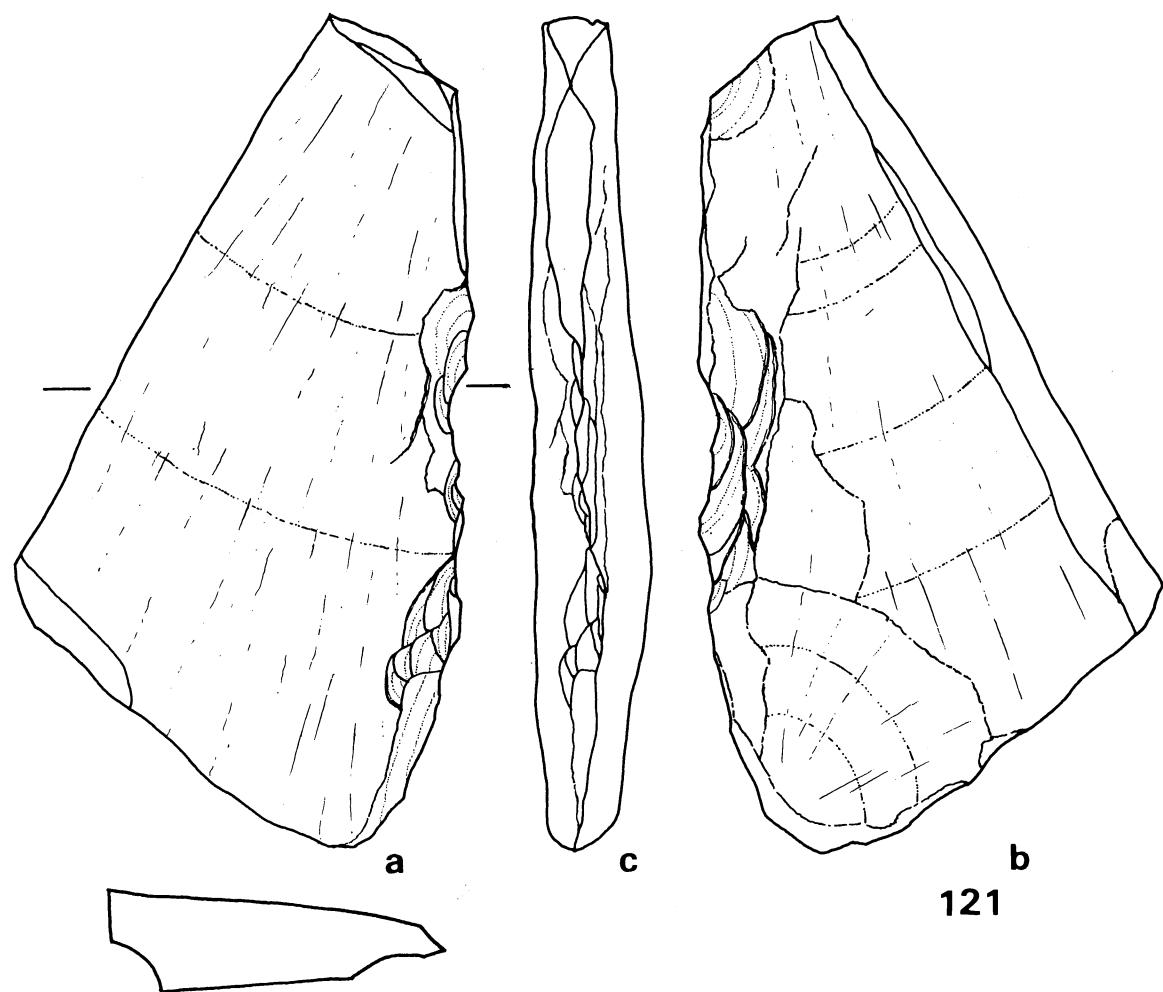
図版 20



大浦遺跡出土石器実測図 (20)



120

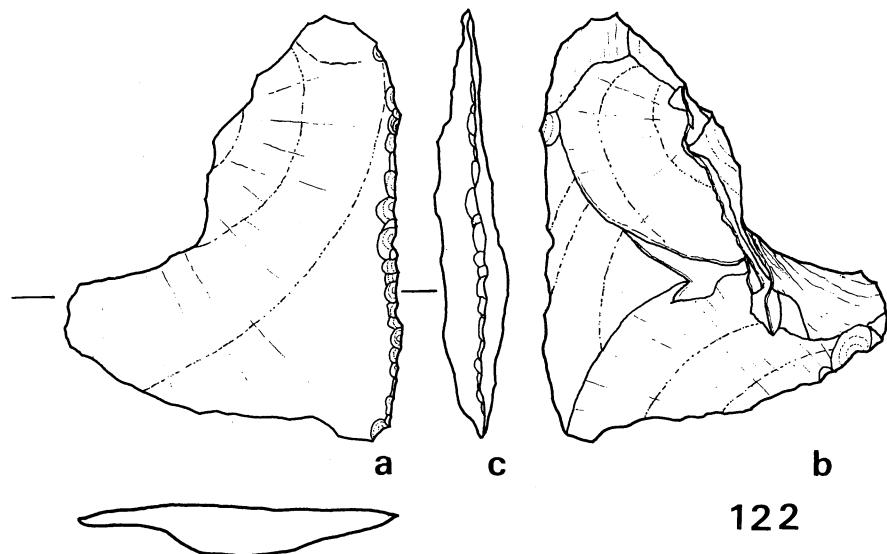


121

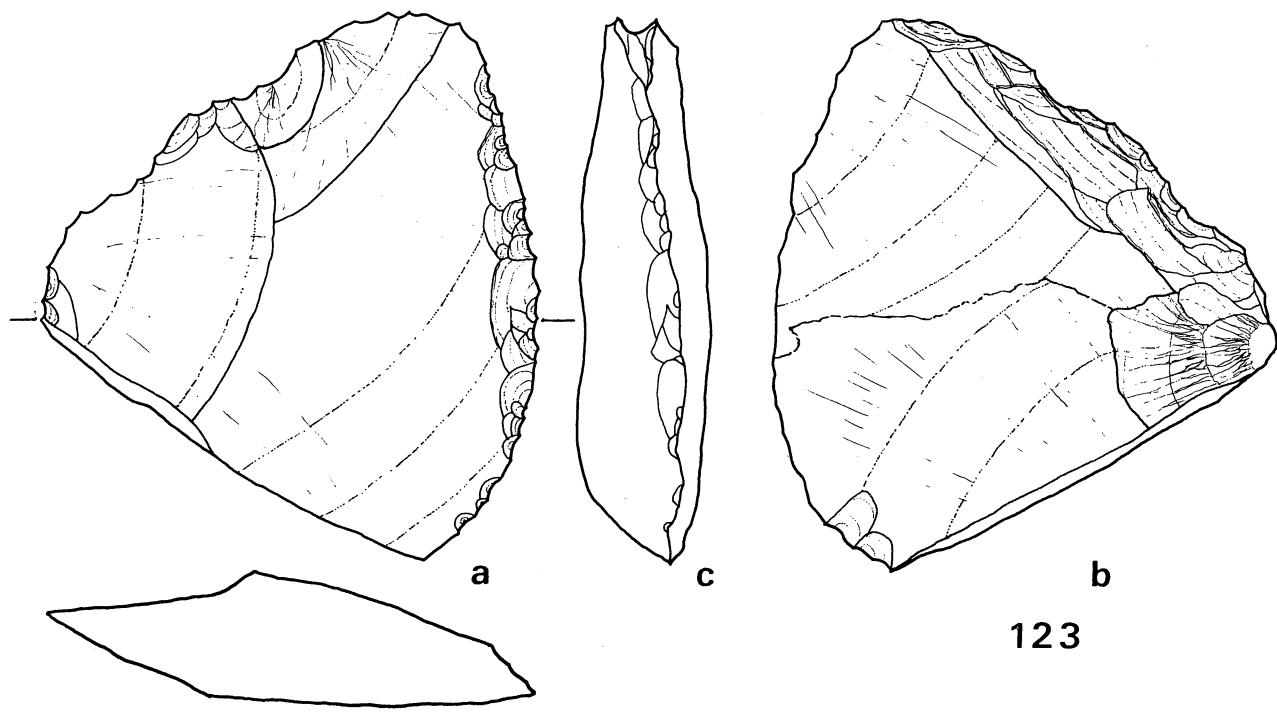


大浦遺跡出土石器実測図 (2)

図版 22



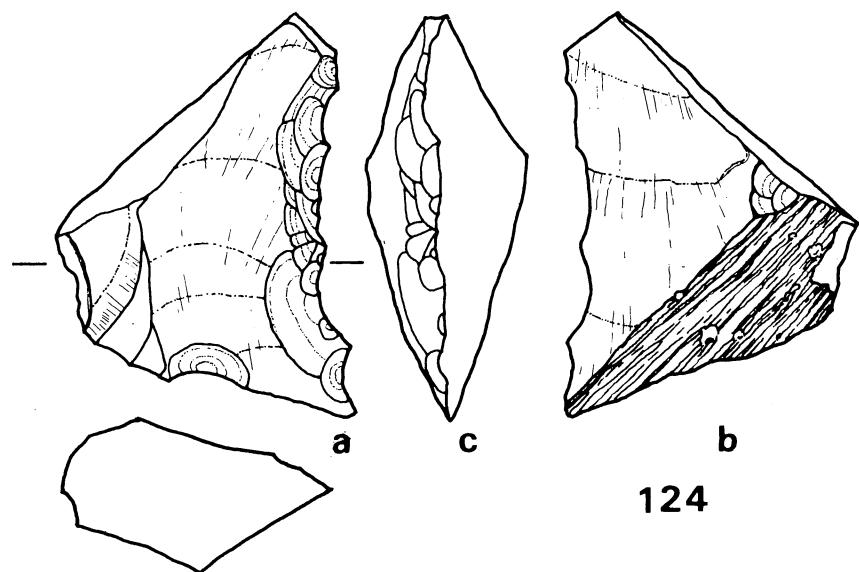
122



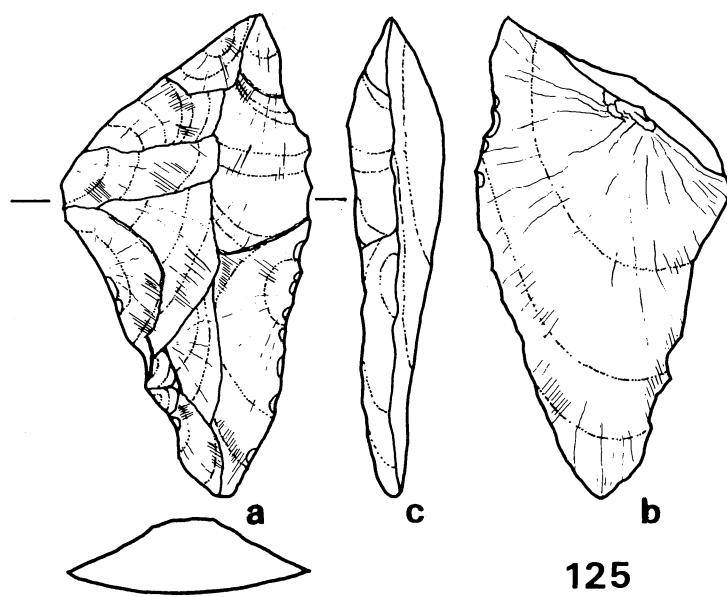
123



大浦遺跡出土石器実測図 (2)



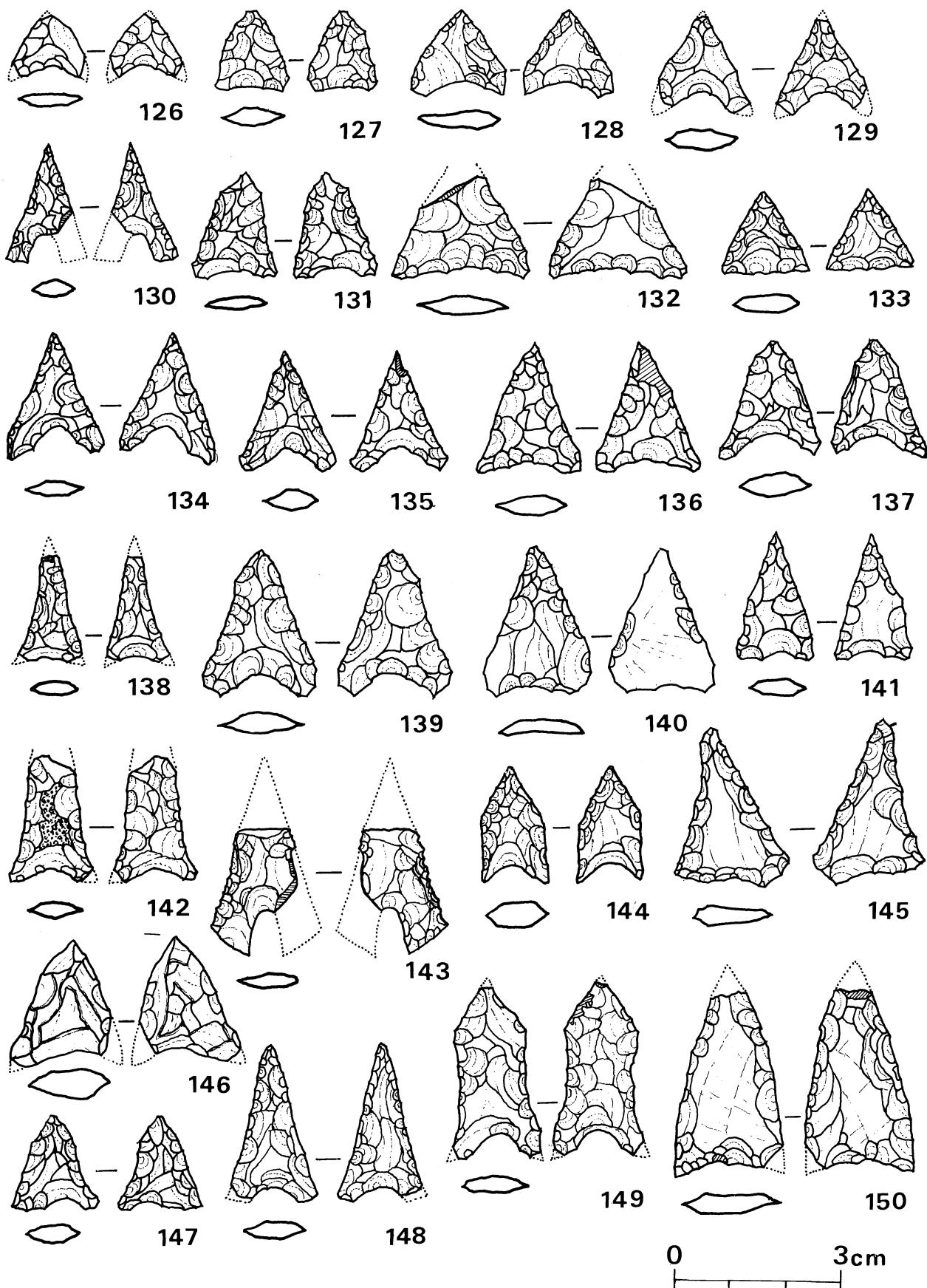
124



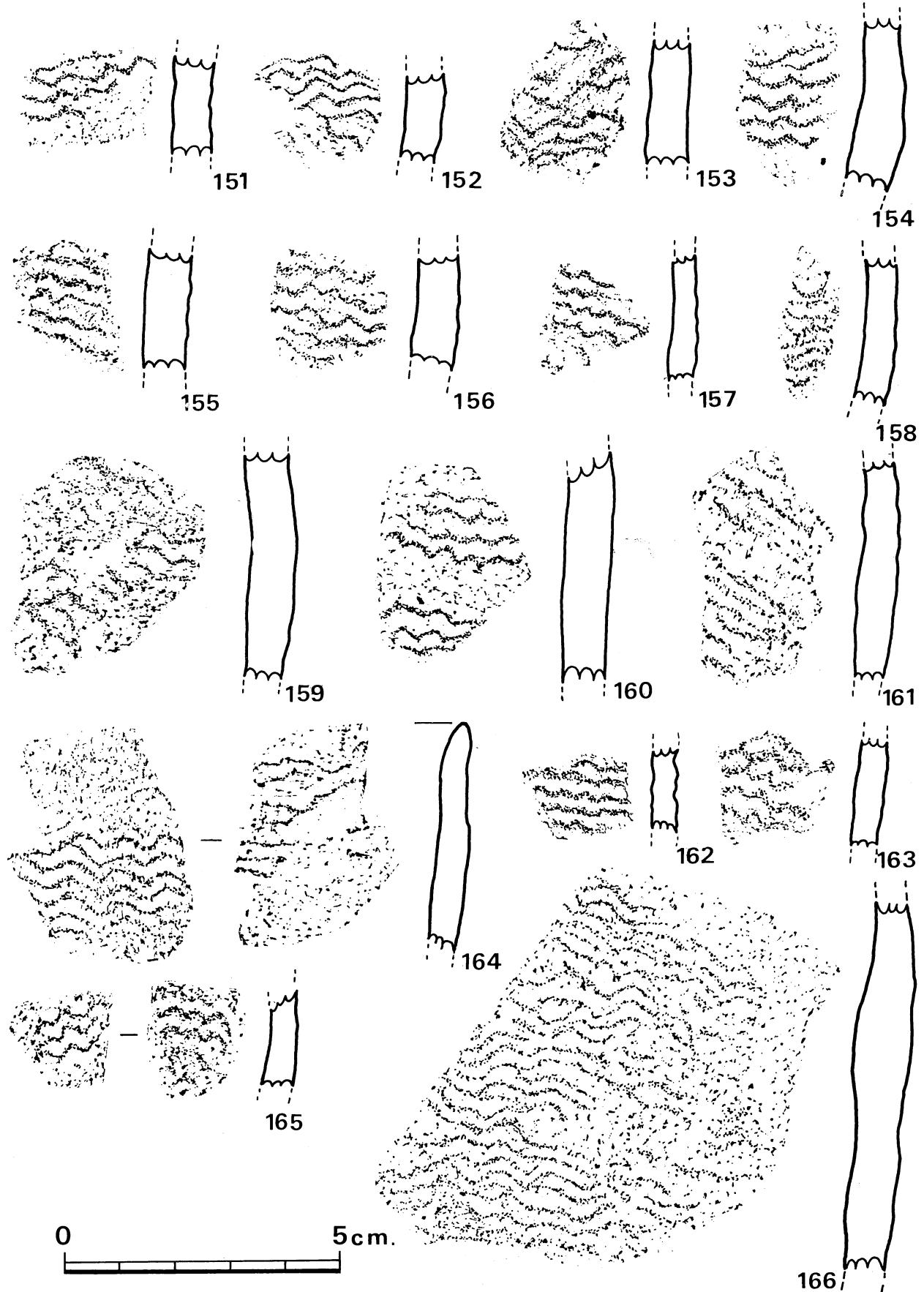
125



図版 24

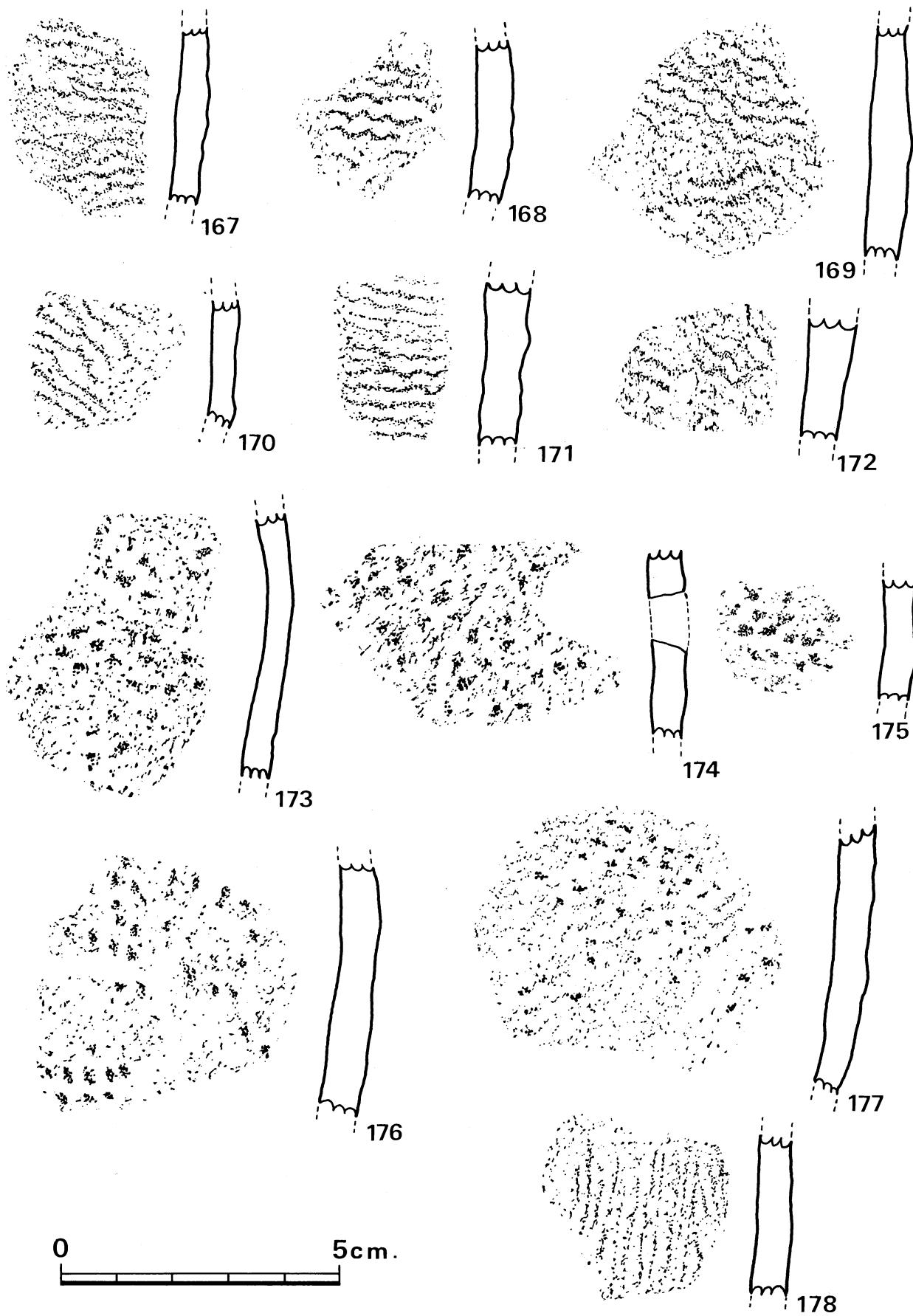


大浦遺跡出土石器実測図 (24)



大浦遺跡出土土器拓影図 (1)

図版 26



大浦遺跡出土土器拓影図 (2)

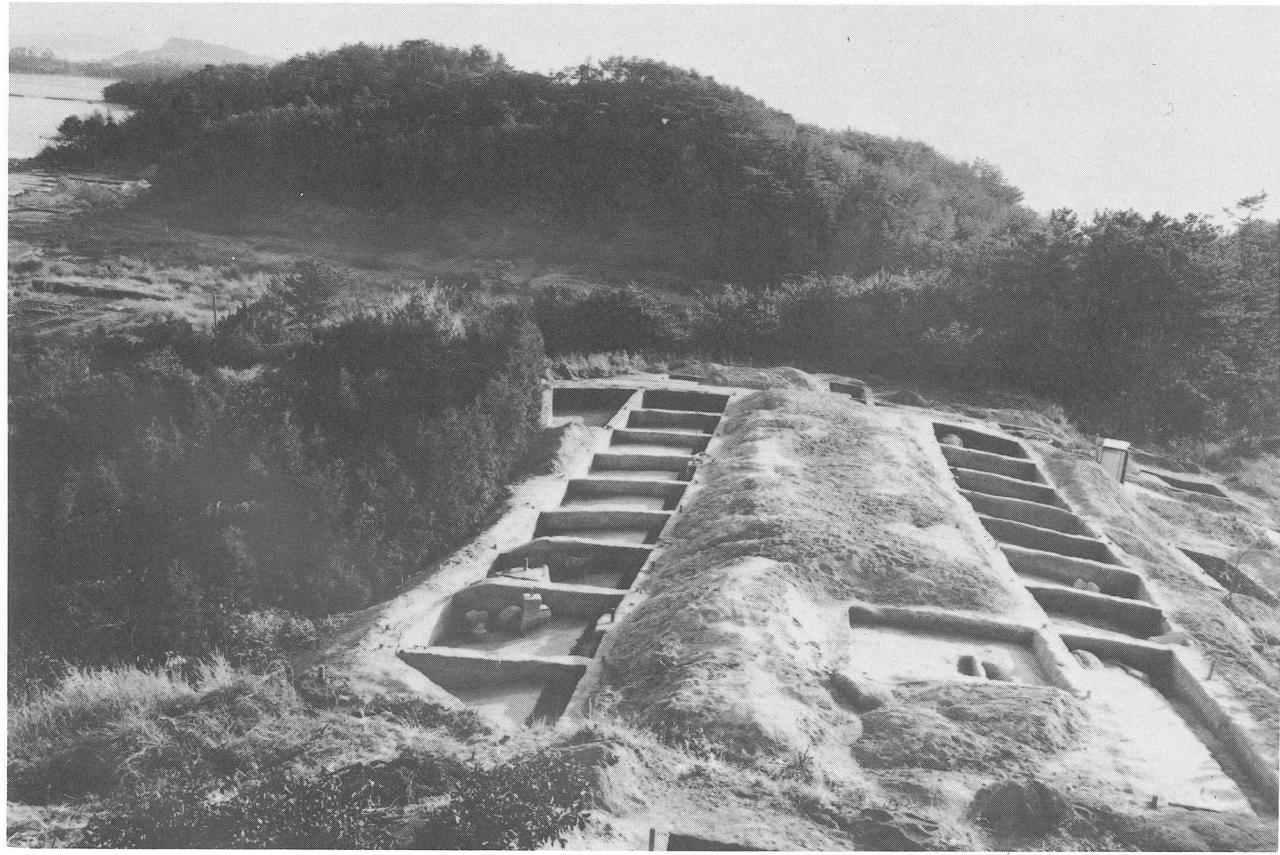


上空より大浦遺跡全景（朝日新聞社提供）

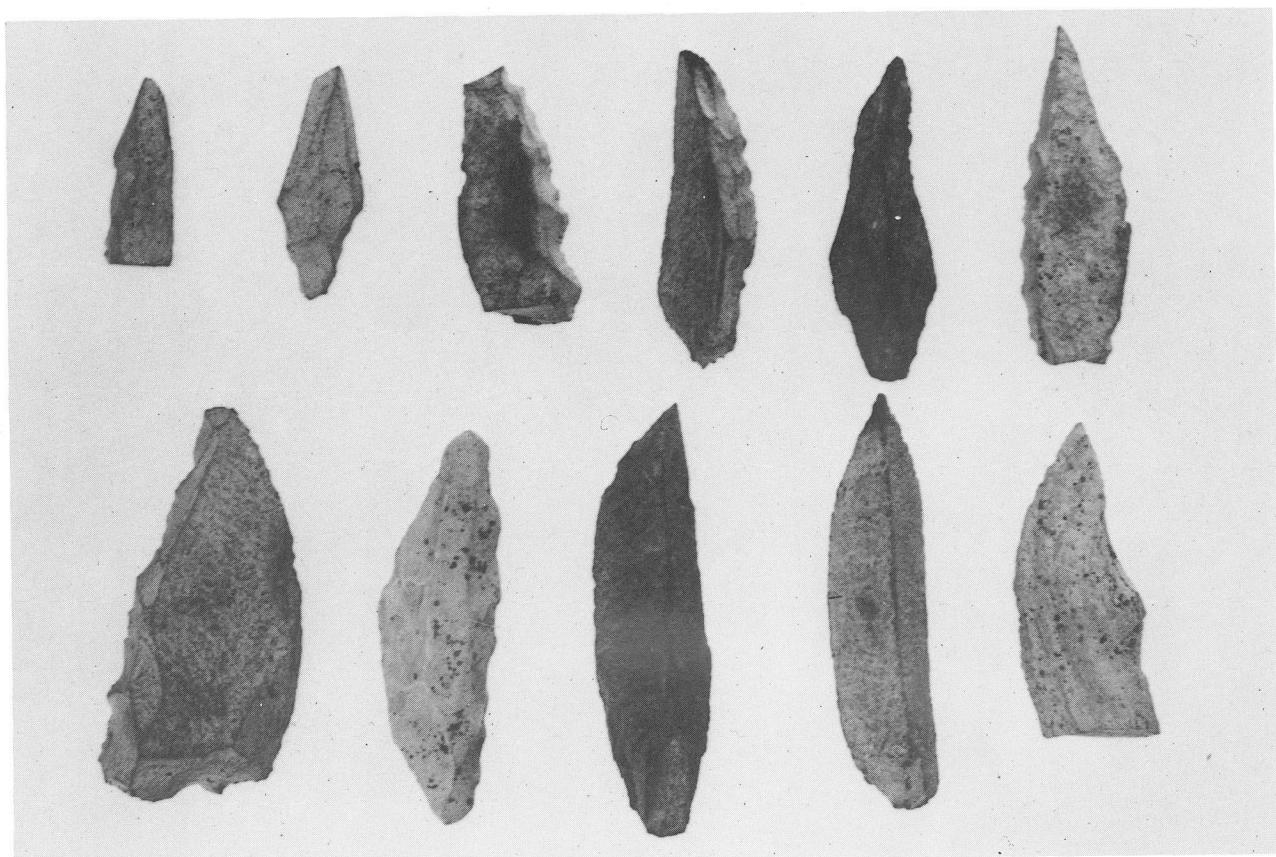
図版 28



(1) 遺跡遠景（東より）



(2) 発掘調査区全景（北より）

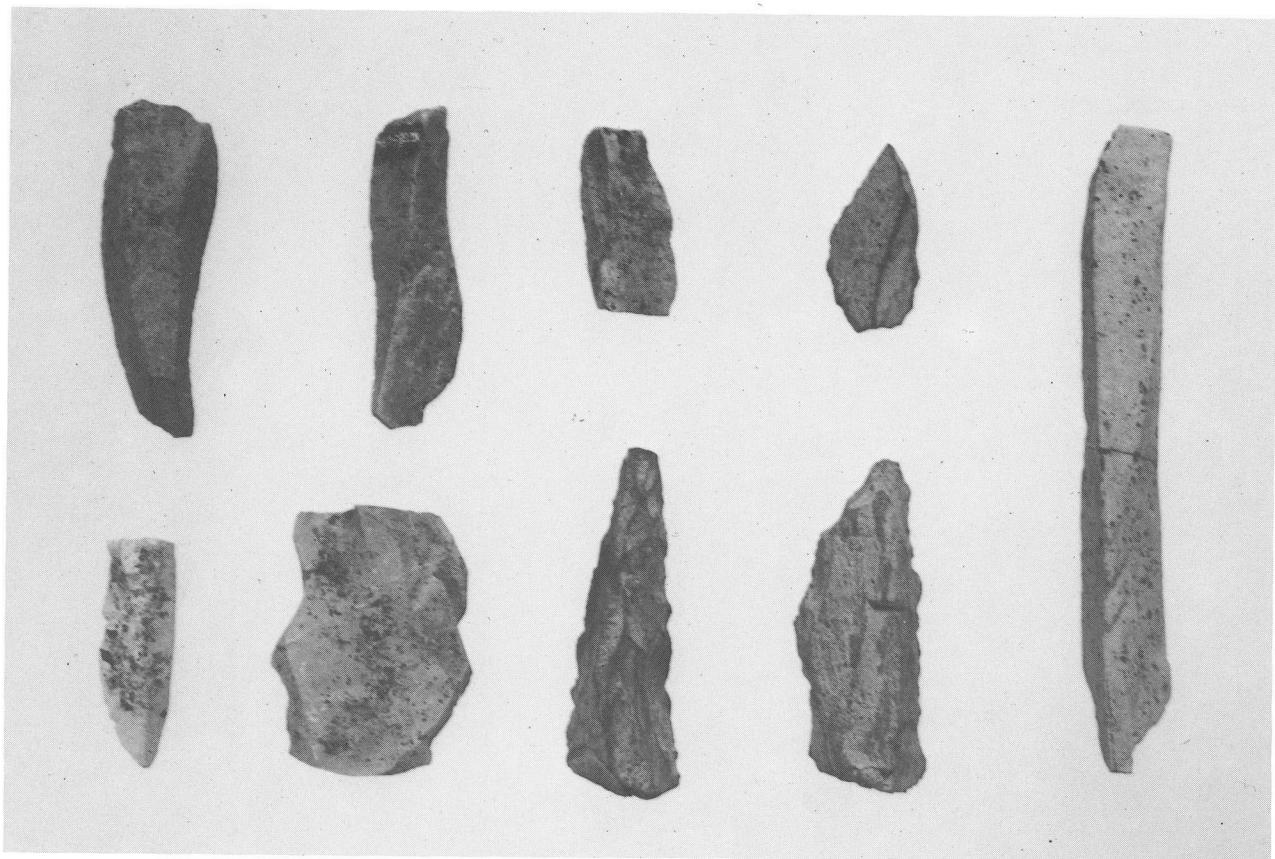


(1) ナイフ形石器

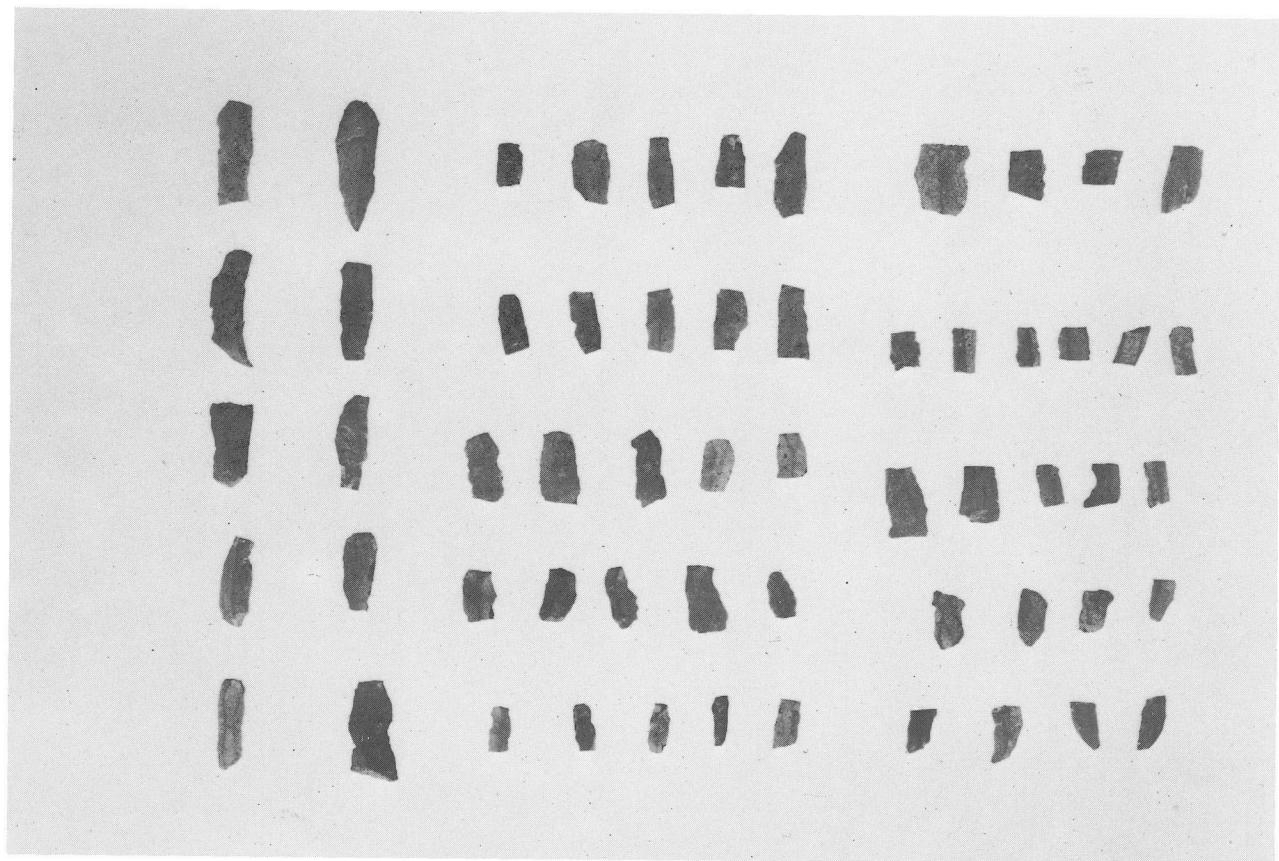


(2) 縦長剝片

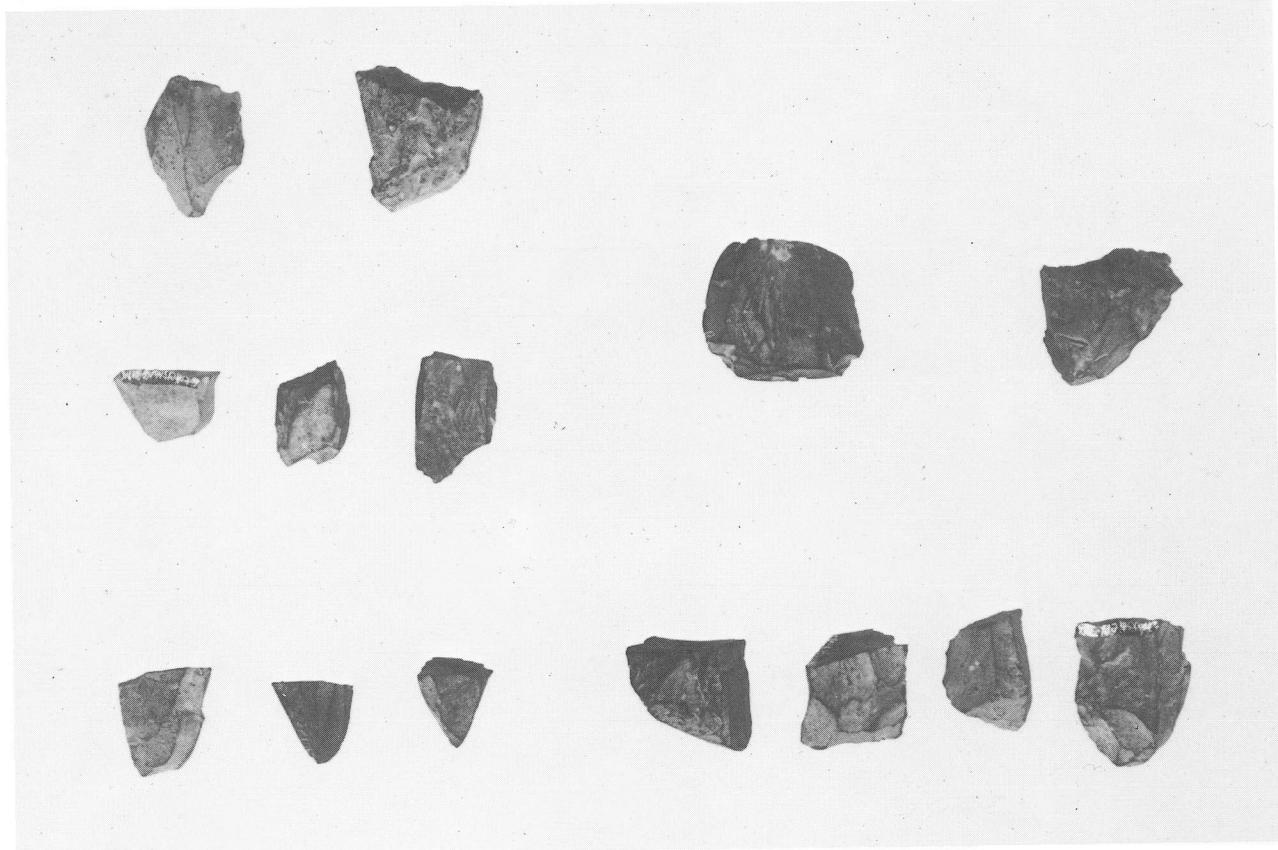
図版 30



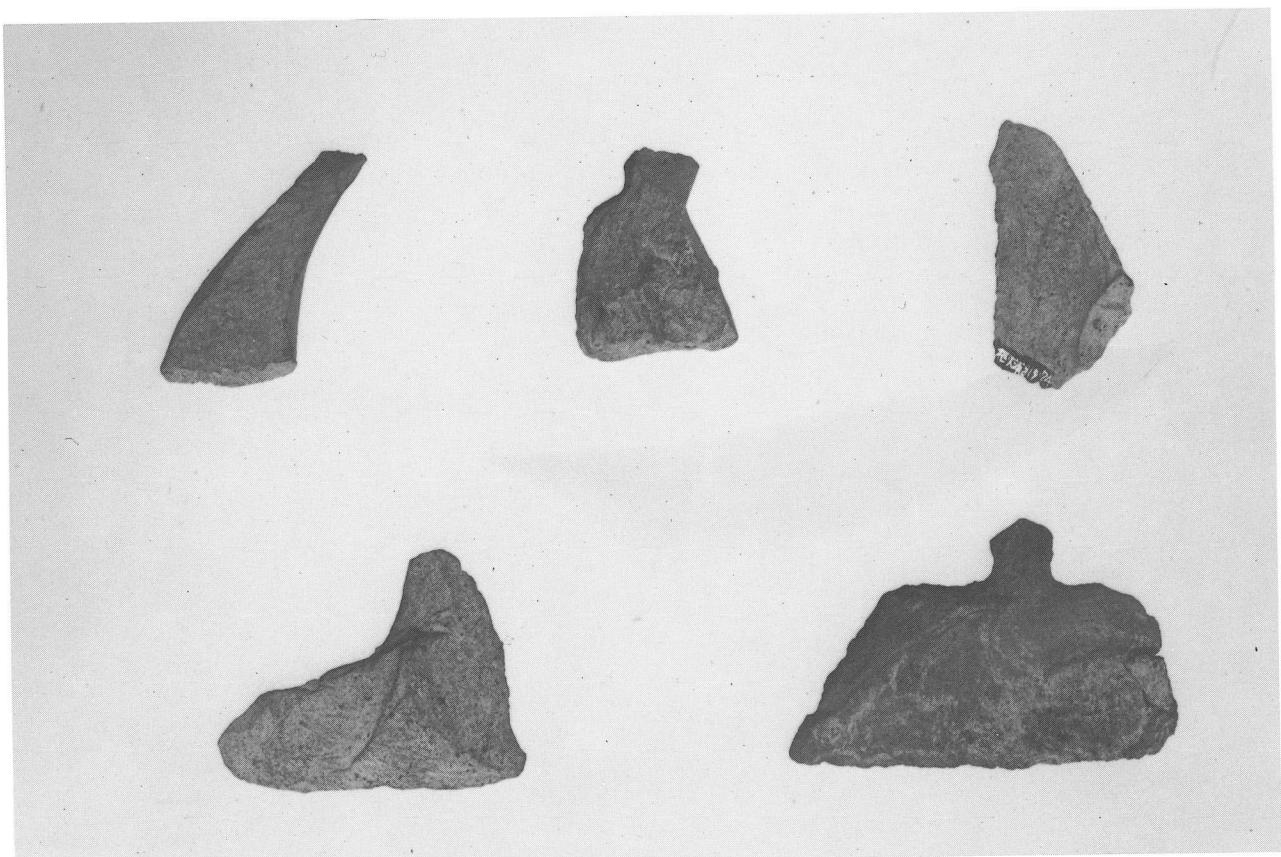
(1) 縦長剝片, 舟底形石器



(2) 細石刃



(1) 細石刃核



(2) 刮 削 器

VI 大浦浜遺跡の調査

VI 大浦浜遺跡の調査

1 はじめに

櫃石島は、瀬戸内海のほぼ中央部で、岡山県寄りに浮ぶ小島で、東経 $133^{\circ}50'$ 、北緯 $34^{\circ}35'$ 付近に位置している。

島の総面積は 0.85km^2 、海岸線の総延長は 5.4km である。この島で最も大きな浜が、大浦浜である。

大浦浜は島の南東部にあり、南・北・西は山で仕切られ、東側が海岸線となっている。南北の海岸線の長さは約 400m で、奥行きは 250m ある。汀線から西へ 100m までが砂地で、それより奥は湿地帯である。湿地部はかつては水田として利用されていたが、現在は一部畠となっている所もあるが、ほとんどがカヤやアシが繁茂し荒れるに任せている。

一方、砂地のところは畠地として利用されており、植えられた作物の間に無数の土器片を見る能够である。ここが大浦浜遺跡である。

さて、瀬戸内沿岸の海岸や、島々の砂浜の上にはおびただしい土器片が散乱しており、この謎の解明が発端となり、古代の製塩法が明らかになってきたことは有名であるが、この大浦浜も戦前から遺跡として知られていたらしく、「師樂式土器」の命名者である水原岩太郎氏の著作⁽¹⁾にその名をみることができる。

戦後になってからも、種々の著作に紹介されているが、発掘調査されたことはなかった。

昭和37年、坂出市教育委員会川畠迪氏によって、現在の櫃石中学校校庭の一部が発掘され、師樂式土器や中世土器が出土している⁽³⁾が、詳細については未報告である。

その後、本州四国連絡橋工事が具体化し、児島・坂出ルートがこの島を通ることが予想されたため、香川県教育委員会は架橋工事に先立ち遺跡調査を立案した。

昭和46年の遺跡分布調査につづいて、昭和51・52年度に、本調査のための予備調査が行なわれた。

大浦浜における昭和51年度の予備調査は、砂浜全域に $4 \sim 6\text{ m}^2$ のトレンチが78ヶ所設定され、調査が実施された。その結果、標高約 2 m の砂地部から縄文後期から中世に至るまでの遺物が検出され、長期にわたる複合遺跡であることが確認された。又、各時代の遺跡が砂浜全域にまんべんなく広がるのではなく、場所的にまとまりがあるのではないかと推定された。⁽⁴⁾

次の52年度の予備調査は砂浜の西に広がる湿地部が対象地区となり、前年度の調査結果をふまえた上で、各時代の後背湿地の、地形変化、利用方法などを知るために、 8 m^2 のトレンチを6ヶ所設け調査が実施された。その結果、各土層に遺物は少量しか包含されていないため不明な点は多かったが、海進によって縄文後期にはすでに東側の砂浜が出来上り、そのため谷がござされ湖沼が形成され、それが徐々に埋没していったものと推定された。⁽⁵⁾本調査では花粉分析などの作業を行い、各時代の様相や利用方法などを解明することが期待された。

以上のような研究史や予備調査の結果を踏まえて、本調査が実施されることになった。

大浦浜遺跡は約¹ ,000m²の広がりをもつと推定される。そのうち工事で破壊されるため調査範囲²に入っているのは約20,000m²で、第1次調査である本年度は南部の約7,000m²を調査地区とした。この選地は工事期日との関連や、未買収地のため、耕作がなされていない場所を選んで調査を進めたためである。

発掘調査は昭和55年5月22日から開始された。検出された遺構は建物址、土坑、ピット、粘土遺構、炉跡、焼土などであり、出土遺物は、多量の製塙土器をはじめ、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、瓦器、土錘、蛸壺、獸骨、貝類、石製品、奈良三彩小壺、帶金具、皇朝十二錢など豊富である。

今回の調査で注目される点は、性格不明の粘土遺構と奈良時代の祭祀関係遺物の検出であろう。前者は、古代～中世の製塙法をより具体的に解明する重要な資料となり、後者は古代の国家的祭祀の実態を追究する資料となるであろう。

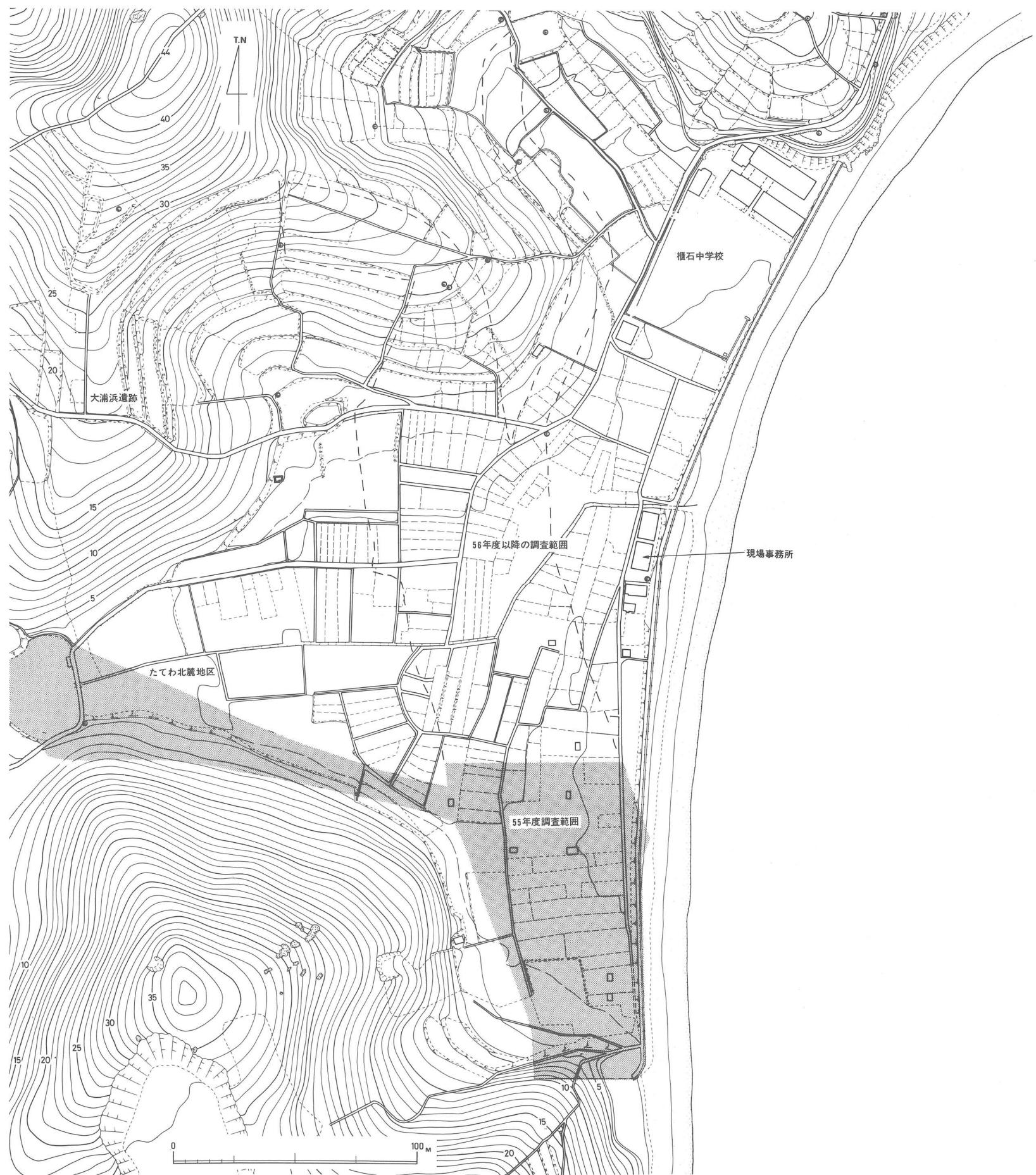
以上のような貴重な成果を上げながら、調査は現在も進行中である。本概報は、55年12月末までの調査結果を主にとりまとめたものであり、本年度調査で収録できなかった部分は次年度の概報か本報告で報告する予定である。
(大山)

注

- (1) 快舟散史「考古行脚」『吉備考古』16号・22号 昭和8・9年
水原岩太郎『師楽式土器図録』昭和14年
- (2) 武田葭子「師楽式土器及びその文化について」『遺跡』22号 昭和30年
東山包雄「櫃石というところ」『岡山春秋』66号
- (3) 川畠迪氏よりの御教示による。
- (4) 香川県教育委員会『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財予備調査報告(Ⅰ)』昭和52年
- (5) 香川県教育委員会『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財予備調査概報(Ⅱ)』昭和53年



第1図 昭和52年度大浦浜予備調査風景写真



第2図 大浦浜遺跡地形図

2 位置と環境

一周辺の製塩遺跡を中心の一

櫃石島は瀬戸内海に点在する島々のひとつで、香川県坂出市櫃石に所在する。位置的にはむしろ本州に近く、下津井とはわずかに1キロメートル余りを隔てただけの近距離にある。櫃石島の歴史については別稿に詳しいので、ここでは、古墳時代前期～奈良時代前期にわたって多数の製塩土器と奈良三彩小壺、数点の船形土製品、ミニチュア土器等を出土した東岸の大浦浜遺跡の性格に焦点を合わせ、備讃瀬戸に分布する製塩遺跡とそれに関係したと思われる祭祀遺跡についてみていく。

香川県内の製塩遺跡はその散布地を含めて50ヶ所以上に点在し、そのほとんどが、小豆島、豊島等島嶼部にある。また、船越遺跡（三豊郡詫間町）等数ヶ所みられる香川県本土での分布も沿岸部に限られている。調査報告例は少ないが、その先駆ともいえるものが、喜兵衛島発掘調査団による喜兵衛島遺跡群の調査である。櫃石島の北東約18キロメートル、香川県高松市直島町に属する無人島、喜兵衛島では1953年以来、近藤義郎氏らによって数次にわたり、6～7世紀を中心とした4ヶ所の製塩土器包含層と古墳群の調査が行われた。

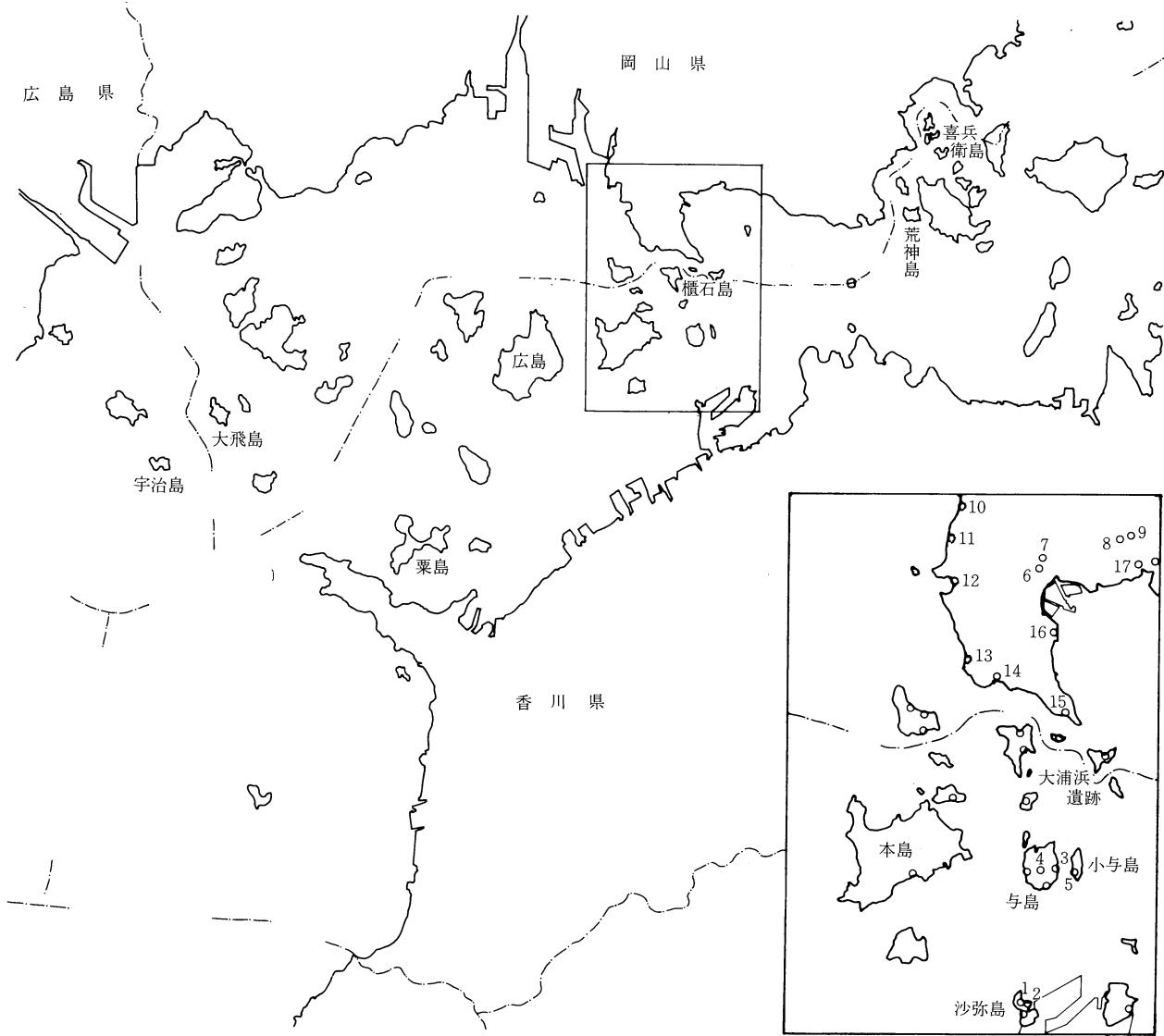
そして、後期古墳の副葬品のなかに須恵器等の一般の遺物に混じって完形の製塩土器^{注(3)}が存在したことにより、古墳群を営んだ人々が製塩集団と同一の人々であるという結論を導いた。さらに5ヶ所の石敷遺構の付着物化学分析によって、製塩「炉」^{注(4)}の存在を立証した。このような近藤氏らの業績によって、従来あまり顧みられなかった粗製で変化に乏しい製塩土器が少しづつ注目されるようになってきた。

1960年には大洲浜遺跡（No.3）で、短期間の調査が行われ、弥生土器、土師器、須恵器とともに古墳時代初頭と思われる製塩土器も報告されている。また、本概報にも収録されているように、与島西方C地点（No.4）で弥生時代～古墳時代はじめの包含層中より、脚部破片が2点出土している。そして、与島のすぐ西側、約500メートル海を隔てた小与島の海岸（No.5）からも古墳時代末～奈良時代に至る時期のものが採集されている。また、現在埋めたて工事で陸続きになっている沙弥ナカンダ浜遺跡（No.1）は県下有数の繩文土器の散布地であるが、古墳時代の製塩土器を多数出土し、良好な包含層や「炉」^{注(5)}の存在が知られている。ナカンダ浜のすぐ東側（No.2）にも弥生時代の製塩土器が散布する。

最近の調査例としては、昨年7月に行われた丸龜市広島東岸、立石地区いなだ浜製塩遺跡^{注(6)}があげられる。ここからは6世紀末の須恵器、たこ壺の完形品、有孔石製品などと共に奈良時代の完形の製塩土器（未使用）が出土した。これは備讃瀬戸でも初めてのことであり、今後の研究の重要な手がかりとなろう。

このように、県内には弥生時代～奈良時代に至る製塩土器が分布するが、実態がある程度把握できるものは数えるほどしかなく、散布地が多い割にはその内容がほとんど知られていないのが現状である。

では、対岸の児島半島に目を向けてみよう。ここでも県内同様、海岸線に沿って点々と製塩土器の散布地がみられる。^{注(7)}弥生時代中期末の標式遺跡として知られる仁伍遺跡（No.6）は海拔40メートルの竜王山の山麓、小丘陵の中腹にあり、「粗製台付鉢型土器」として脚付の製塩土器が紹介されている。この種の採集品には台脚部が圧倒的に多く、二次的な火を受けたと思われ



第3図 檻石島周辺の遺跡

る部分が観察される。また、池尻（上之町保育園）遺跡（No.8）は保育園建設に伴って発見、破壊された遺跡で、石鎌、石槍、石庖丁などの石器、壺、鉢、高杯などと共に、製塩に用いられたと思われる台付鉢型土器が大量に出土している。さらに付近の大池遺跡（No.9）でも池の水が干された時に同様の土器片が採集される。そして城遺跡（No.7）では弥生時代中期後半の住居址調査の際、付近から多数の遺物に混じって製塩土器を検出している。^{注(12)}これら弥生時代の製塩土器散布地は、現在の海岸線からみればやや内陸部に位置するといえる。これは弥生時代の地形を復原するうえで示唆的である。それに比べて古墳時代の製塩関係の遺跡は、分布図に取りあげた範囲に関していえば、ほぼ現在の海岸線に沿って点々と存在している。^{注(13)}金浜遺跡（No.10）、塩生遺跡（No.11）、通生遺跡（No.12）、大室遺跡（No.13）、古下津井遺跡（No.14）、大浜遺跡（No.15）、阿津走出遺跡（No.16）、鴻八幡宮馬場遺跡（No.17）等この時期の遺跡は多く知られており、背後に後期古墳が存在する例が多いが、その実態は必ずしも明らかでなく、今後の調査に期待するところが大きい。

以上のように、櫃石島をとりまく備讃瀬戸の製塩遺跡について大まかにみてきたが、これらの製塩遺跡のなかには、実用的とは思われない遺物すなわち祭祀に関係したと考えられる遺物を共伴することもある。大浦浜遺跡も祭祀的な性格を備えた遺跡であり、与島大洲浜遺跡でも大浦浜遺跡出土例と類似の船形土製品を検出している。^{注(1)}これは製塩土器包含層から出土したもので現存長13cmを測るほぼ完形に近い土製模造品である。手捏成形された船体部に貫通孔を有する誇大化された舵部が接合され、船体はゴンドラ形で、上からみると長方形を呈している。^{注(2)}また、栗島の東風浜遺跡（三豊郡詫間町）にも出土例があるという。このような船形土製品は他県では二・三の例しかみられない珍しいものである。

次に手捏土器の出土地としては、荒神島遺跡（香川郡直島町）、沙弥ナカシダ浜遺跡、善通寺佐伯八幡遺跡（善通寺市善通寺町）、^{注(3)}船越遺跡、小豆郡伊喜末などがあげられる。船越遺跡では縄文～古墳時代に至る土錘、石錘、叩き石、製塩土器と共に径4cmの青銅製素文儀鏡、^{注(4)}手捏ね土器数個が出土している。いずれも表採品ではあるが6世紀頃のものと推定される。

また、弥生時代末～古墳時代初頭の良好な遺物包含層をもつ高屋遺跡（坂出市高屋町）でも^{注(5)}甕形の小形手捏ね土器が1点出土している。

このように小型の手捏ね土製品を出土する遺跡を挙げてみると、大浦浜遺跡をはじめとして、善通寺佐伯八幡遺跡を除くすべての遺跡が製塩土器を出土していることに気づく。しかし、これをもって手捏ね土製品が製塩に関連した祭祀の遺物と断定することは困難である。それらは出土状況等今後の細かい分析によって徐々に明らかになるであろう。

そして、奈良三彩の県内出土例としては今度の大浦浜遺跡の例が初見であるが、備讃瀬戸に視野を広げると、櫃石島の西南西約29キロメートル、本州と四国の中間にあたる瀬戸内海の海上に浮かぶ大飛島が著名な祭祀遺跡として知られている。大飛島遺跡（笠岡市大飛島）では未攪乱の第7・8平行層より、奈良三彩蓋付小壺（蓋13個分、身7個分）が出土し、その中のひとつは大甕の中に蓋を伴わずに安置されていた。

また、大浦浜遺跡にもみられる皇朝十二銭のうち、承和昌宝、長年大宝、寛平大宝、乾元大宝を除く八種約80枚が発見され、奈良時代～平安時代のある時期まで中央との結びつきをもつた祭祀が営まれていたことを物語っている。さらに西方の宇治島（広島県福山市）北岸の縄文土器、製塩土器等の散布地で、奈良三彩と思われる小片が採集されている。^{注(6)}

このように、瀬戸内海の海上交通の要衝と思われる島々から出土している奈良三彩が、櫃石島から出土したことの意義は大きい。

注

- (1) 真鍋昌宏「櫃石島の歴史」本書
- (2) 古くから用いられてきた「師樂式土器」の呼称は、製塩土器の研究が進むにつれて「狭義の製塩土器」との混乱が予想されるようになってきた。（間壁葭子「IV章、製塩土器についての一、二の問題」『倉敷考古館研究集報』第14号、1979年8月）本小稿では「製塩に使用された土器」という限定的な意味をもたせたいため、あえて「師樂式」の名称は用いない。
- (3) 西村尋文、池内万知子氏のご教示によるところが大きい。
- (4) 喜兵衛島発掘調査団「謎の師樂式」『歴史評論』72号 1956年1月号 河出書房
- (5) 近藤義郎「師樂式遺跡における古代塩製造の立証」『歴史学研究』第223号 1958年
- (6) 森井正「坂出市与島貝塚」『香川県文化財調査報告』7 1960年 香川県教育委員会
調査当初「与島貝塚」の名称が与えられたが、現在、字名によって「大洲浜遺跡」改称されている。
- (7) 瀬戸内海歴史民俗資料館、松本敏三氏のご教示による。

- (8) 近藤義郎「土器製塩と焼き塩」『考古学研究』第22巻3号 1976年
近藤義郎「土器製塩の話(4)」『考古学研究』第27巻2号 1980年
- (9) 現地説明会資料による
- (10) 多和和彦「児島半島における師楽式土器の分布」『古代吉備』第1集 1958年
多和和彦「児島半島における師楽式土器の分布(追加)」『古代吉備』第3集 1959年
『倉敷の古代』 1972年 倉敷考古館
- (11) 山本慶一「倉敷市児島仁伍遺跡」『倉敷考古館研究集報』第8号 1973年
- (12) 間壁葭子「倉敷市児島上之町保育園内の遺跡」『倉敷考古館研究集報』第6号 1969年
- (13) 『倉敷市(児島)城遺跡発掘調査報告』1977年 岡山県教育委員会、岡山県文化財保護協会
- (14) 松本敏三「坂出沖の祭祀遺跡」『瀬戸内海歴史民俗資料館だより』第10号 1980年
- (15) 松本敏三氏のご教示による。
- (16) 千葉幸伸・松本敏三『瀬戸内海地方祭祀遺跡地名表』1978年 瀬戸内海歴史民俗資料館
- (17) 松本敏三氏のご教示による
- (18) 亀井正道「祭祀遺跡」『新版考古学講座』8 1971年 雄山閣
- (19) 香川県文化行政課、齊藤賢一氏のご教示による
- (20) 鎌木義昌・間壁忠彦『大飛島遺跡』倉敷考古館研究小報1 1964年
- (21) 善通寺市、安藤文良氏蔵



第4図 備讃瀬戸航空写真

3 調査の経過

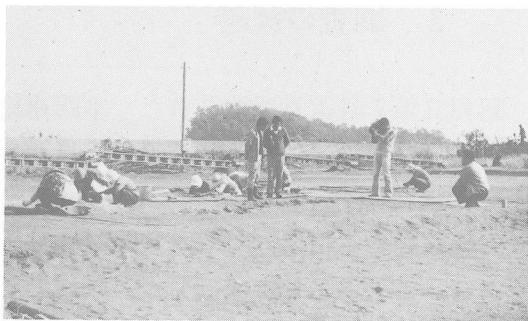
昭和51年7月より開始された 本四連絡橋建設に伴なう埋蔵文化財予備調査より、4年11ヶ月の月日が過ぎ去った。昭和55年5月22日より櫃石島最大の遺跡である、大浦浜遺跡の調査が開始された。調査面積は、約20,000m²に及び、調査期間も2ヶ年が予定されている。調査範囲は、櫃石島中学校西側谷筋から長崎通り山裾まで、直線距離にして約400m計る、砂州上一帯であり、このあたりは大部分が、畠地として利用されている。本年度調査は、第1次調査で、南部の約7,000m²が調査範囲である。

調査目的は、予備調査で呈示された、縄文時代から中世にかけて、存在していたと考えられる、生産遺跡の解明に主眼が置かれた。

調査日誌抄

- 5月22日 現場作業初日。調査員3名作業員19名、発堀区草刈開始。5×5mの調査区画決定。
- 5月26日 草刈り続行中。借地交渉のため、庶務係来島地権者と土地範囲、立毛の確認。
- 5月28日 発堀開始。C～F-25・26区から着手する。
- 5月29日 事務所用プレハブ搬入日。7:30江戸桟橋より出発9:30大浦浜到着、15:30荷上げ完了。
- 6月3日 C～F-22～24区調査進む。F側で須恵器出土目立つ。プレハブ建設開始。
- 6月5日 第2・3層除去。転磨した遺物多し。
- 6月9日 濃霧の為通船の出航1時間遅れる。電気工事終了。坂出より物品届く。与島より大浦遺跡発掘用具届く。
- 6月10日 E・F-25区写真撮影
- 6月11日 F-23区でモルタル状の巾5cm帶が円形に回るS×02と命名。H-26で土器片集中。
- 6月13日 作業員賃金支配日。庶務係来島。H-26区土器集中区25区に続く。G-25区2層除去終る。
- 6月17日 ベルコン・ビター到着。借地契約作業続く。C・D・E-20区2層発掘
- 6月19日 ベルコン用電気工事始まる。
- 6月26日 遺物水洗いを行なう。与島調査員藤好・白本氏見学。
- 6月30日 J-15・16調査開始。
- 7月4日 久しぶりの晴、ベルコン本日より使用。K・L・M-15・16区着手、遺物少ない。
- 7月8日 文化庁稻田孝司氏来島。
- 7月9日 3日連続雨が降る。借地契約の為庶務係来島。
- 7月14日 雨の降らない日なし。遺物の水洗いを行なう。奈良三彩らしい破片2点出土！
- 7月15日 久しぶりの晴れの日である。湧水が激しい。S X 01～03精査進める下層に石あり。K～N-15～20区発堀着手。
- 7月18日 N-18・19・20区1層除去
- 7月23日 花見山調査終了。
- 7月24日 K～N-15～20区3層発掘着手
- 7月29日 I・J列再開。浜の第2期埋め立て始まる。砂取り中地表下150cmで遺物包含層現われる県庁及び市港湾課へ連絡。
- 7月31日 香川大学歴史研究会20名程見学。
- 8月1日 作業中止。実測をする。作業員花見山埋戻し作業に行く。
- 8月4日 作業中止。出土遺物の水洗い。高松市教委主催親子歴史教室メンバー130名見学。13日から15日盆休み。坂出事務所にて整理。
- 8月18日 久しぶりの現場10時過ぎより雨。津田高校多田教諭他生徒4名発堀に参加。
- 8月19日 久しぶりに作業員浜に集合。坂出高校内藤教諭他生徒4名発堀に参加。
- 8月28日 F-19区にて船形土製品出土。
- 9月1日 久しぶりの青空であり梅雨があけ夏が来たようである。K～N-15～20区ブルーになる。
- 9月3日 E-13・14区で粘土土坑検出。新聞取材
- 9月5日 C～H-21～26区全体写真撮影。倉敷考古館間壁蓑子氏来島。
- 9月12日 台風一過晴天ならず曇天。K列以西は出土遺物が少なく、かつ混在しており、旧河川だったようだ。

- 9月13日** 本日やっとのことでK-N-15~20区土層図終了雨に涙の日々でした。午後よりベルコン10台フル回転し埋め戻しに入る。
- 9月18日** F-18・19区遺構実測。
- 9月25日** C列土層図作成にかかる。C-24地表下80cm灰白色砂層より弥生中期甕1個体出土。
- 9月26日** H-16区発掘に着手、C-16~20区調査再開。I~J-15・16遺構検出にかかる。埋め戻し排土移動終了。
- 9月30日** 県文化財保護審議会専門委員森井正氏来島。遺構実測進む。
- 10月6日** G・H-18~20区遺構検出に着手G-19~20境界線上で粘土土坑検出。N-22~24発掘着手、同志社大学森浩一・兵庫県教委櫃本誠一・山本三郎氏来島。
- 10月8日** 秋祭りの為作業中止。三彩・船形土製品の写真撮影、遺構の実測進める。
- 10月9日** G・H-19区実測終る。
- 10月15日** 調査員真鍋本日より大浦浜現場。L・N区発掘進む。
- 10月17日** 文化財保護審議会専門委員桜井徳太郎、歴民高橋克夫、中原耕男氏民俗調査で来訪作業員(60才以上)6名から聞き取り。
- 10月20日** G・H-17・18区師楽土坑検出進む。I・J-20区にて土器紛失坂出事務所へ連絡
- 10月23日** SX8004埋土一部除去。午後松本副主幹来島。
- 10月27日** 強風の為現場作業中止、坂出事務所に土器分類J-19区2層800819より船形土製品片を発見。
- 10月28日** 花見山プレハブ解体午後より作業員プレハブ撤去作業にかかる。
- 11月4日** F-9~12区C-9区D-13区発掘着手。J-15~20区実測続行。
- 11月7日** 濃霧の為坂出からの通船欠航調査員大砂古1人現場作業中止土器水洗いを行なう作業員数現場始まって最高の62名1人で走る。
- 11月13日** C~F-9~14区粘土土坑一部堀り始める。
- 11月14日** J-15区において土器集中区検出。SX8006・09堀り抜く。
- 11月17日** J-17~19区で土器が多数検出され始めた。最近、報道取材多い。少し煩しくなる。



第5図 NHKテレビ録画風景

- 11月18日** J-21区にて船型土器品出土。J-15~20区検出土器は土器群とすることに決定。
- 11月25日** 本日より調査員安田坂出事務所で担当分の整理に従事。四国電力海底ケーブル故障で停電ベルコン・排水ポンポンボ働かず。
- 11月27日** SX8010堀り抜く師楽包含層を切っている。SX8007堀り続ける瓦器碗・土師器碗を検出。J-19区にて流木検出焼けた木か炭が多い。
- 12月1日** 本日より調査員林参加。J区土器群、遺物取り上げる。
- 12月3日** たてわ北麓地区草刈り終了。本日より調査員森本参加。C-6・7・8区発掘着手。
- 12月5日** C~F-9~14区遺構写真撮影。C・D-9・10区の遺構実測。
- 12月8日** C-4皇朝十二銭(萬年通宝)検出。J-15~20区土器群取り上げ終了。SX8007実測着手。調査員西村本日より参加。
- 12月9日** 岡山大学近藤義郎氏来訪。
たてわ北麓地区杭打ち。
- 12月15日** 調査員羽床本日より参加。たてわ北麓地区本島作業員で調査着手。
- 12月22日** J-18区第3層にて船形土製品検出。J-16区にて壺原位置移動。
- 12月23日** 午後より土器水洗い。H-13区801213より船型土製品発見。プレハブ間に製作中の物置き本日完成。
- 12月24日** C~F-9~14区遺構にシートを張り砂を置く。午後より現場のかたづけを行なう。
- 12月25日** 本年調査本日にて終了。午前中現場・プレハブ内かたづけ清掃ロープ張等を行なう。
(大砂古)

4 調査区画設定と調査方法

大浦浜遺跡は、櫃石島南東部に位置し、北は宮崎鼻、西は中の丸から南へ延びる低丘陵、南は、たてわから長崎鼻へと、続く丘陵によって区画された地区にあたる。

縄文時代から、中世にかけての複合遺跡である、浜堤部は標高2m前後の地域に広がり、汀線より30~40mにかけてが、最も高くなっている、西に向かって再び低くなり、湿地となる後背地を持つ。この浜堤部は、島民にとって数少ない畠地として利用されており、後背湿地は、一時期水田として利用されていた。

旧石器包蔵地である、ヤケヤマ地区は、中の丸より派生する、東西になだらかな標高20m前後の丘陵上に位置し、この地区も畠地として利用されていた。調査区は、両地区を含めた、最大南北400m・東西100mの広範囲に広がる。

調査区の設定にあたっては、調査区の広範囲なこと、数ヶ年におよぶ調査であることを、念頭において、次の点を考えて行なった。

- (1) 調査区全域において、共用性を持っていること。
- (2) あらゆる地点において独自に調査区の設定が行えること。

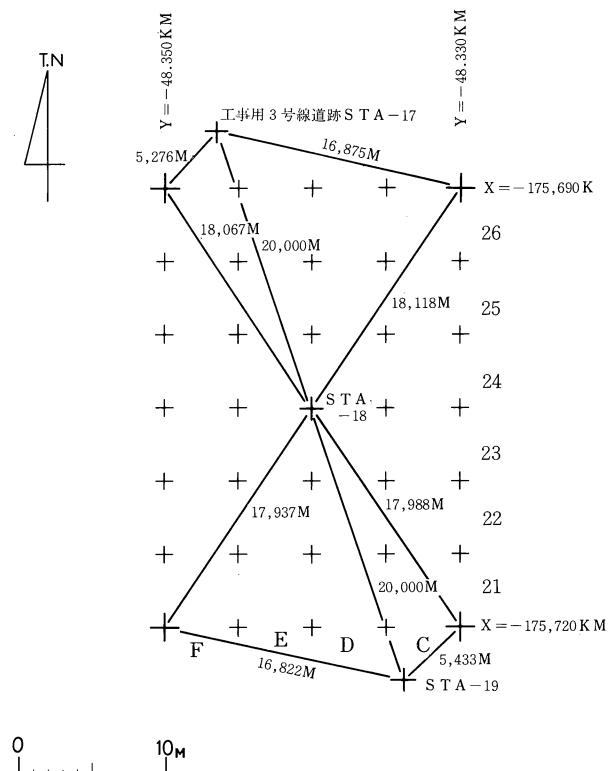
この2点を、満たす為に国土地理院設定の、直角座標系を使用することになった。座標値については、本四公団櫃石島平面図・工事用道路主要点・中間点を、基準として行なった。

本年度の調査地区は、遺跡の南端部であり、調査区の設定にあたり、基軸線を第V座標系 $X = -175.690\text{km}$ ・ $Y = -48.350\text{km}$ として行なった。基軸線Y軸は、浜堤部の最も高い地点を通る。基軸線を中心として、5m×5mの区画の設定を行なった。

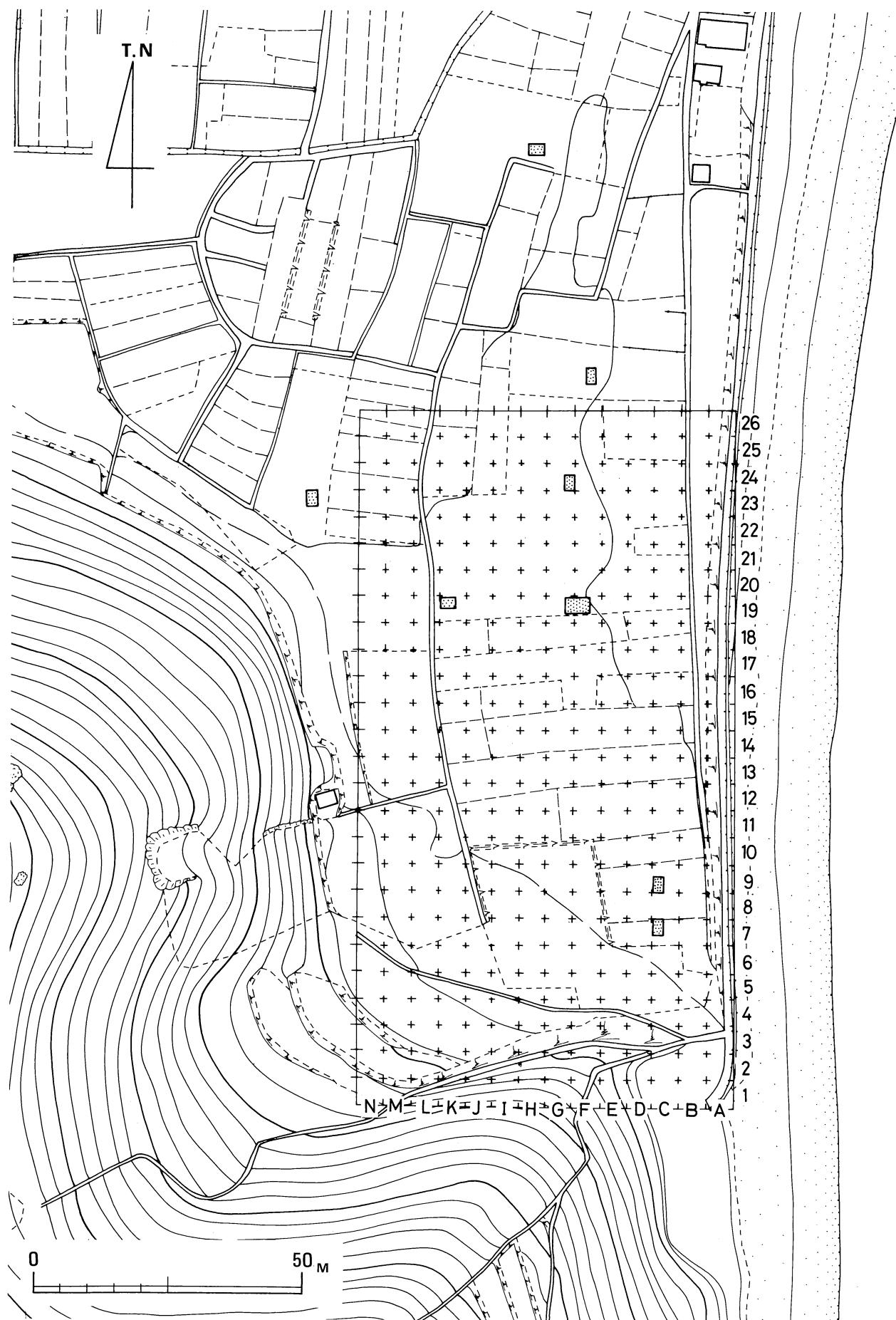
調査区は、最小単位を5m×5mのグリッドとし南東隅より、東から西へA~Z南から北へ1~と、グリッド番号を定め、各グリッドにおいては、北西隅の杭に番号を書くことを原則とした。調査にあたっては、下層における出水等による危険を考え、南北30m・東西20m(24グリッド)を1グループとして行なうことになった。遺物取り上げ、遺構番号等については、各グリッドにおいて終了することを原則とした。

本年度の調査は、B-3区よりN-26区グリッドの範囲におよんでいる。A列の使用を、今回中止したのは、次年度以降の調査においての、必要性を考えあえて使用しなかった。

瀬戸内の製塩遺跡は多くの場合、地表面に土器が多く散乱している。大浦浜も同様であるため、表採の意味をこめて、地表下5cmを任意に第1層とし遺物を取り上ることにした。



第6図 大浦浜調査区画設定模式図



第7図 大浦浜遺跡調査区面図

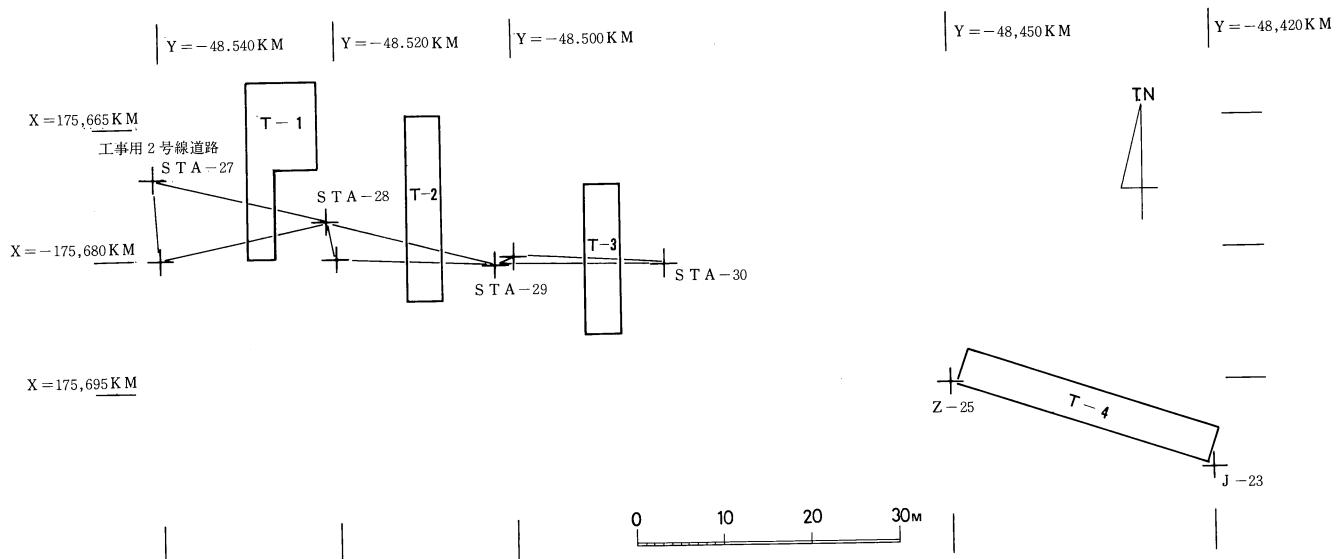
遺構記号はSK, SDなどの略記号を用い、情況に応じグリッドごとや、すべてのグリッドで通し番号をつけるなどした。

(たてわ北麓調査区)

本調査区は、海岸線から200~300m余り西奥へ入った谷筋にあり、山裾部と湿地帯をその範囲にもつ。山側には笹群れ、湿地は、いつも背丈の高い葦や萱が触れ合うように繁茂し、折折に吹く瀬戸の潮風にざわめきの音も耳に親しい所である。

調査区画は、大浦浜本遺跡と同様に第V座標系の座標軸を基軸にして4区画を設定し、西側から東側に向かって、それぞれ第1トレンチ、第2トレンチ、第3トレンチ、第4トレンチと呼ぶことにした。第1トレンチ~第3トレンチは、山裾单傾斜面と湿地帯にまたがり、第4トレンチは平坦部にある。区画設定にあたり、実際の基軸ラインは、本四連絡橋公団の工事用2号線道路STA-27~STA-30を利用して求めた。詳述すると、まず、STA-27~STA-28ラインをもとにSTA-27から南へ70°45'40"振ったラインとSTA-28から南へ27°24'50"振ったラインとの交点、次に、STA-28~STA-29ラインをもとにSTA-28から南へ56°49'50"振ったラインとSTA-28から南へ11°40'40"振ったラインとの交点、さらに、STA-29~STA-30ラインをもとにSTA-29から北へ25°38'50"振ったラインとSTA-30から北へ3°13'20"振ったラインとの交点にそれぞれ杭を打ちこんだ。この3本の杭を結んだラインは、第V座標系X=-175.680kmラインと一致する。(なお、これは、大浦浜本遺跡のNo.28ラインに相当する。)上記のようにして求めた基軸ラインをもとに、第1トレンチ~第3トレンチの区画設定をした。

第1トレンチは、基軸ライン(第V座標系X=-175.680kmのこと。以下、基軸ラインといえれば、これをさすものとする)に3mの辺を置き、南北に20m、北側に8mの辺をもつ鍵形の区画にした。このトレンチの最も高い部分は、標高480cmで、トレンチ北端の湿地部は標高1.75cmである。第2トレンチは、基軸ラインから南へ5m、北へ16mの計21mの南北辺と4mの東西辺をもつ方形の区画に、第3トレンチは、基軸ラインから南へ9m、北へ8mの計17mの南北辺と4mの東西辺をもつ方形区画にした。また、第4トレンチは、大浦浜本遺跡のN-23区から西



第8図　たてわ北麓地区、区画設定模式図

へ30m の地点T-23区とN-25区から西へ60m の地点Z-25区に杭を打ち、この2本の杭を結んだライン上に30m の辺をとり、幅4m の方形トレンチとした。調査区画は、おおむね以上のように設定した。

調査の方法は、山側から湿地への土層のつながり状態を調査、確認するのが主目的であるが、遺構の存在も考えられるので、層序掘りを原則とした。そして、遺構が検出された場合には、写真撮影と平面実測を行うことにした。また、トレンチ壁の土層観察とセクション実測は、基本的には北壁面と西壁面ですることとし、状況に応じて他の壁面でも行うこととした。排土は、作業に支障のない箇所に集積し、湿地部の溜水は排水ポンプにより随時排水しながら発掘することとした。特に、湿地部は壁土が崩落する危険性があるので、安全面には充分に配慮しながら作業を進めている。なお、調査の詳細は、後日の調査報告で明らかにするつもりである。

(大砂古、森本)

5 土層と遺物出土状況

大浦浜遺跡の、本年度対象地区内の現地形をみてみると、東側は海岸線で防波堤によって区切られており、西、南側は山塊によって囲まれた砂地である。砂地の部分は防波堤から西へ約60mまでの幅で、南北は南の山裾から北へ120mの地点までが調査範囲である。

平均標高は約2.0mであるが、山寄りの部分は少し高くなり、2.3～2.5mを計る。砂地の中央に、南の山裾から北へ向って2.0mの等高線が走っている。この舌状の地形は、海進時に形成された砂洲のなごりと思われる。

このように調査範囲内の地形は、南西から北東方向に少し傾斜する地形であるが、北東部は大正年間に砂取りが行なわれた部分で、遺跡は完全に破壊されていた。そこで、破壊のない、C～L-15区の南壁の土層図(第9図)で、遺跡全体の層序関係を説明していくことにする。

最も汀線寄りのC区では、地表面から地山まで約1mの砂層の堆積が認められる。地山は海方向に傾斜している。この1mの堆積中に縄文晩期から中世までの遺物が含まれている。第1層は表採の意味も含めて任意に設けた厚さ5cmの層である。第2層は10～20cmの厚さで、第1・2層とも現代の耕作土ですべての時期の遺物を包含している。第3層は奈良時代を中心とするほぼ純粹な遺物包含層で、尖底の製塙土器(所謂くらら式)、土師器、須恵器、骨貝類などが出土し、南の4～8区では帶金具や皇朝十二銭など出土している。この第3層を掘り込んで中世の遺構群が形成されている。第4層以下地山面までは古墳時代の包含層といつてよいが、遺物の量は少ない。D区の層位も基本的にはC区と同様であるが、第3層が途中で消滅している。D区からE区にかけて、地山直上に厚さ約20cm、長さ1mの弥生前期の単純包含層が認められた。甕、壺の破片やサヌカイト片が出土した。この層はさらに南に広範囲に広がっているようである。

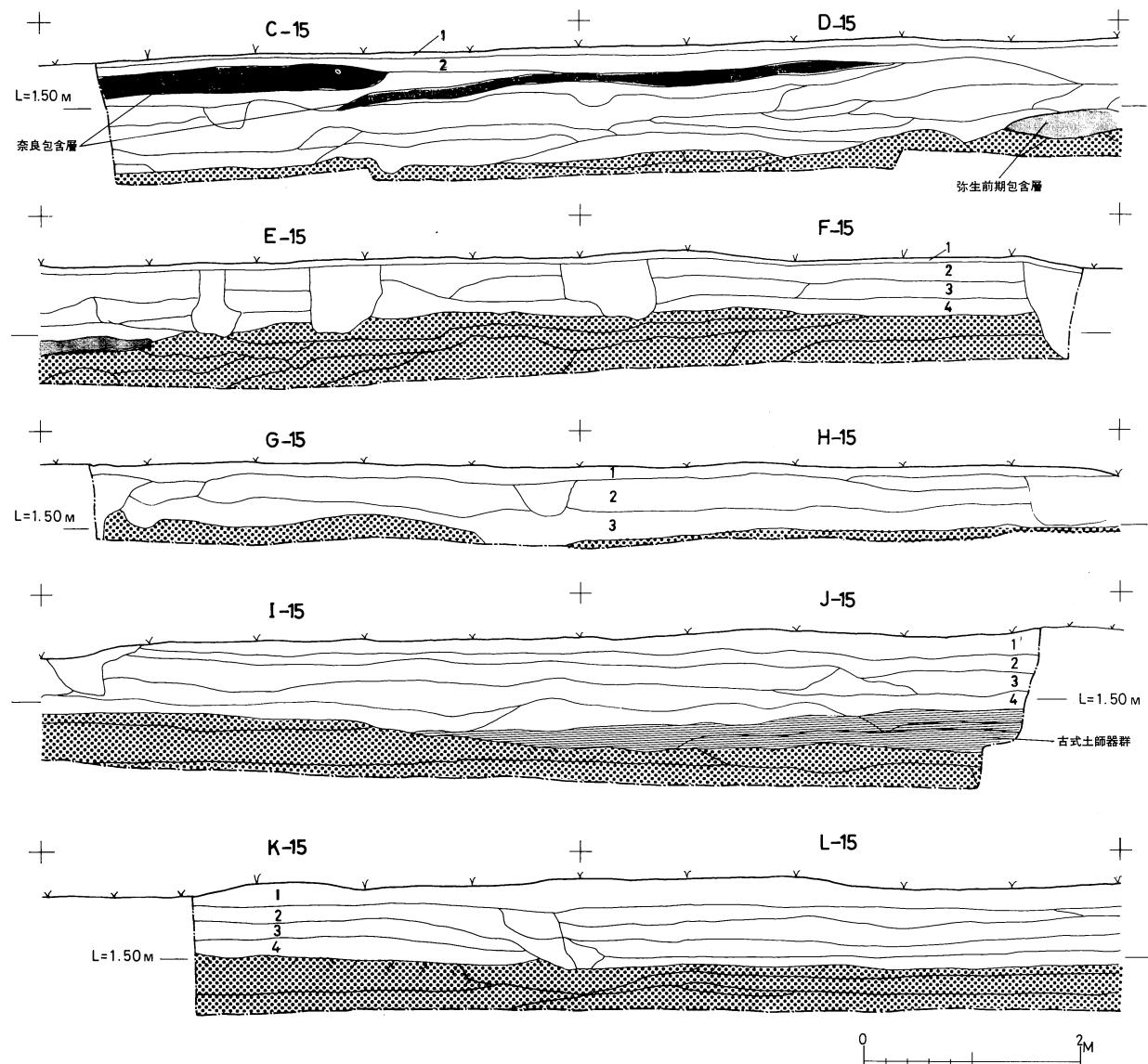
E区からF区にかけては、地山が最も高くなり、標高1.6mで、遺物包含層も50cmと最も薄くなっている。第1・2層はC・D区と同様現代の耕作土で、弥生前期から平安期までの遺物が含まれている。第3・4層は灰色味を帯びてきて、地山との漸移層で弥生前期・古墳時代の遺物が少量含まれている。

G・H区もE・F区と同様の層位を示すが、地山が西へ下降し始めている。I・J区に至ると地山はさらに下降し、J区の西端では地山面は標高1.0mになっている。遺物の包含状況は他区と大差なく第1・2層を中心であるが、量的には少なく磨滅した遺物が目立ってくる。第3・4層は灰色味を帯びてきて、少量しか遺物を包含していない。この層の下に、「J区土器群」と呼称している古式土師器が集中して検出された。

K区に入ると、地山面は再び標高1.5mに戻っている。J区とK区の境目付近に溝が自然河川を想定するのが妥当だろう。K区以西では山からの流土で表土層が20cm以上の厚さに達している。遺物包含層は第2・3・4層であるが、第3層に完形品の須恵器や土師器の出土が目立ったが、時期的には古墳前期と後期が共伴しているような状況であった。

L区以西は全層ともほとんどと言ってよいぐらい遺物は出土しなかった。

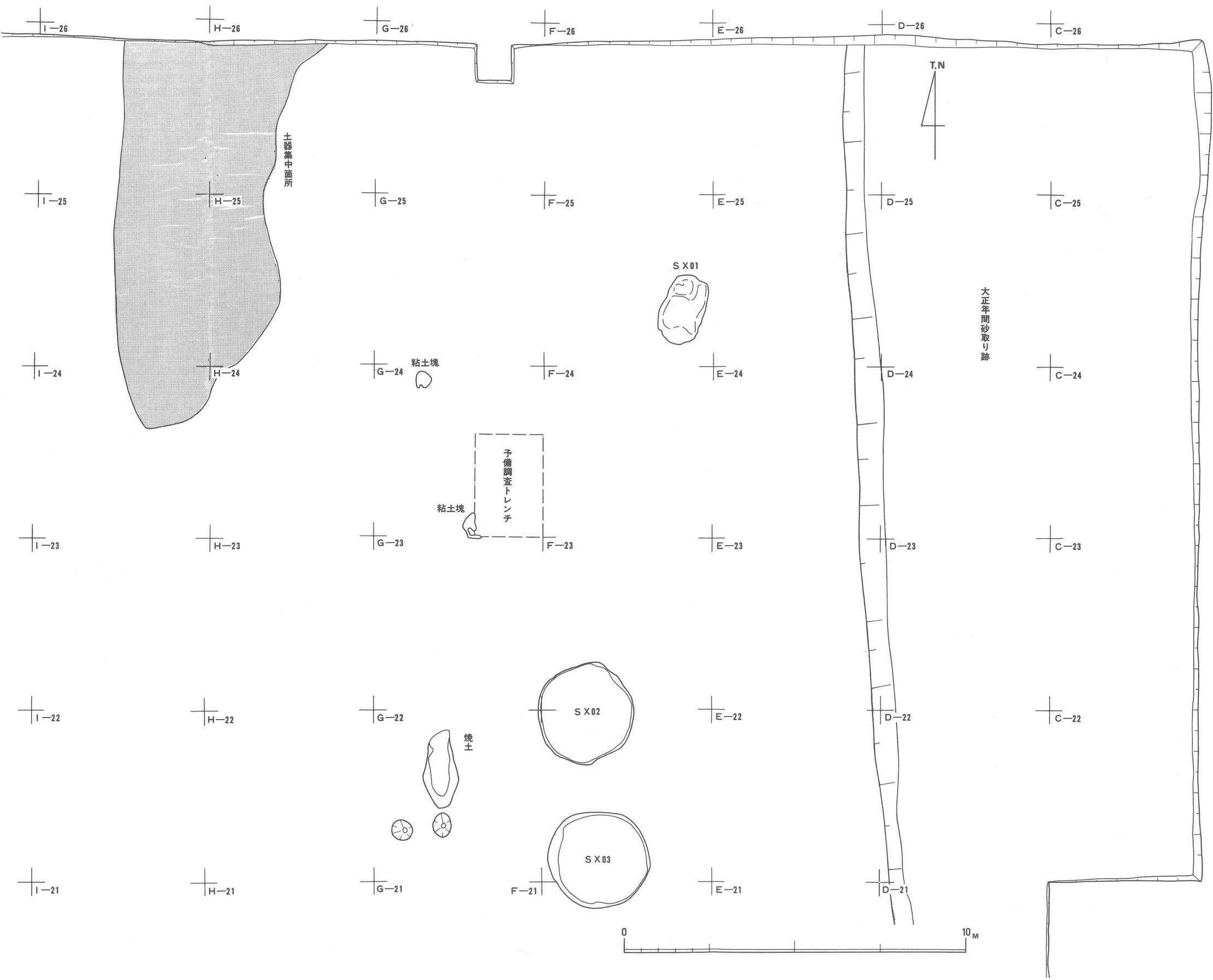
さて以上のような堆積状況から次のような旧地形が復原できるであろう。旧地形は現在のような平坦な地形ではなく、馬の背が長く延びた砂洲が南北に走っており、砂洲の東側は海、西側は山とに挟まれた部分に小河川が流れるか、海の入江状になっていたのであろう。弥生時代は



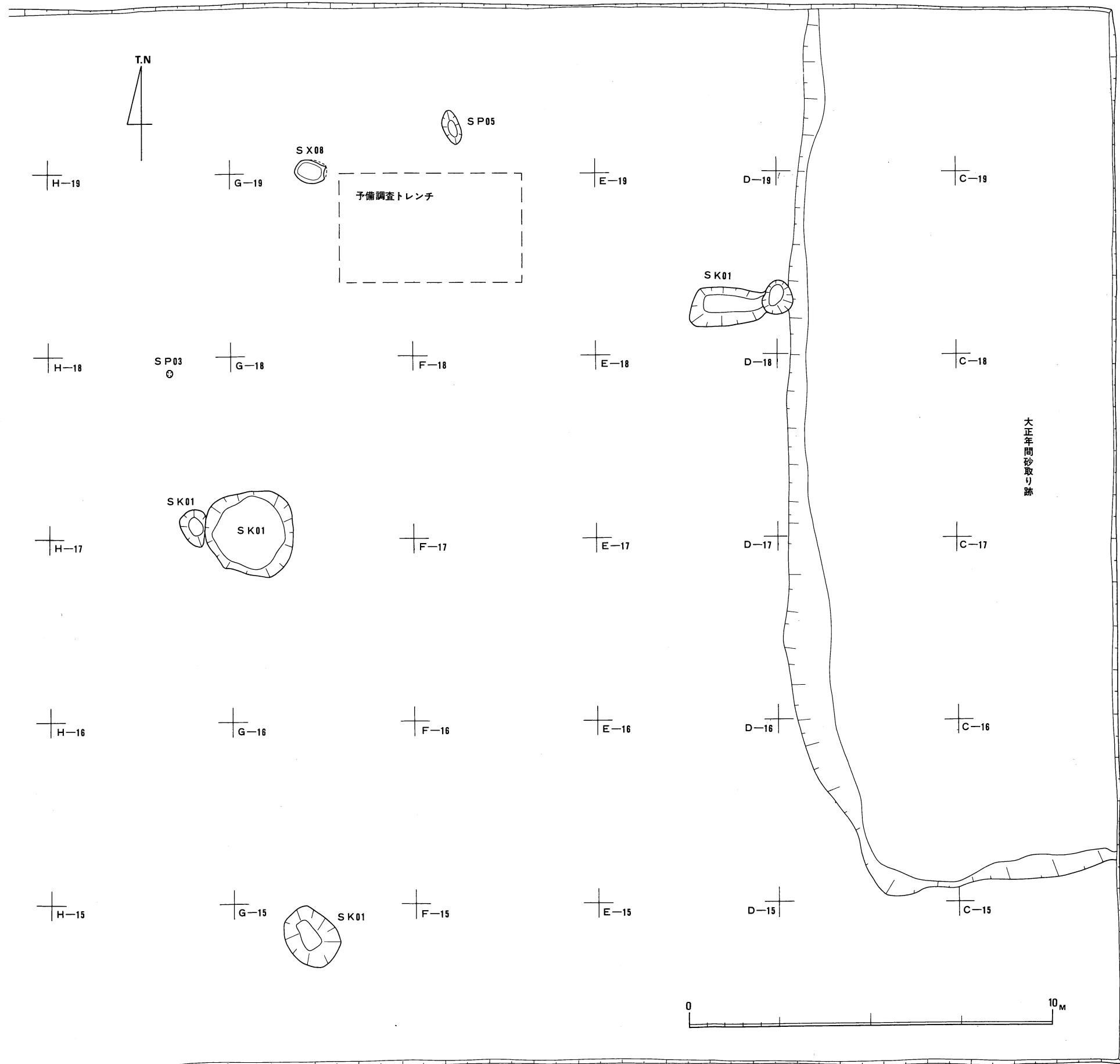
第9図 15区 横断面土層図

この砂洲の最も高い部分で生活が営まれており、古墳時代に入ると、東西の傾斜面は徐々に埋つていったが、東側の堆積の方が早く進み、西側はまだ小河川か入江の状況になっていた。この時期が最も堆積が進んだ時期で、奈良～平安時代になると、西側も埋没が進み、東の海側はゆるやかな斜面となり、中世に入り、現在とほぼ似かよった地形が形成されたものと推定される。

次に、平面的に遺物出土状況を述べて行こう。奈良時代を中心とする包含層は海寄りのB・C区に南北に伸びている。16区以北は破壊されているため、どこまでこの包含層が広がっていたか不明である。C・D区にみえていた古墳時代を主体とする包含層は、10区以南になると、良好な包含層に変わり、出土量は莫大になる。E・F・Gを中心とする第1・2層の遺物包含層は耕作土であるが、場所ごとによってある程度の時期的なまとまりがある。弥生前期はG-16区を中心に、径約10mの範囲から出土し、これはさらに南東方向に広がるようである。弥生中・後期の土器は非常に少なく、中期がG-21区、後期がH-16区でそれぞれ甕が1個体分検出されたのみであった。古墳時代前期の須恵器がG-23・24区でまとまりをもって出土してい



第10図 遺構配置図(1)



第 11 図 遺構配置図(2)

る。H・I-26~24区に製塙土器を主体とする土器集中箇所があった。破片に転磨したものが多いため、二次的に堆積したものかもしれない。J・K-15~20区に古墳時代の須恵器、土師器の完形品の集中する箇所があったことは前述した通りである。この集中箇所に重なるように船形土製品や、奈良三彩小壺が集中しているのは注意すべき点であろう。

巨視的にみて、15区以北は攪乱層や破壊箇所が多い反面、15区以南は山塊からの流土などにより、攪乱、破壊の度合が少なく、良好な状況で遺物や遺構が残っている状況である。

(大山)

6 主な遺構

今回検出した遺構は、ピット、柱穴、土坑、粘土遺構、炉跡、焼土などである。遺構の数は多いが、時期決定できたものは少ない。それは次のような理由による。

- ①地層がすべて砂層であるため、遺構の輪郭が残にくく。
- ②長期にわたる複合遺跡で、かつ製塙土器など遺物量が多く、後の時代の遺構に先行する時代の遺物のみが入る可能性が非常に大きい。
- ③砂は鉄分や有機質の浸透が大きいため、単なる汚れも遺構と見間違うことが多い。

このような条件が重なっているため、遺構かどうか判断しづらいものはすべて記録したが、明らかにベースの砂と色調が異なり、かつ一時期の遺物がまとまって出土した遺構のみを確実な遺構と認定し、出土遺物の少ないものについては時期決定を避けた。

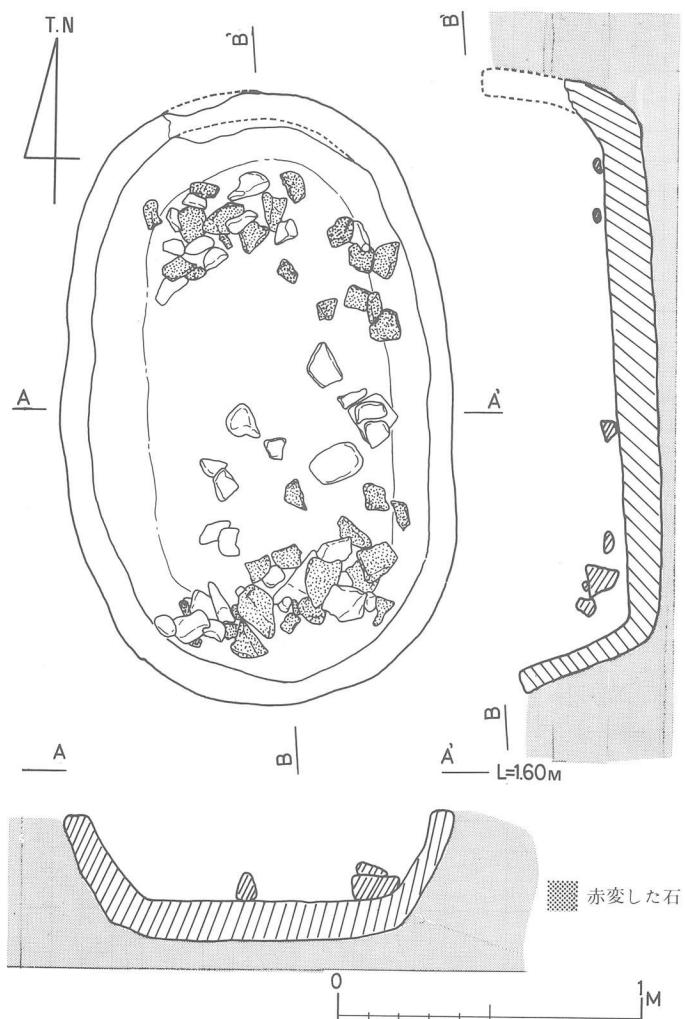
また、反対に土色調により上面プランが確認できなくとも、一時期の遺物が一ヶ所で集中して出土した場合には、周囲の出土状況を考慮して遺構とした。

(1) 粘土遺構(第12~14図)

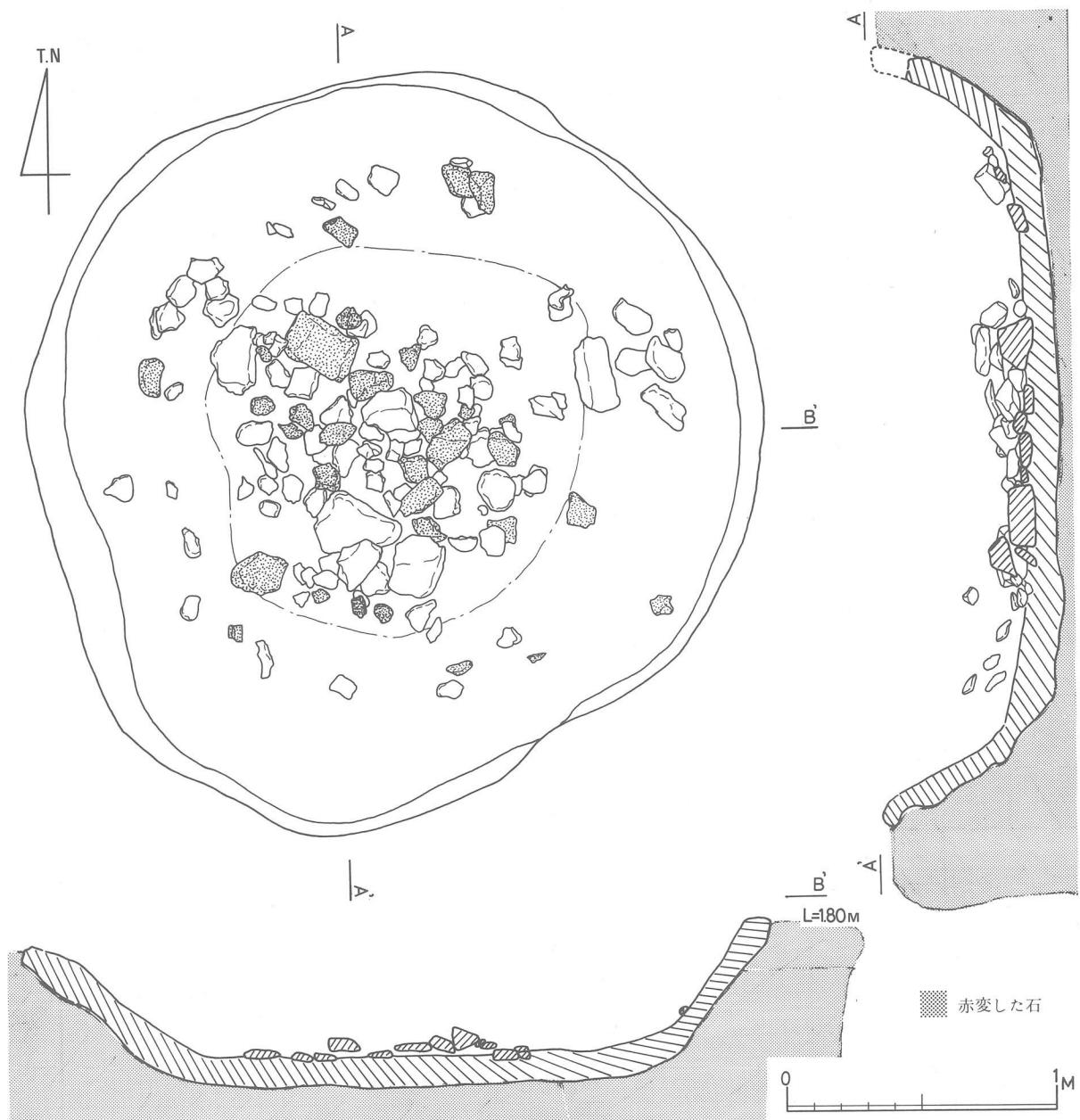
粘土を使って土坑をつくり出しているたり、楕円状に粘土が厚く広がっている遺構などを16基検出した。精査の終わった3基を報告する。

S X 01はE-24区にあり、第2層の暗茶褐色耕作土を除去した段階で、灰色の粘土の楕円の広がりを検出した。中央部分は少し凹んでおり、そこには第2層と同じ砂が堆積していた。砂を除去しても、平らな粘土の固まりで土坑の輪郭は上面では認められなかった。そこで幅10cmのトレンチを十字に入れたところ、壁面があることがわかり、埋土を除去した結果土坑になった。土坑は第3層の淡黄色砂層(無遺物層)を掘り込んでつくられている。

長軸205cm、短軸130cm、深さ30~37cmである。使用されている粘土は少し青緑味を帯びる灰色の粘土で、5mm前後の石粒を多く含んでいる。壁の厚さは8~14cmである。埋土は上下2層に分けることができる。上層は暗灰黒褐色砂質土で厚さは7cmある。下層は灰黒色土で、約10cmの厚さがあり、小さな木炭粒や壁体の粘土がブロック状に



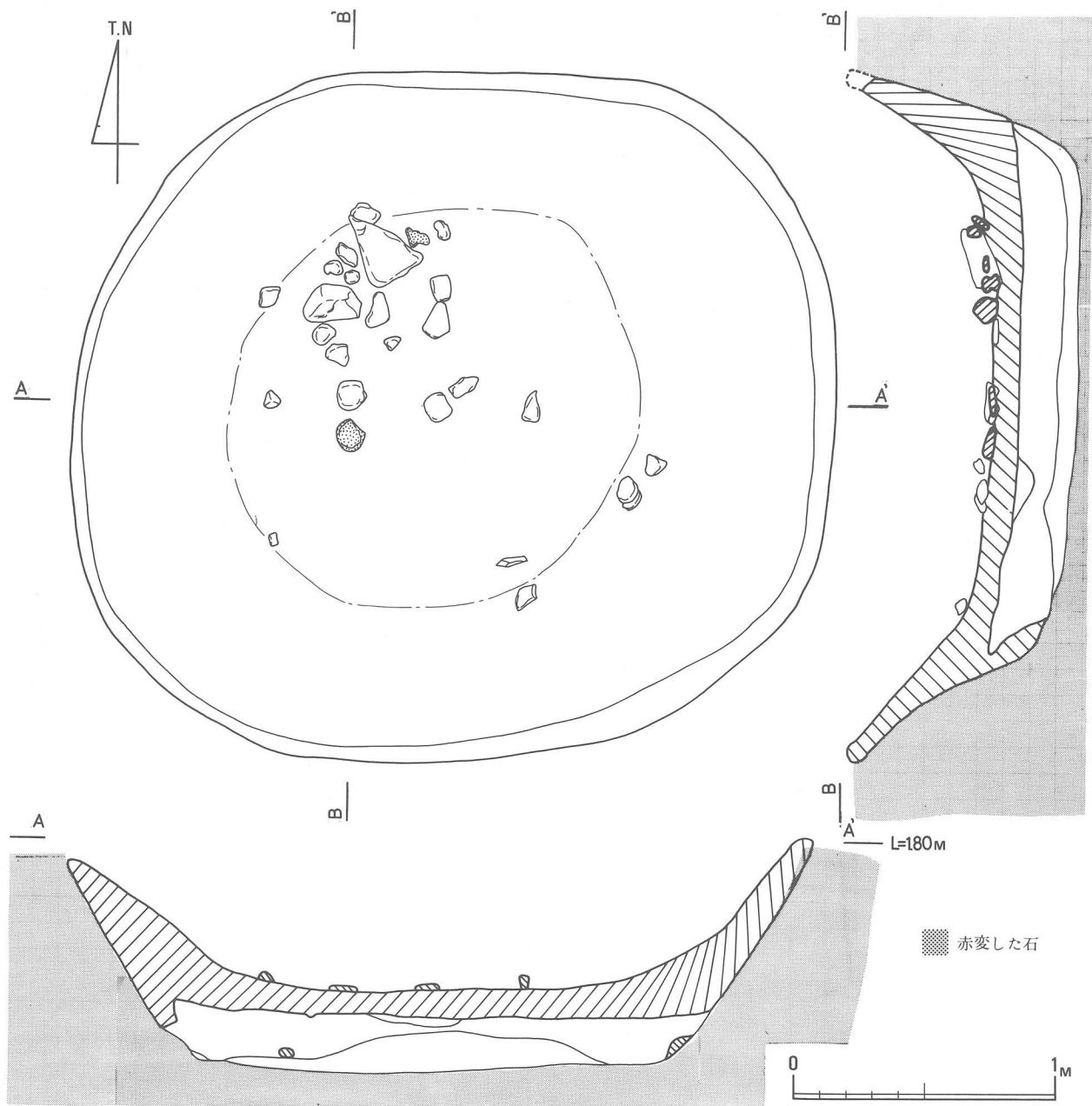
第12図 S X 01 実測図



第13図 SX02 実測図

混入している。上下層から土器の細片が10数点出土した。下層中や、底部に付着していた石は84個あった。花崗岩の割石がほとんどで、他に砂岩質の川原石や緑泥変岩などが混じり、約半分が火をうけたとみえ赤変している。底面や側壁面に火を受けたと思われる状況は観察されなかった。

SX02は、F-22区にある。検出層位は01に同じであるが、幅約10cmの灰色粘土の帯が円形にまわっているのがまず確認された。径280cm、深さ40cm。粘土は灰黒色を呈し、厚さは10~13cmで、5mm前後の石粒を多く含んでいる。埋土は上中下3層に分けることができる。上層は、第2層と同じ耕作土で厚さは中央部で30cmある。出土遺物は須恵器片、製塩土器片などである。中層は暗褐色砂層で約10cmの厚さである。下層は灰黒色砂質粘土で青灰色土が混入している。出土遺物は土器細片が数点出土したのみで、木炭粒を少し含んでいる。



第14図 SX03 実測図

下層と底部との粘土の境は検出しづらかったが、下層は砂と粘質土が混じったものであり、底部の粘土は石粒を含んでいるといえ柔かく、この差で境目をつけた。下層中や底部に貼り付いたかたちで137個の石が出土した。花崗岩と緑泥変岩が約50個ずつで、次いで砂岩質の川原石が30個、サヌカイトも1個ある。このうち、約35%が火を受けたとみえ赤変している。

SX03は02の南130cmのところで検出した。検出状況は02と同じである。長軸240cm、短軸210cmで、やや東西に長い楕円形を呈し、深さは60cmある。埋土は3層に分けることができる。上層は第2層と同じ耕作土で厚さは約25cm。中層は上層より黒っぽくなる暗褐色砂層で厚さは約10cmある。下層は明灰色粘土に茶褐色の砂が混じったものである。上、中層の出土遺物は第2層と変わりなく、須恵器片、製塩土器片などがある。

底部に付着した形で有溝土錐が出土した。大きい部類に入るものである。石は02に比べて少なく、35個であった。緑泥変岩が半分以上を占め、次いで花崗岩の割石があり、川原石は1つであった。そのうち火を受けたとみえ赤変しているものは10個である。

さて、これらの遺構の時期であるが、埋土中や粘土壁の外側から土器の細片が10数点づつ出土しているが、磨滅が著しく、時期決定にたる資料は少ない。S X 02の壁粘土を除去した際、古墳後期と思われる須恵器片が1点出土した。S X 03から有溝土錐が1点出土している。この2点の資料からは、古墳後期以降という年代が与えられる。

調査区南部のC～F—9～14区で、類似の粘土遺構群（図版15～19）が検出され、現在精査中である。これらの遺構は出土遺物より中世のものである。S X 01～03は、これらの遺構群と構造が類似しており、中世の可能性も考えられる。

しかし、相違点も多く、性格とともに今後慎重に検討を進めていきたい。

さて、次にこの遺構の性格であるが、砂地に粘土を使って土坑をつくり出している点がこの遺構の第1の特徴である。砂地に粘土を使うことは、外側からも内側からも水分、湿気をしゃ断するのに有効であろう。防湿施設か水溜めがまず考えられる。防湿施設だとその上部に別の施設を想定しなければならないが、そのような痕跡は認められなかった。

土坑という形をつくり出していることから水溜めと考えるのが自然であろう。

第2の特徴は、石が多く入っていることであろう。石は、小児人頭大から掌大の大きさでまちまちであり、配置された様子はなく、乱雑に投げこまれたような状況であった。火をうけ、赤変している石はS X 01で45%，02は36%，03は29%の割合である。02，03の石のうち半分以上が板状の緑泥変岩である。

これらの石は、土坑が廃棄される際に投げこまれたものなのか、本来機能していたのかは重要な問題であろう。後者の可能性を考えると、水溜め用の土坑の場合、水を流し込む時の受け石の役割がまず考えられる。次に石が赤変している点を重視すると、焼け石の利用が考えられる。水を溜めておき、焼け石を投げこみ、煮炊する方法が想定できる。魚貝類、藻などを煮炊したのか、海水を煮つめ鹹水を得たのかもしれない。今までの研究によると、採鹹法は、文献に見える「藻塩焼く」の解釈や民俗例で推定されていたにすぎず、藻を燃料とし焼け石を利用する方法は、歴史的事実であったか否かは将来の課題とし、遺構の解釈としては合理性をもつと考える。調査員の間で討議した際、提出された意見で、一例として書き記しておくことにする。

緑泥変岩がこの島に持ちこまれたことは明らかであるが、この意味については考えが及ばない。中・近世、板石を塗り込んだ据え付けの土釜の例があり^{注(1)}、このようなものも想定しておくべきだろう。

以上、推測を多く重ねてきたが、海岸部にあることから、漁業や製塩に使われた遺構であることは間違いないだろう。類例が少なく、今後の調査研究に多くを委ねることにしたい。

(大山)

注

(1) 近藤義郎・間壁葭子氏の御教示による。

(2) 香川県直島倉浦遺跡、岡山県玉野市山田中学校遺跡（昭和55年9月岡山県教委調査）などがある。

(2) J区土器群(第15~20図)

J区土器群と、呼ばれる遺構は、大浦浜海岸汀線より西へ約60m進み、たてわ山に接近した地区である。この地区は、現在の砂州が完成する以前は、たてわ山より流れ出る、谷筋の一部ではないかと考えられる地区である。現地形においても、汀線からの高まりは、F列付近がもっとも高く、I・J列付近は低くなっている。

J区土器群は、J-13~21区にかけて帯状に続く土器群である。土器の出土は、標高1.30m前後に集中している。出土状態は、全区画にかけて密集してはいないし、完形品も少なく、土坑・ピット等に共なうものではなかった。

土器群は、遺物取り上げに共なって、第1~9群までに分けた。出土状態を、各群別に述べると次のようになる。

第1土器群

J-15区1部I-15区に、およぶが出土状態は比較的密集している。出土器種は、壺・甕・高杯・鉢が出でている。出土品中、甕が比較的多い。

第2土器群

J-17区南西部よりの出土であり、鉢2点と甕口縁部であるが、鉢2点は口縁部を下に向けて、重ねてあった。

第3土器群

J-17・18区にまたがり分布している。出土点数は少ない。器種は、甕・高杯であり、点数はほぼ同数である。

第4土器群

J-18区中央部の出土であり、高杯だけの群である。5点出土している、その内4点は、密集して出土した。ピット内出土を考えて、注意深く観察したが、検出しえなかった。

第5土器群

I・J-19・20区の出土である。土器の密集は見られず、広範囲にちらばっている。器種は、壺・甕・高杯があり、高杯の出土が比較的に多く見られる。

第6土器群

J-17区第2土器群南側からの出土である。出土状態も比較的に密集している。器種は、壺・甕・高杯であり、出土点数の大半を高杯が占める。

第7土器群

J-16区の出土である。出土点数も少なく、土師器と共にサヌカイトがある。

第8土器群

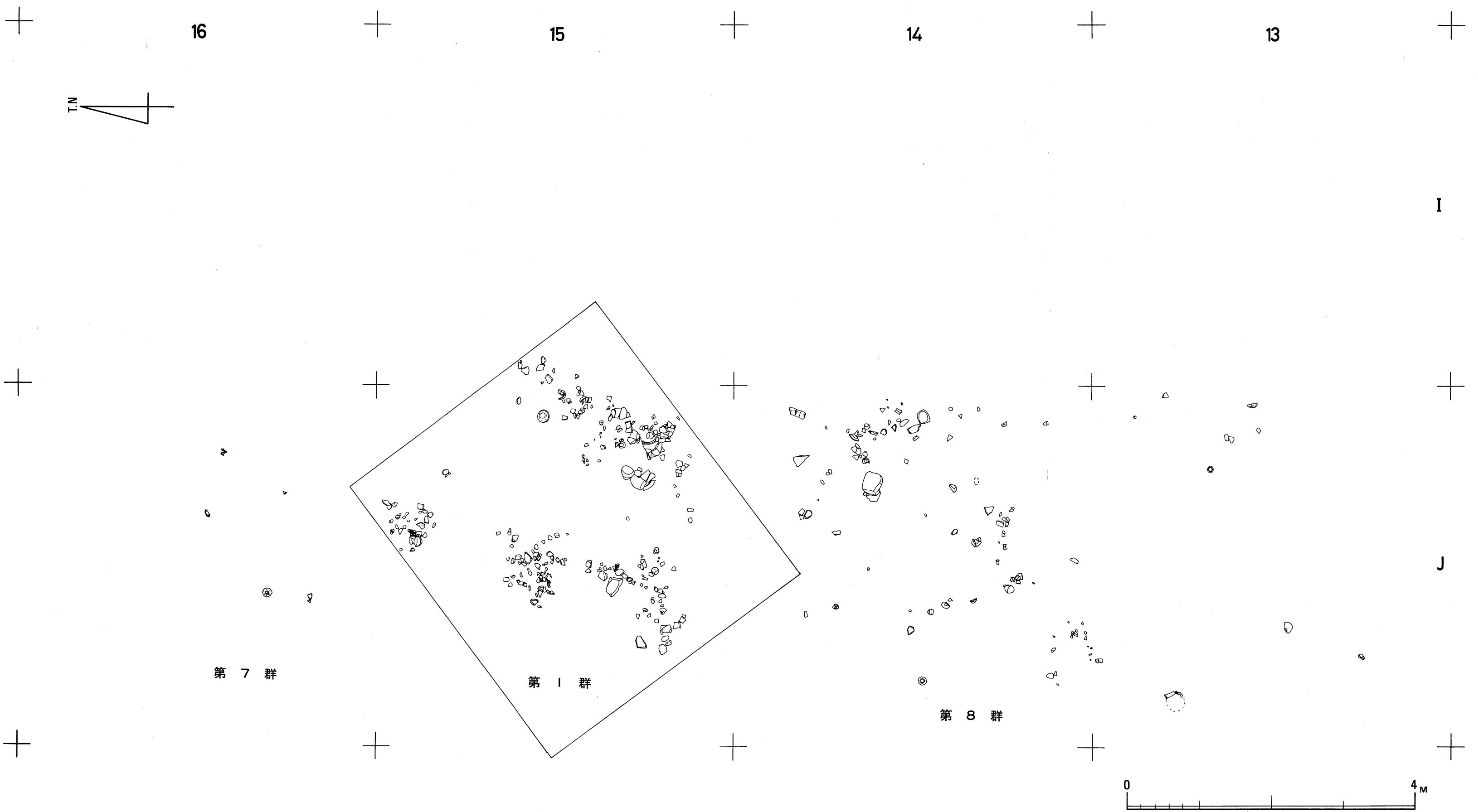
I・J-13・14区の出土である。土器の密集は見られず、広範囲にちらばっている。器種は、壺・甕・高杯が見られる。

第9土器群

J-21区の出土である。出土状態は、高杯・鉢が密集し、すこし離れミニチュア土器が、7点出土している。

土器群番号は、発堀現場にて検出順に付けた為に、統一性がない。第2・3・6群などは、同一群として考えてもよいと思う。今回は、番号の変更は行なわなかったが、本報告においては、検討の必要性があると思う。

土器群を含む層序を、I・J-15区南壁で簡単に見ると次の様になる。



第15図 J区土器群分布図 その1

N

21

+

20

+

19

+

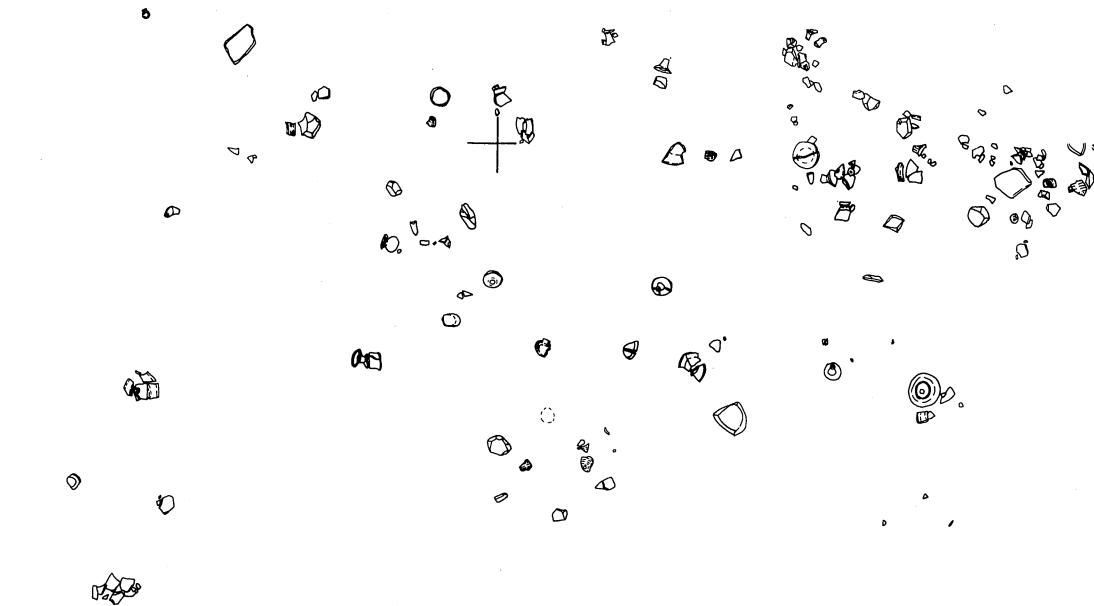
18

+

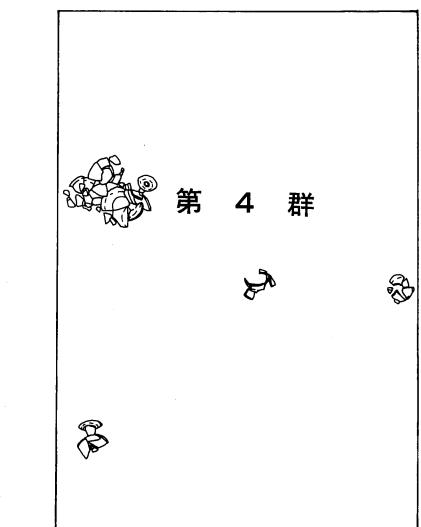
17

+

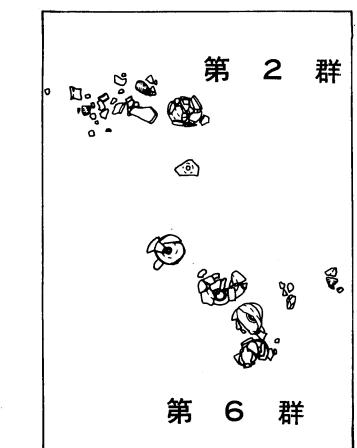
第 9 群



第 5 群

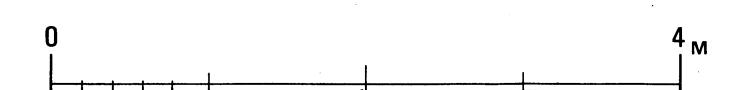


第 3 群

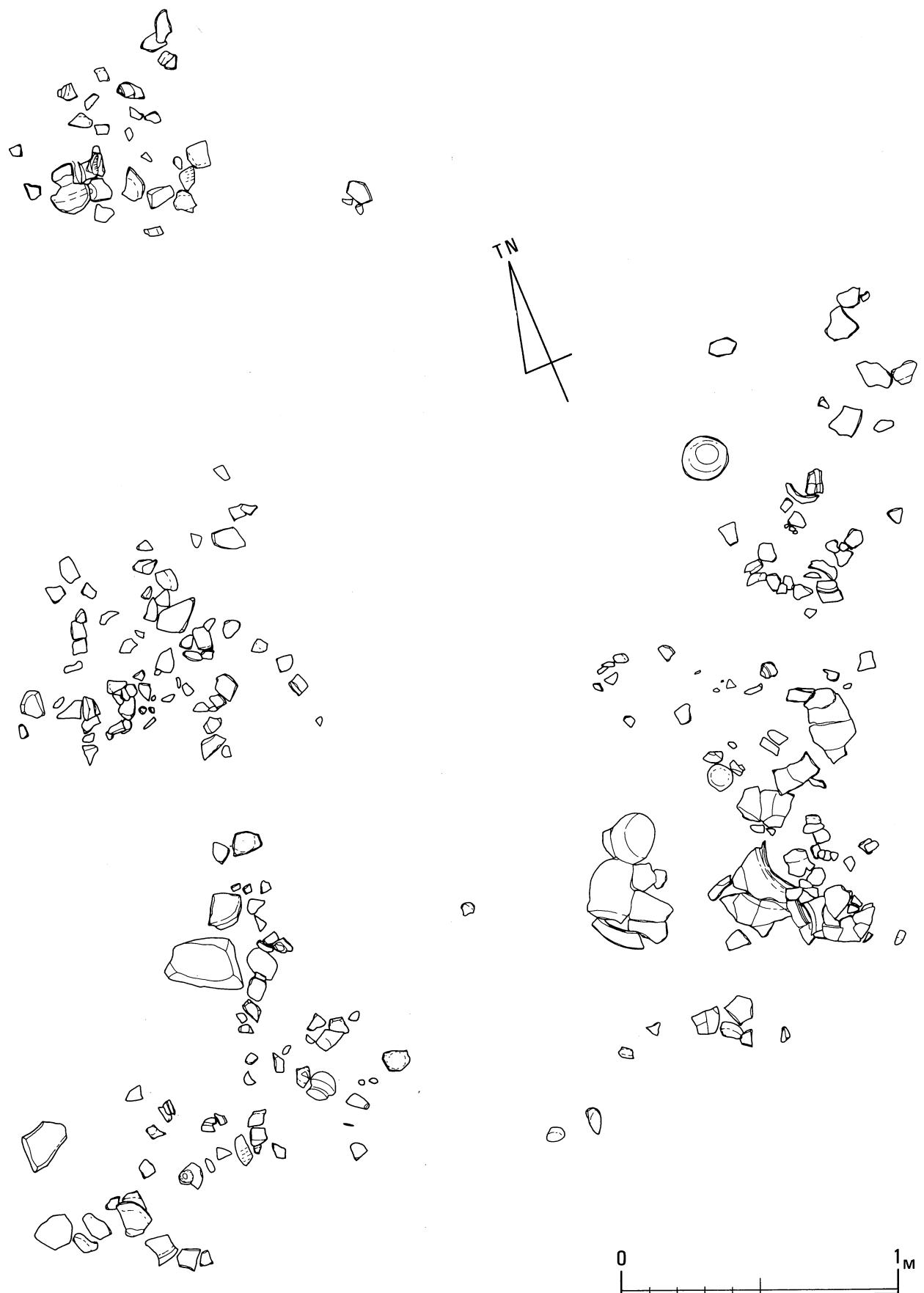


第 2 群

第 6 群



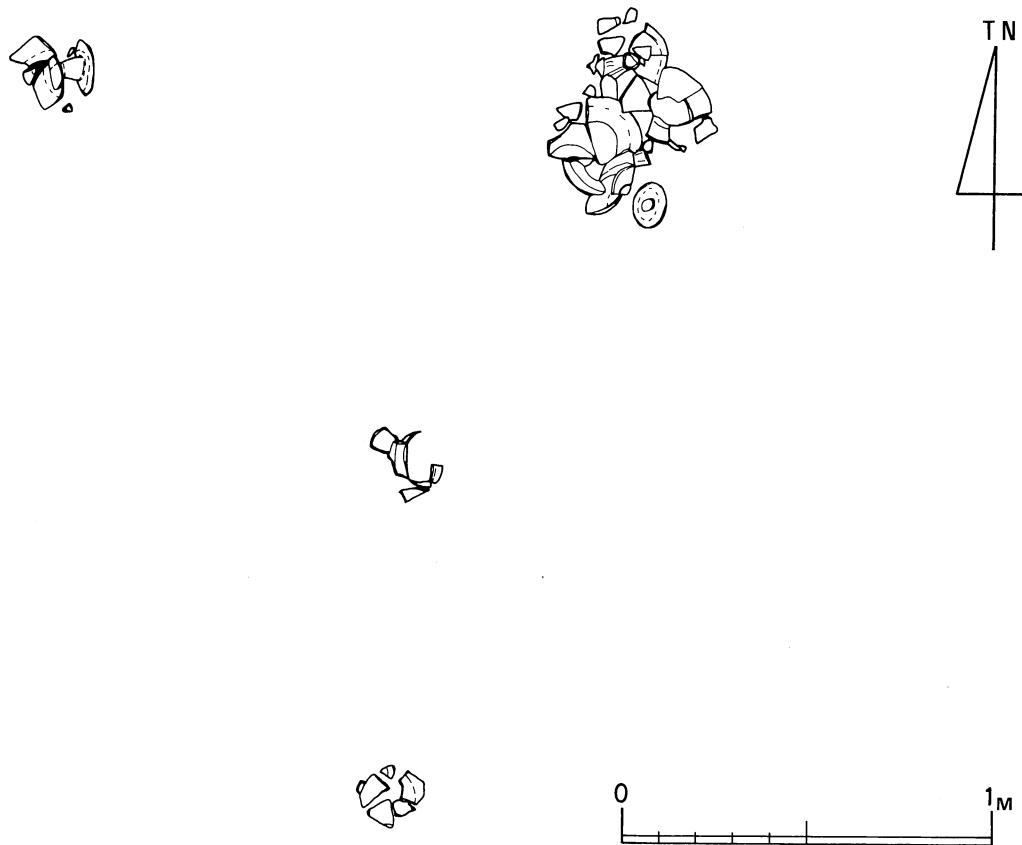
第 16 図 J 区土器群分布図 その 2



第 17 図 第 1 土器群出土状態図

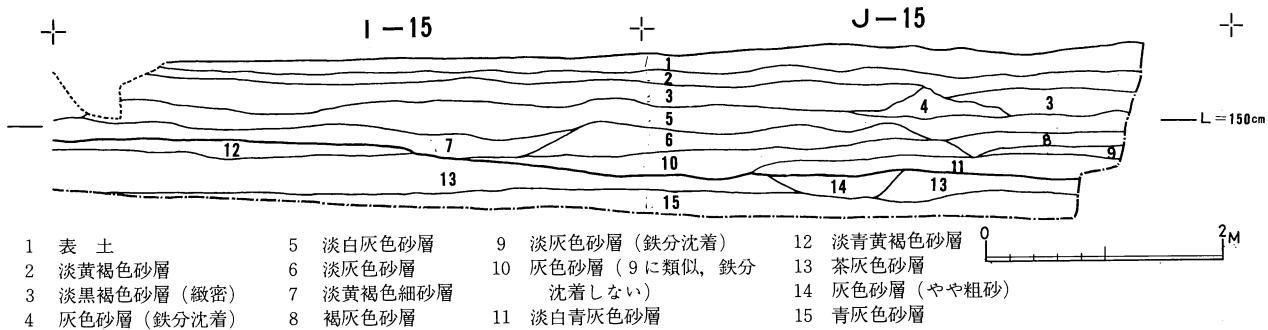


第 18 図 第 2・6 土器群出土状態図



第 19 図 第 4 土器群出土状態図

第20図の1～4までは、製塩土器を多く含む層であり、3下部にて土師器を、多く含む層であり、又ピットを多く検出することができた。5～7は、土師器を含むが、量的には少なくなってくる。7は極端に少ない。土器群は、8～11に含まれる。12～15は、無遺物層であるが、15においては流木が見られる。I-15区において、12が終了する地点より、無遺物層が下り始める。この傾斜が、旧地形において、谷筋もしくは溝に向う斜面と考えられる。



第20図 I・J-15区南壁断面図

土器群出土状態及び器種を、総合的に見ると、出土地点は無遺物層の斜面上になる。器種は、高杯を主体として壺・甕・鉢・ミニチュア土器・船形土製品（第38図2）製塩土器などである。これらの遺物は、ピット・土坑等に供なっての出土ではないが、斜面上方よりの流れ込みと考えるのも、第1・4群の出土状態から見ると無理がある。土器群は、谷筋もしくは溝に向う斜面に、単に並べたか、浅いピット等に共なって並べられたと、考えるのが妥当であろう。なぜ水辺に向う斜面に、土器を並べたのかという問題があるが、出土品に、ミニチュア土器・船形土製品等が見られる点から、祭祀的な意味を持つのではないかと、考えることができるが、確定する要素が少ないので、本報告までに、各地域における類例と共に、検討してみたい。

（大砂古）

（3） G-18区SK01

第2層より掘り込まれたもので、上面で確認した時には、埋土は黒い中砂であった。南北223cm、東西244cm、深さ25～28cmである。出土遺物は、6世紀後半の須恵器杯蓋1・身1・高杯1・古墳時代後期の製塩土器である。復原した製塩土器の法量を基準として、個体数を概算した。その基準は、重量700g、口縁周囲46cmである。その結果、全出土重量28,700g、破片口縁周囲総長2411cmであり、個体数は約41～50体と推定される。

（4） H-18区SK01

第2層より掘り込まれ、埋土は黒褐色中砂であった。南北110cm、東西71cmの楕円状の土坑で、深さは10～15cmである。出土遺物はG-18区SK01で出土した製塩土器に、やや先行するであろうとされる丸底でタタキ目のない製塩土器が多数出土した。また製塩土器と同じ手法で作られた土師器もある。この土坑は、当初、G-18区SK01と非常に隣接しており、切り合っていると思われたが、確認できず、独立した土坑と認定した。

（5） H-18区SP03

この遺構は、上面で確認できず、埋土も第2層と同じ砂であった。脚台付製塩土器が集中して出土したので、直径24cmの浅いピットとした。出土遺物は、脚台付製塩土器破片23個であった。

(6) G-15区SK01

第2層中より掘り込まれたもので、上面では、弥生前期の土器片が乗っていた。埋土は黒色細砂であり、南北 160cm、東西 145cm、深さ 12~14cm の楕円形の土坑である。出土遺物については、古墳時代前期の甕1・鉢2、脚台付製塩土器4片である。遺物の状況は、残りがよかつた。

(安田)



第 21 図 粘土遺構群発堀風景写真

7 遺 物

今回の調査で出土した遺物は、縄文時代から中世に至るまでのもので、種類も豊富である。量的に最も多いものは古墳～奈良時代にかけての製塙土器で、次いで土師器、須恵器の順である。特殊なものとしては、古墳時代のミニチュア土器や船形土製品や、奈良時代の三彩小壺、帶金具などであろう。

(1) 縄文土器・弥生土器（第22～24図）

縄文土器は前期と晩期のものが出土した。前期のものは、たては北麓地区に設けた第1トレンチからの出土である。口縁部に1～3条の爪形状の刺突文がめぐり、凸帯をついているものもある。^{(図版42(1))} 羽島下層式の範ちゅうに入るものであろう。晩期の土器は弥生前期に混って数点出土している。口縁部に刻み目の凸帯がめぐるものである。

弥生土器は、前・中・後期のものがそれぞれ出土しているが、前期のものが量的に最も多い。ここでは前期のもののみを図化した。第22図壺である。1は、頸部に2本の平行沈線がめぐる一方、胴部上半に段をもち、そのすぐ下にも2本の平行沈線が走る。2は、ヘラ磨き文ではなく、内外面ともヘラ磨きが行なわれている。3は頸部に段が残る。内面のみヘラ磨きが認められる。4は、頸部に刻み目のある貼り付け突帯がめぐっている。5は胴部上半に沈線が1本走る。

6～15は木の葉文である。十文字区画して各区画内に孤線で木の葉文を描く、無軸文のものは、6, 9, 11, 13で、9は十文字区画に2本の平行沈線を使っている。X字状に区画線をひく有軸のものは、7, 8, 10である。

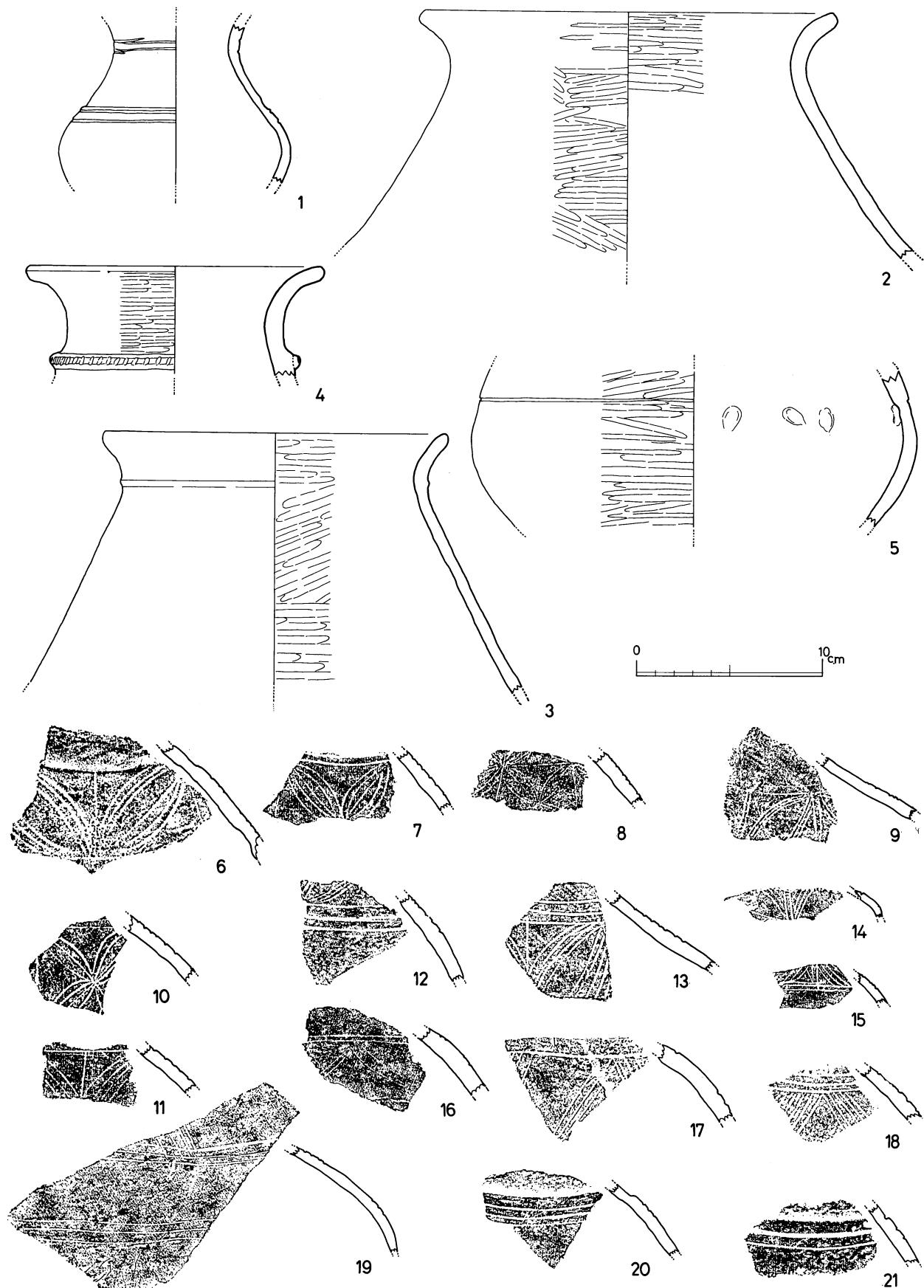
16は連弧文で、17, 18は山形文である。19は3本1組の平行沈線が2組走り、上段の組に斜線方向に4本の沈線が残っており、山形文の一部かもしれない。

20, 21は削り出し突帯文である。明瞭な突帯を削り出す資料はなく、20は、上端のみ削られており、その下に3本の平行沈線が走る。21も同様であるが、3本の沈線が平行に描かれた後、上端一本の部分より上が削り取られている。

第23図は甕である。いずれも口縁部に刻み目をもつ。1は頸部に2本の平行沈線で区画された中に刻み目を施している。3, 4は倒L字形のもので、この種のものの数は少なく図化した2本のみである。5, 6は外面に荒いハケ目を残すもので、胎土、色調とも他の土器と異なっている。7, 8は平行沈線が1本めぐるもので、9は2本走るものである。10～12は平行沈線の間に刺突文や刻み目が施されている。

第24図は底部を集めたものである。1, 2の外面は丁寧にヘラ磨きが施されている。2はハケ調整の後ヘラ磨きが施されている。顯著なあげ底である。3, 4な外面にヘラ磨きが認められ、多少あげ底ぎみである。7の底には糀の圧痕が残っている。これらの中には縄文晩期のものも含まれているかもしれない。

さて、今回簡単に整理した限りでは、削り出し突帯や貼り付け突帯のものは少なく、段を有するものが多い。しかし段のみのものは少なく、沈線と組み合わされるものが多い。平行沈線の上端一本の部分を削り取り、段をつくっているものや、削り出し状に仕上げているものみられる。又、削り出し突帯としたものでも、上下を明瞭に削り取り突帯をつくり出しているものではなく、上端のみを削り取り、下端はそのままになっているものもある。甕に施される平行沈線は、1～3条まで、4条以上に多条化しているものは認められない。口縁部は如意状の

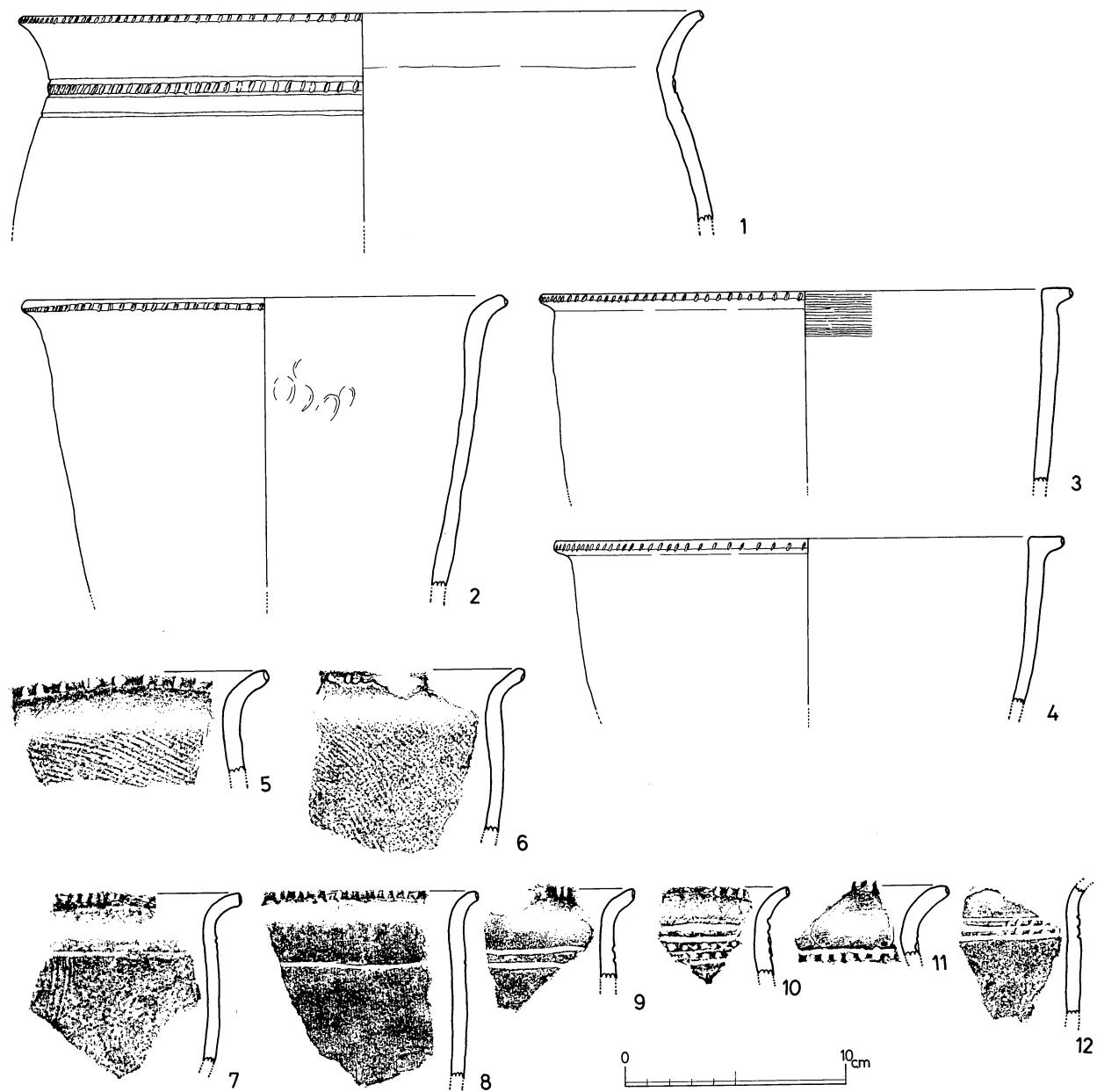


第 22 図 弥生土器壹実測図

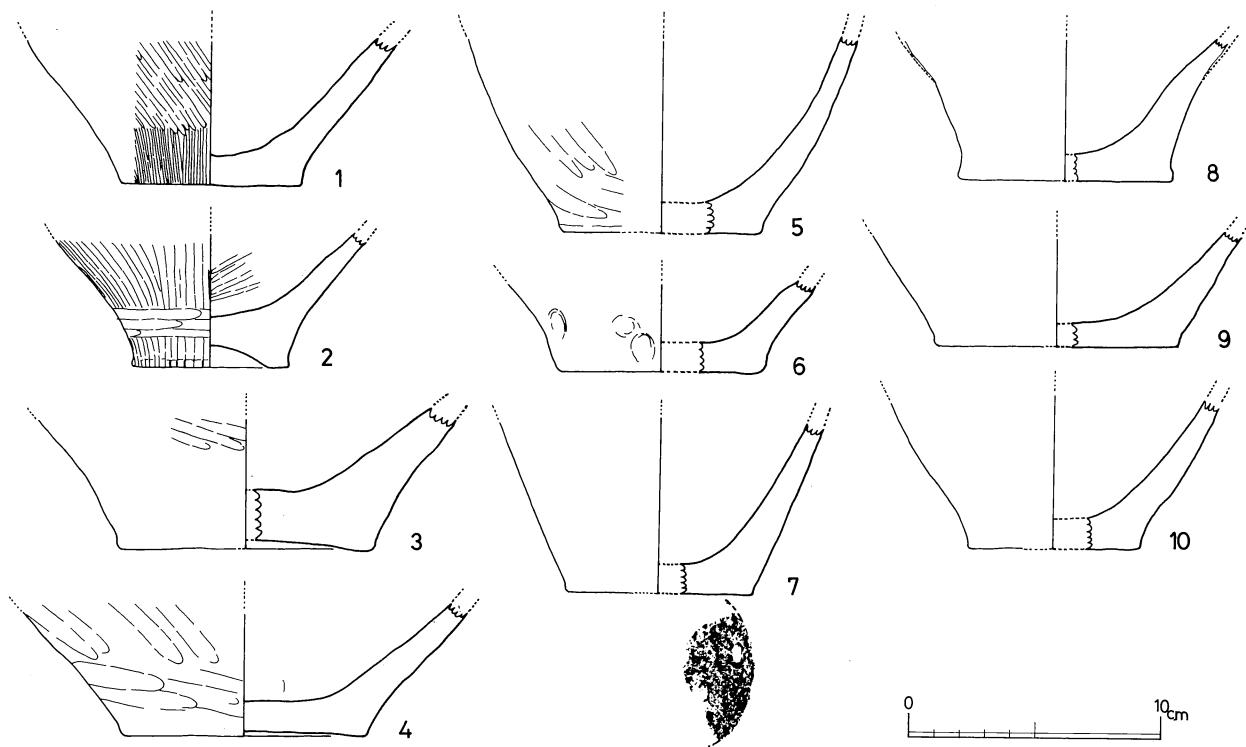
ものがほとんどで、「倒L字」状のものは、僅かである。

このように、壺・甕の特徴をみてくると、古段階でも新しいところに位置づけられるものと、新段階のものに位置づけられるグループに分けることができそうである。この2グループが時間的に連続するものか、断絶があるものなのか、今後資料の増加とともに検討が必要であろう。

(大山)



第23図 弥生土器甕実測図



第24図 弥生土器底部実測図

(2) 土師器 (第25~28図)

大浦浜遺跡における、土師器の出土は、調査区全体において見ることができるが、集中して出土する地点は少なく、I-16~20区第2層下部・J区土器群の、2ヶ所を数えるにすぎない。遺構に伴なって、出土しているのは、G-18区土坑より出土した数点にすぎない。

出土土器の器種構成は、壺・甕・高杯・鉢である。器台の出土しない点は、考察の必要があると思うが、今回は考えないことにした。出土品全体を、把握してはいないが、高杯の占る割合が、非常に高いように思われる。

今回報告する、土師器は総べて、J区土器群より出土したものであるが、出土総点数の、3割程度の数である。報告にあたり、総べての器種・完形品・口縁部の残りが良いもの・集中がより顕著な箇所等を基準として実測を行なった。

J区土器群からは、ミニチュア土器も17点出土しているが、別項目にして述べることにする。

本項目で取り上げた、土器の器種別の特徴を若干述べると、

壺は、小型丸底壺4点と他1点を取り上げた。小型丸底壺は、口縁部がわずかに外反するもの、大きく外反するもの、二重口縁を持つものとなる。他の1点は、胴部にくらべ口縁部が大きく、外反する。

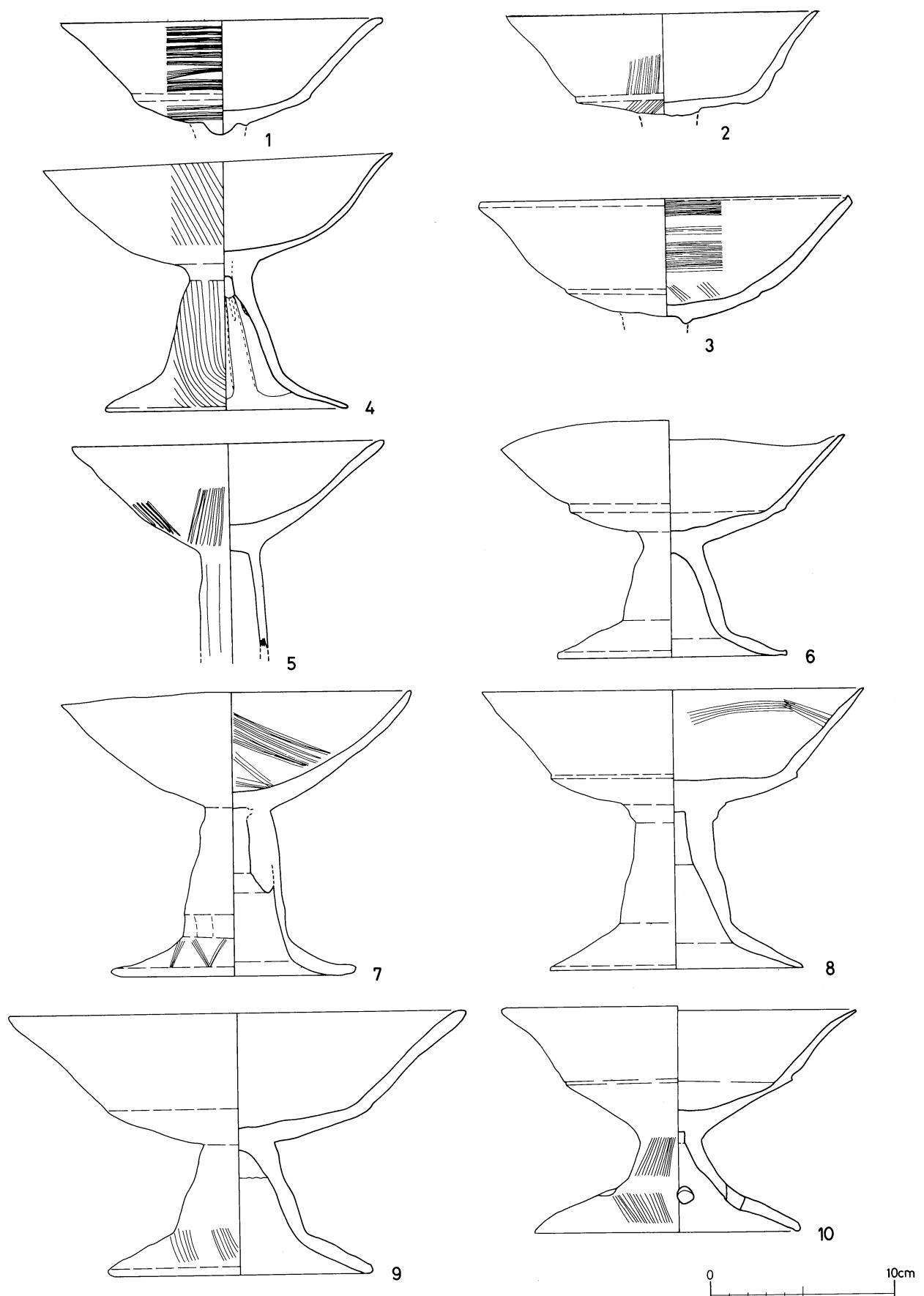
甕は、口縁部特徴は、外反するものが大半であるが、垂直ぎみに立ち上がるものもある。肩部特徴は、緩やかに落ちるもの、急激に落ちるものがある。

高杯は、杯部で見ると、段又は稜を持つものと、ないもの、底部より内彎しながら立ちあがり、口縁に近づくと外反するもの、全体的に内彎するものがある。

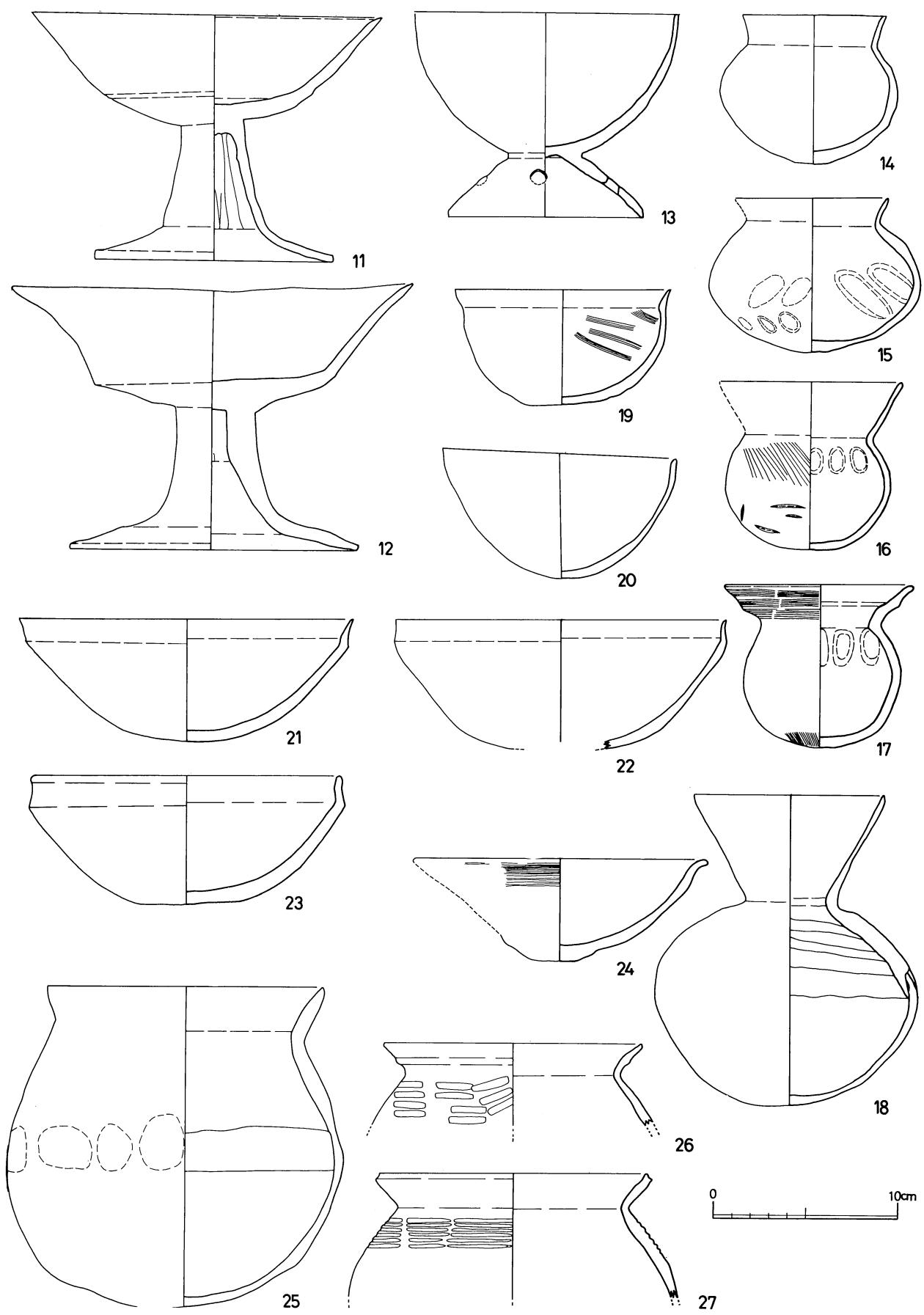
鉢は、口縁部径によって二種類に分類できる。小形の鉢は、底部より内彎し口縁部まで続き、大形の鉢は、口縁部近くで稜を持ち、垂直ぎみに立ちあがる。

以上のようになる。

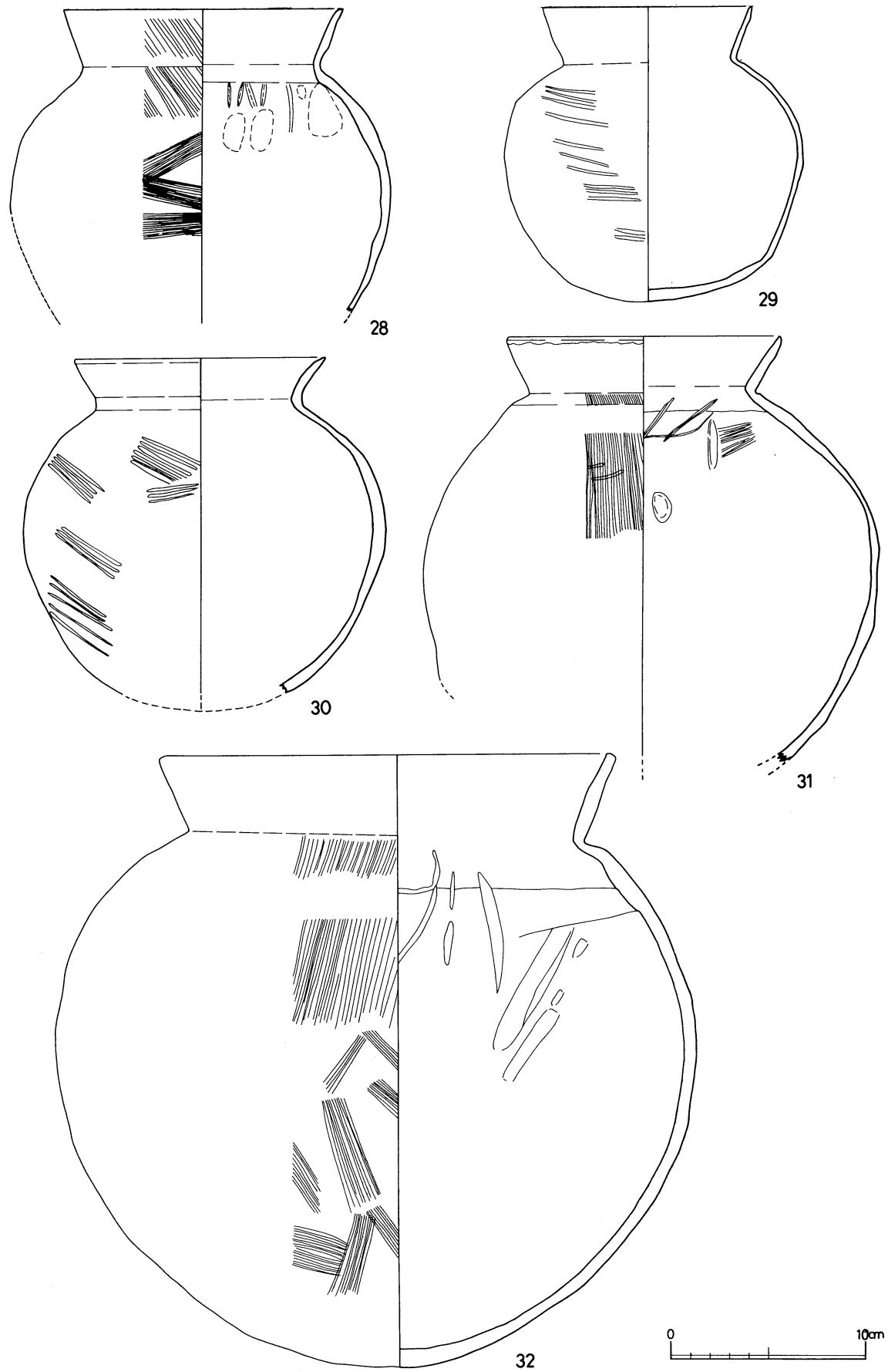
これらの土師器については、発堀中は庄内併行期であり、大きく前後しないであろうと考えていたが、整理を行なっていくと単に庄内併行期と言えない面が出てきた。従来より、言われ



第 25 図 土師器（高杯）実測図



第 26 図 土師器（高杯・壺・甕・鉢）実測図



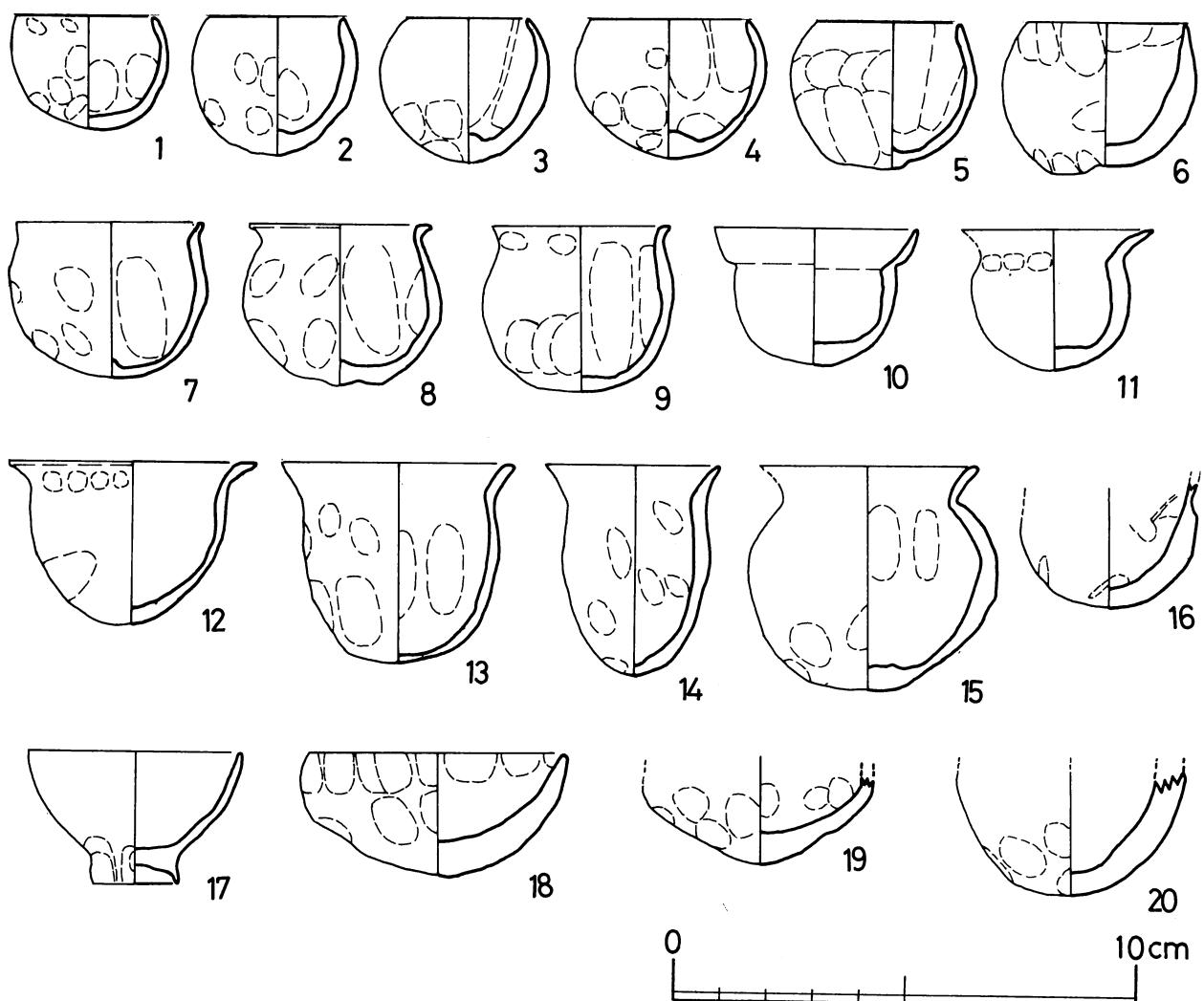
第 27 図 土師器（甕）実測図

てきた、庄内・布留式土器の両要素を見ることができる。この為時期の決定は、現在も発掘中で資料も増えており、本年度調査区終了後に、全遺物の検討を行なって決定したい。

実測を行った土器の観察は、器種別に分類し、表に記した。

ミニチュア土器

ミニチュア土器は、G-11・12区、I-10・16・23区、J-21・23区の7地点から出土しており、総数20点である。出土地点・器種別で見ると、G-11区壺1点(6)、G-12区壺1点(16)、I-10区壺1点(15)、I-16区壺1点(11)、I-23区壺8点(1~5・7~9)、J-21区壺3点(12~14)鉢4点(7~20)、J-23区壺1点(10)となる。



第28図 ミニチュア土器実測図

壺16点は、口縁部の特徴によって

- I 口縁部が、内彎するもの
- II 口縁部が、若干外反するもの
- III 口縁部が大きく開くもの

この3形式に、分類することができる。

第I形式(1~6)は、そのほとんどが、I-23区からの出土である。形態の特徴として、

底部より口縁部にかけて、完全な球形である。内面底部において、成形時に底部より口縁部へとナデ上げた時に、残されたと思う粘土の高まりを見ることがある。6は、1～5にくらべると、内厚であり口縁部も内彎せずに、垂直に立ち上がる部分が見られる。

第Ⅱ形式（7～9）は、I-23区からの出土である。形態の特徴として、口縁部が若干外反し、やや開きぎみである。胴部は、球形であるが、中央部が若干張りぎみである。底部については、3点共にバラバラではあるが平底を意識した部分も見うけられる。

第Ⅲ形式（10～15）は、I-10・16区各1点、J-21区3点、J-23区1点の出土である。形態の特徴として、口縁部が大きく開き、胴部から底部にかけては、バラバラであるが、胴部中央部が若干張りぎみである。10は、11～15の口縁部が、胴部からの造り出しであり、外反して開くのに対して、張り付けであり内彎する口縁を持っている。

16は、口縁部が欠損の為にはっきりとした、形式は断定できないが、第Ⅰ形式になるのではないかと思う。

全体的な特徴としては、指頭圧痕がはっきりと残っておらず、見落すこともある。第Ⅲ形式は、第Ⅰ・Ⅱ形式にくらべて、スマートな造りをしている。第Ⅰ・Ⅱ形式においては、底部内面に、成形時に残されたと思われる、粘土の高まりが見られるが、第Ⅲ形式には、見ることができない。

鉢4点は、J-21区出土である。17は、造り出しの高台を持っているが、18～20は底部やや尖りぎみか、平底ぎみである。胴部から口縁部にかけては、17は全体に内彎しているが、18～20は底部より内彎し立ち上がるが、口縁近くで垂直ぎみに立ち上がる。壺にくらべて、指頭圧痕が多くみられ、18の口縁部において見られるように、口縁部は内外面より圧迫し造られている。

壺第Ⅲ形式の12～14、鉢4点は、J-21区同一層よりの出土であり、同一時期と考えられる。壺第Ⅰ・Ⅱ形式の1～5、7～9は、I-23区の同一層の出土である為に、時期差は無いと考えられる。第Ⅰ・Ⅱ形式は、I-23区第2層下層であり、第Ⅲ形式・鉢がJ-21区第3層下層の出土である。J-21～24区にかけての第3層が、薄いことを考えると、第Ⅰ・Ⅱ形式が、第Ⅲ形式・鉢よりも、新しいと考えることはできるが、大きな時期的な差はないと思う。（大砂古）

（3）須恵器（第29～32図）

今回取りあげた須恵器は総数46点である。製塙土器を共伴したG18土坑の3点を除けば、ほとんど攪乱層からの出土である。

図化した須恵器は比較的残存部分の多いものを無作為に抽出したものであり、相対的に少量と思われる森編年Ⅳ（中村浩編年Ⅲ）以降の資料についてはできるだけ載せるようにした。発掘調査区の須恵器全般についての統計的処理は最終報告にゆずるとして、今回概報で扱った遺物に限定してみていくことにする。現在継続整理中のため、須恵器の出土状況からみた遺跡の性格については最終報告で改めて検討することにして、ここでは大まかな傾向を指摘するにとどめたい。

器種と出土地点の関係をみると（第29図）6世紀後半～7世紀初頭と推定される高杯（破片のため断言できないが、おそらくすべて無蓋短脚高杯と思われる。）がK17・K20に集中している点は注目される。さらにこれらの調査区では、大甕、平瓶等、特殊な器種が主な共伴遺物であり、近接するK16では脚付碗を検出している。すぐ東側J列の舟形土製品、ミニチュア土器を伴出した庄内併行期の土師器群包含層の存在とも考え合わせて、なんらかの祭祀的行為との関連が濃厚であると思われる。また、5世紀後半頃と考えられる古式の蓋杯は現在のところF24から出土しているのみである。一方、F3～F5の調査区もひとつの遺物集中地区で

あるが、中村編年Ⅱ～Ⅳの長期間にわたるものであり、層位的には上下の攪乱を受けている。良好な包含層としてはG18土坑がある。ここからは蓋杯のセット、無蓋高杯の一括資料(第32図—44～46)が出土している。杯蓋(44)は天井部を欠損するが、杯身(45)、高杯(46)は接合復原によってほぼ完形に近いものになる。ともに古墳後代後期に属し、森編年Ⅲ後半、中村編年Ⅱ型式4段階にあたる時期のものである。器壁はいずれも外表が粗雑になってきており、大量生産による製作上の簡略化がすすんでいる。高杯と杯身は口径が等しく、若干高杯の杯部が深くなるもののちょうど杯蓋を逆転し、杯部に転用した如きのものである。

次に器種別に特徴を述べる。(個々については観察表参照)

蓋杯(第30図—1～16)

杯蓋1～3、杯身8・9は中村編年Ⅰ型式3～5段階にあたる。(以下、型式は中村編年による)攪乱層から出土したためセット関係は不明であるが、2と9は小型化傾向が著しく、Ⅰ型式最終段階の組み合わせとすることができる。これらはいずれも端部整形が丁寧で調整もゆきとどいているが、胎土中には2mm前後の大粒の白砂粒を含むものが目立ち、表面に亀裂を生じているものもある。Ⅱ型式に属するものは杯身10～14である。9～12はいずれもたちあがりが短く内傾し、端部も丸い。Ⅱ型式でも新しい段階に属するものである。13がやや古式の様相を示している。杯蓋とした5はⅡ型式6段階にもってくことができるであろう。Ⅲ～Ⅳ型式と考えられるものは、杯蓋4・6・7、杯身15・16である。杯蓋とした4はしっかりした長いかえりをもち、宝珠様つまみ出現時のものと思われる。6はかえりが消失した直後のⅣ型式1～2段階のものである。7は6よりさらに扁平となり、口縁部の形状等から6より後出のものであることは明らかである。15のハリツケ高台は底端部に付されており、やや新しい傾向を示している。

高杯(第30図—19～29)

19を除いて無蓋短脚高杯であろうと考えられる。いずれも脚基部が細く、大きく開くものであるが、脚部先端の形態によって3つのタイプに分けられる。

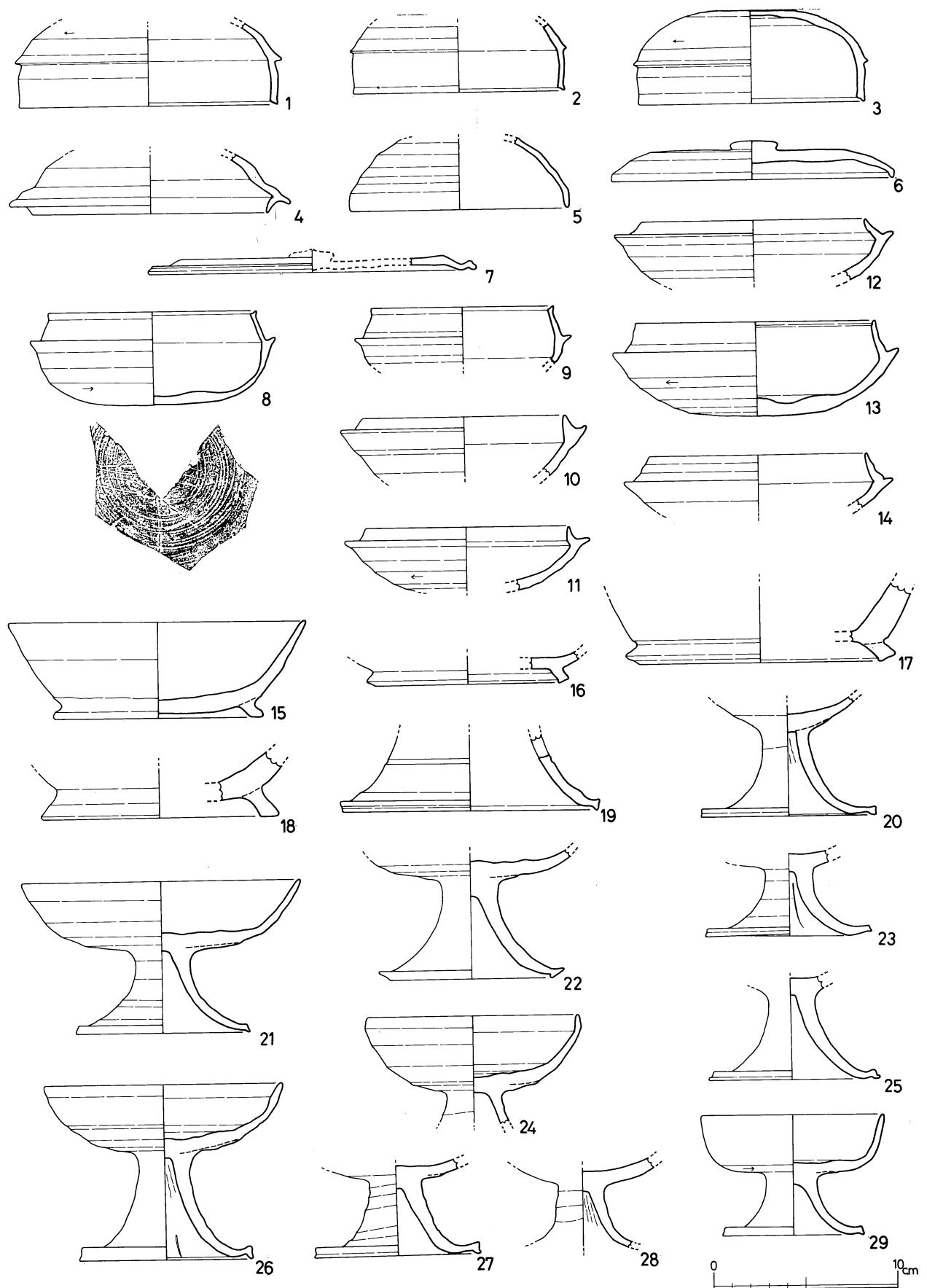
A類 先端が垂直、あるいは外傾ぎみに屈曲するタイプ(20・21・26・29)

B類 先端が大きく内傾するタイプ(22)

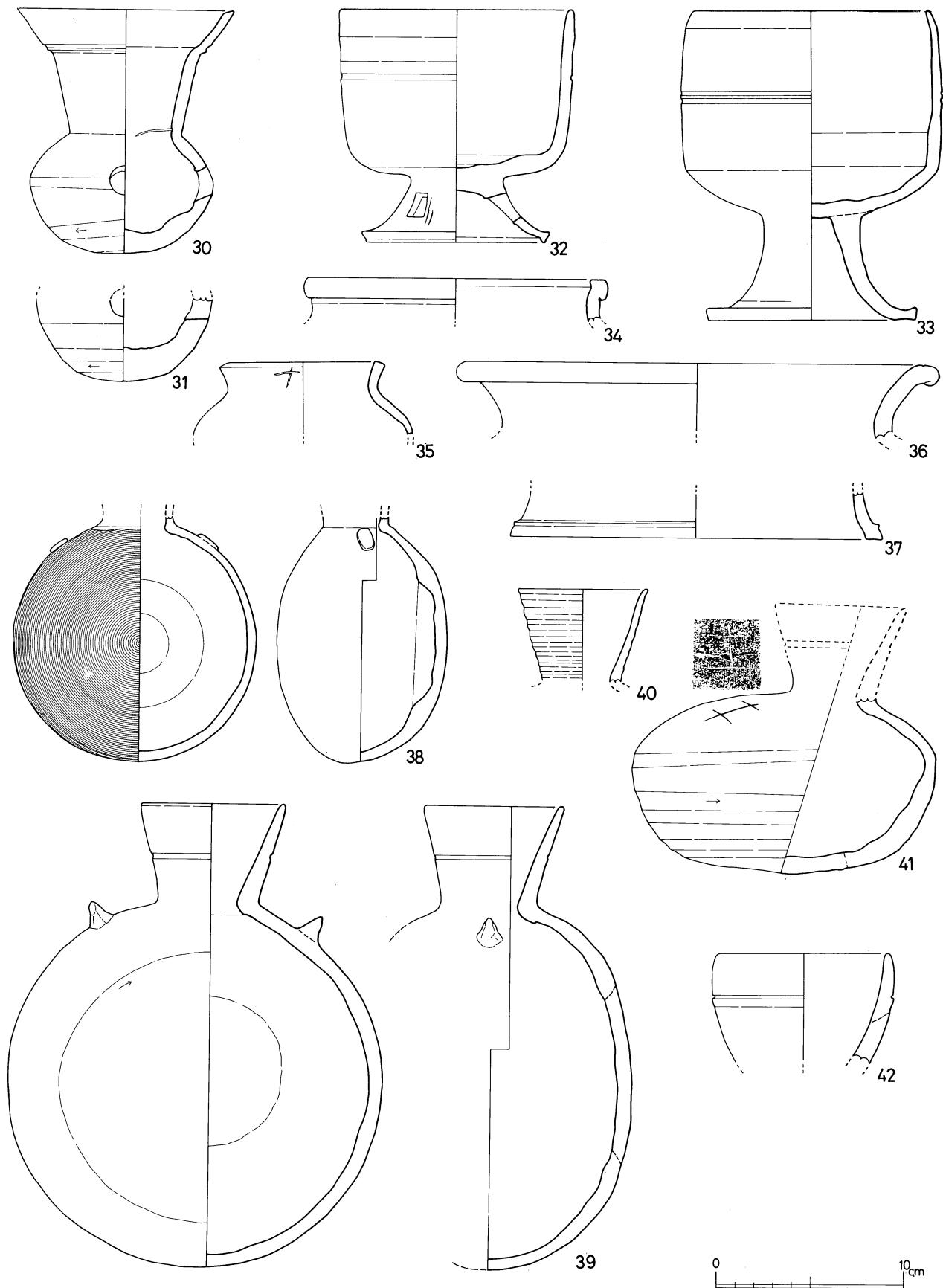
N	M	L	K	J	I	H	G	F	E	D	C	
										■		26
						○						25
				□			○○					24
							○○					23
												22
												21
		×	●●●	×								20
●						○○○	○○○					19
							○○		●			18
			●●	△△								17
				□								16
												15
										○		14
												13
												12
												11
												10
												9
												8
												7
												6
									●	○		5
							○○	▲				4
							○○	▲				3
												2
												1

○：杯
●：高杯
△：提瓶・平瓶
□：脚付
■：-

第29図 須恵器器種別出土地区一覧図



第30図 須恵器実測図(1)

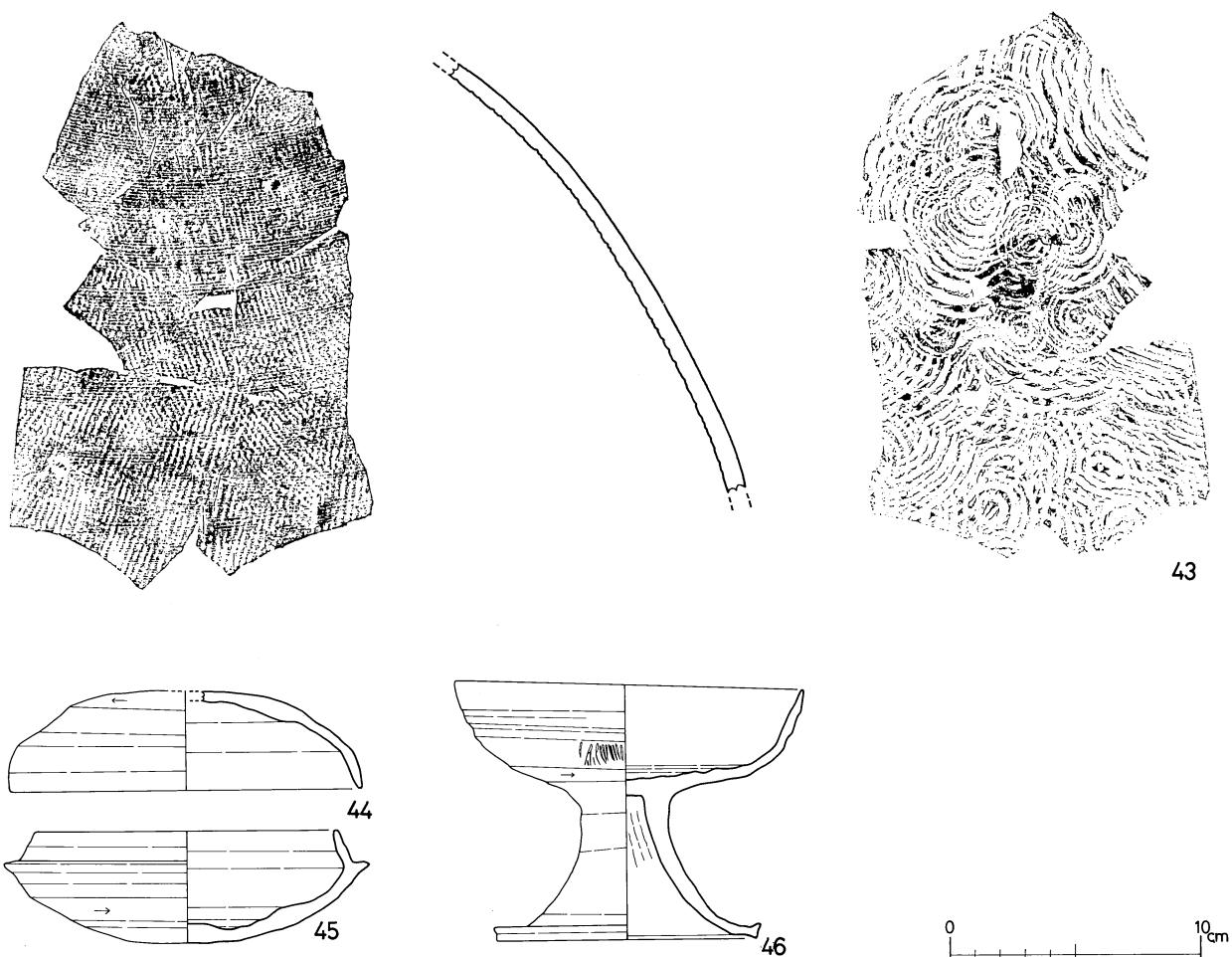


第 31 図 須恵器実測図(2)

C類 先端がいったん外傾ぎみに折れたあと再び外側に張り出すタイプ(23・25・27)

A類のなかでは29が小型化しており、杯部はほぼ平らな底部と直線的にのびる器厚の均等な体部をもつなど、21・26と比べて新しい傾向を示している。B類はむしろ特異なもので数量的にも僅少であると思われる。C類は杯部の形態が不明であるが、やや小型の傾向をもつようである。

これらはⅡ型式の比較的新しい段階からⅢ型式1段階までのあいだに比定できるものであろう。19は長脚高杯の脚部である。20~29の高杯より古く位置づけられる。



第32図 須恵器実測図(3)

甕 (第31図—30・31)

30はⅡ型式1段階に比定される。30・31ともにスカシ孔は調整後、外方から下内方に向かって穿孔したものであり、その際内側にはみ出した粘土はそのままのこすなど粗悪化している。大きいもので3mm程度の砂粒を多く含み、底部外面には回転ヘラ削り調整に伴う砂の動きで渦巻状の沈線が刻まれている。

提瓶 (第31図—38・39)

39は依然として大型化したままであるが、把手は突起状に退化している。38は提瓶の最終段

階と考えられ、極端に小型化し、把手の形骸化は著しく、径1.2cm、厚さ3mm程度の円形の平たい粘土を両肩部に貼り付けている。

出土した須恵器は概ね5世紀後半～8世紀後半にわたる断続的なものである。

(玉城)

(参考文献) 森浩一・石部正志「後期古墳を回顧して」『古代学研究』30、1962年古代学研究会

『陶邑I』大阪府文化財調査報告第28輯1976年大阪府教育委員会

『陶邑III』〃 第30輯1978年〃

中村浩『考古学ライブラリー5須恵器』1980年ニュー・サイエンス社

渡部明夫「香川県における須恵器編年」(1)『香川史学』第6号、1977年香川歴史学会

〃「讃岐国の須恵器生産について」『鏡山猛先生古稀記念古文化論叢』1980年

(4) 製塩土器(第33～40図)

大浦浜における本年度の調査、製塩土器の全出土遺物に占める割合は、90%を越えている。また出土状態は、大きな破片から、細片に至るまで、さまざまである。大半が口縁部の残りで、磨滅したものである¹。製塩土器の時代の幅は、古墳時代前期～奈良時代と広い。

各時代の製塩土器の出土状態について述べると、古墳時代前期の脚台付製塩土器は、量は少ないが、比較的脚部の残りもよい。次時期と推定される脚台が矮小化する製塩土器は、数少ない。薄手で丸平底の製塩土器は、F-20地区で、ほぼ予備調査と同じ地点で出土し、細片が多い。⁽¹⁾ 厚ぼったく、丸底で大型化した、古墳時代後期の製塩土器は、全製塩土器のうち、占める割合は90%以上となっている。奈良時代の尖底化する製塩土器は、本年度調査期間中は、出土点数は、数点を数えるのみである。⁽²⁾

出土した製塩土器について、全てを網羅することは、本年度においては不可能であり、また大半が、カク乱を受けた層よりの出土である。従って、共伴する遺物は、信頼たるべきものが少ない。製塩土器として一括して取り上げることができたのは、4つの土坑である。故に本稿では、取り上げることのできた製塩土器について述べたい。これらの製塩土器は、数は少ないが、残存部の状態が比較的良好である。また、「師楽式土器」の呼称は、本報告では、採用せず、「製塩土器」の名称を使用したい。⁽³⁾

第33図1～22は、H-18区 SPO3出土のものである。

この遺構での、製塩土器は、成形技法は、2種類ある。⁽²⁰⁾のように、脚台と鉢部を、一度に作り上げる技法と、(1)に代表されるように、脚台と鉢部を別々に作り、その後で接合するという方法である。接合は指によるものである。またほとんどの土器に、脚部と鉢部付近の絞りが、顕著にみられる。また、整形技法は、2種類に大別できる。まず第33図の、(1)～(8)の様に、脚部内面の底部にまで、指による整形の後に、ナデ調整をおこなっているものがある。その他は脚台底部までのナデ調整で、脚台内面においては、ナデ調整を施していない。この地点の製塩土器は、器表面をタタキ目で、内面をナデ調整としている。また、(1)，(3)，(4)，(8)～(12)，(22)は、脚台底部の器表を、タタキ目で調整しているように思われる。色調・胎土・焼成も程度の差はある、ほぼ同じである。

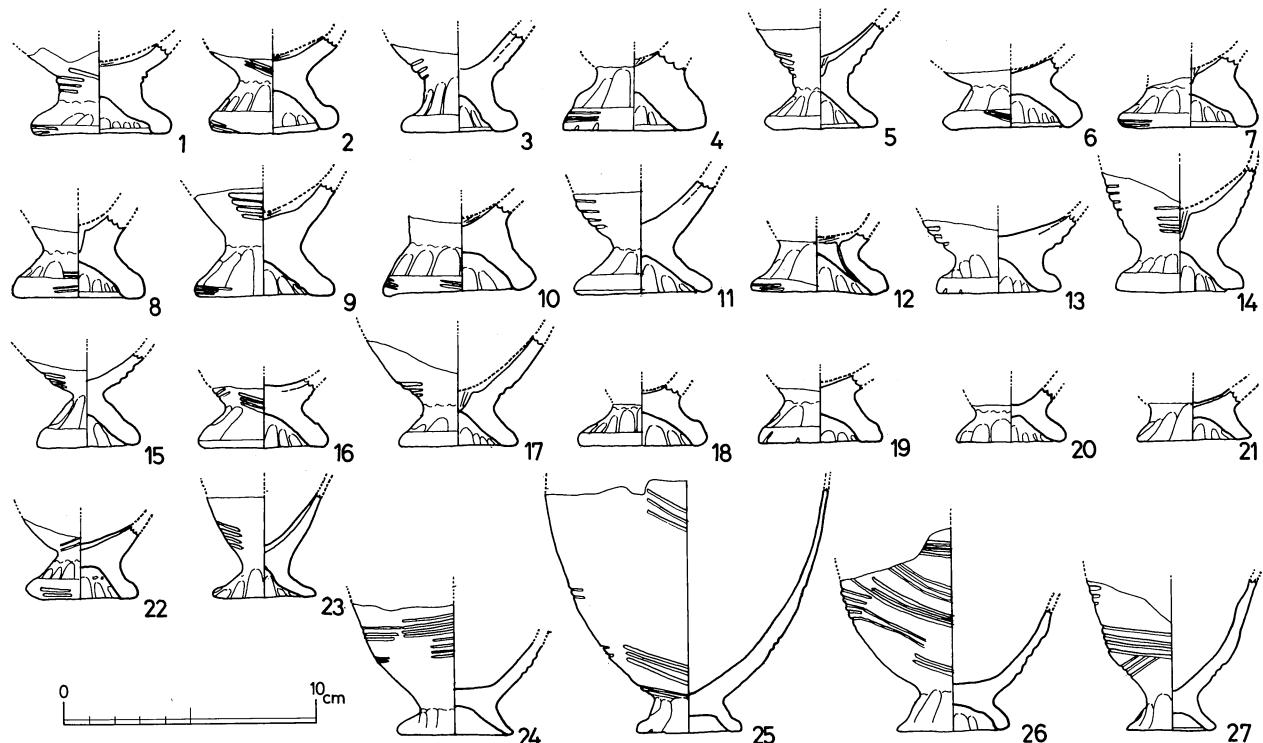
脚台の底径は、4.2～6.0cmまでと一定ではない。また脚部底面から鉢部底面までの高さは、2～3cm前後である。また、器厚については、脚部の方がやや厚く、0.6～1.0cmである。しかし、(4)のように、1.6cmの厚さをもつものもある。鉢部は0.4～0.7cmである。いずれも、脚台部分および鉢部底面の破片であるので、立ち上がりの傾斜の口径は、不明である。

全ての土器は変色し、色やつれをしており、鉢部は底部付近を除いては、出土していない。このことは、この地点の製塩土器が、二次的に火を受け、内面が剥離する現象を明確に示している。

第33図24～27は G-15区 SKO 1の出土のものである。

この遺構出土の脚台付製塩土器は、SPO 3出土のものに比べて、破損状況が少ない。また、出土点数は僅かに4点であるが、安定した土抗で、共伴する土器も信頼できる。布留式の椀が出土している。このことにより、この土抗において出土した製塩土器は、家島諸島から広島県までに広く分布する製塩土器と、成形技法と形態において、多くの共通点を持つ古墳時代前期のものと考えられる。

(24) は、他の3点と成形技法は同じである。脚部と鉢部とを接合して形づくられている。底径は、4.7cm、脚部の器厚は0.4cm前後と、H-18区の製塩土器に比べると、やや小ぶりの脚台である。整形は、脚部内面はナデ調整、鉢部器表面はタタキ目を施し、内面は丁寧なナデ調整をおこなっている。(25) の底径は、4.2cm、器厚は0.5cmである。整形は、指によるものが、脚台に顕著に出ている。タタキ目は、(24) に比べると、やや目の広いタタキ板を使用していると思われる。脚台内面は、指頭圧痕がみられる。そして、鉢部内面は、ナデ調整をおこなっている。全体に、肌あれを呈しており、ことに鉢部内面は、黒く変色した部分がある。(26) の底径は、4.5cm、器厚は0.6cmである。整形・調整は他の土器と同じである。ただ内面の色あせで、黒く変色した周辺が、やや赤みをおびている点に注目したい。(27) の底径は3.6cm、器厚0.4cmと、この土抗で出土した製塩土器の中では、もっとも小ぶりである。他と比較して、脚部と鉢部付近の絞りが、よりみられる。立ち上がりは、ゆるやかである。



第33図 製塩土器（1～23 H-18区 SPO3 24～27 G-15区 SKO1）実測図

第34～37図の製塩土器は、G-18区 SK01出土のものである。

この土坑より出土する製塩土器は、共伴する須恵器により、古墳時代後期に属する製塩土器である。また、大浦浜で出土する製塩土器の大半が、この種の土器である。すなわち、丸底で、器壁は厚ぼったく、大ぶりという特徴をもっている。出土した製塩土器は、いずれも破片であるが、大きなものが多く、復原できたものもある。器形・器厚・胎土・焼成・色調は、復原したものを例として、述べてみたい。器形は、口縁と肩部との境がみられ、口縁は内傾している。器高は15.5cm、器厚は0.5cmである。器表面は、口縁部をタタキ目で、肩部から胴部にかけては、指による整形をおこなっている。内面は口縁部から底部に至るまで、丁寧な、ナデ調整を施している。色調は、淡茶褐色で、胎土は1～2mmの砂粒をふくみ、焼成は良好である。成形は、巻き上げによるものと思われる。

この地点の土器は、火を受けた後がなく、他の地区で出土した同種の製塩土器とは、この点で異なっている。

本稿では、タタキ目による分類を、おこなった。

(①) 平行タタキ目 (1) ~ (42)

この平行タタキ目は、口縁部のみに施されているものである。また、他のタタキ目と比較しても、数が多い。(1) ~ (27) は、タタキ目が、密なものである。(28) ~ (36) は、ややタタキ目が粗である。(37) ~ (42) は、タタキ目が粗になっている。(11) は、タタキ目が斜めに入れている。(12) は、タタキ目を施した上に、指で調整を施している。

(②) 格子目状タタキ (43) ~ (53)

口縁部に格子目状のタタキを施している。格子といつても種類が多いので、分類はできない。そこで、代表的な格子目を挙げておく。(43) は横長のタタキ目を持っている。(44) は、斜格子状であり、(47) は縦長状となっている。(51) は口縁端部が平行タタキで、胴部の上半が、格子目という複合タタキで注目される。まず口縁部に平行タタキ目を施した後に、斜めに平行タタキを入れたと思われる。

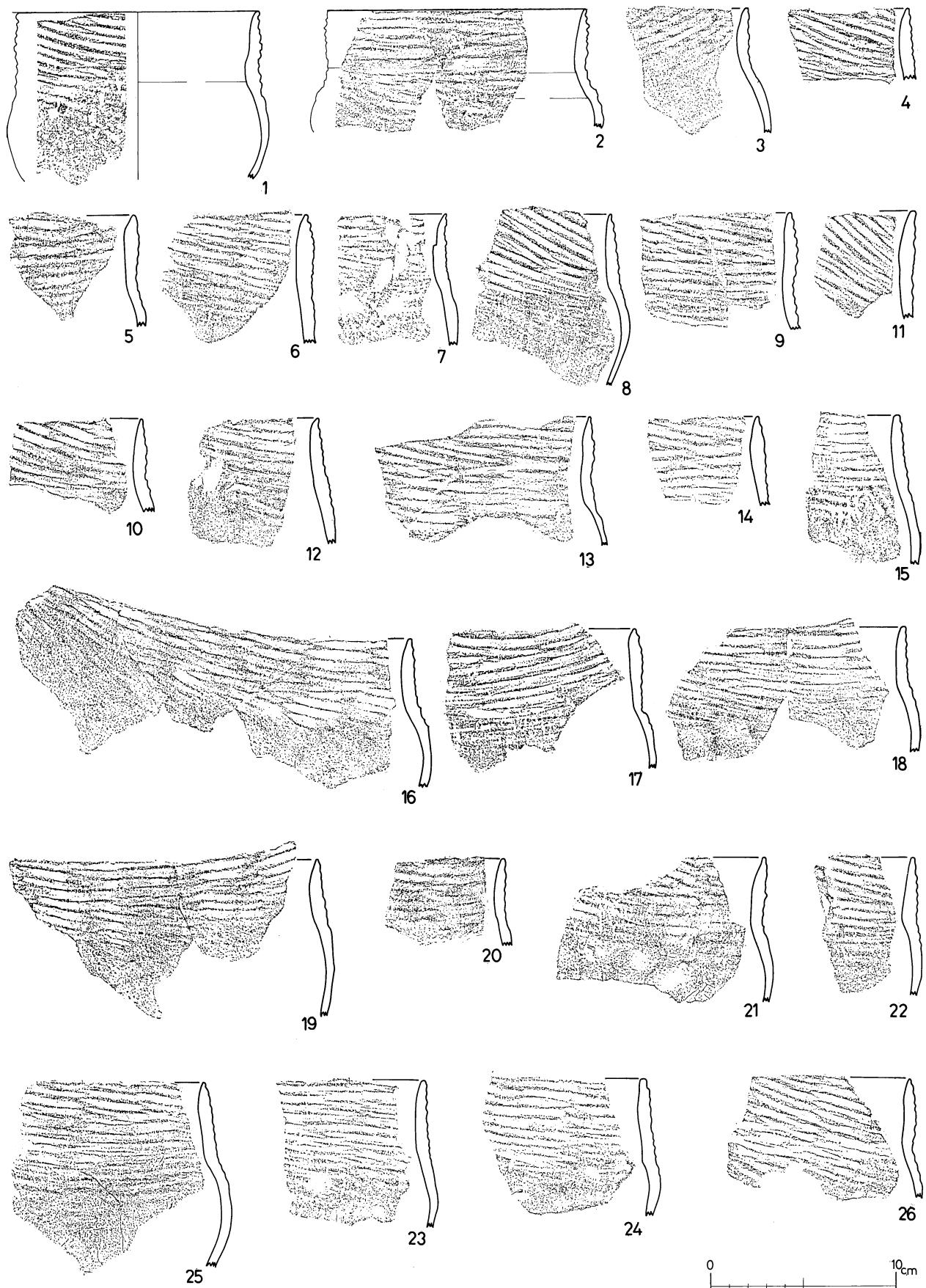
(③) 矢羽根板状タタキ (54) ~ (66)

このグループは、矢羽根板状のタタキ目を施したものである。また(63) は、格子状とも思えるが、中央に稜線を持つために、この種類に入れておく。

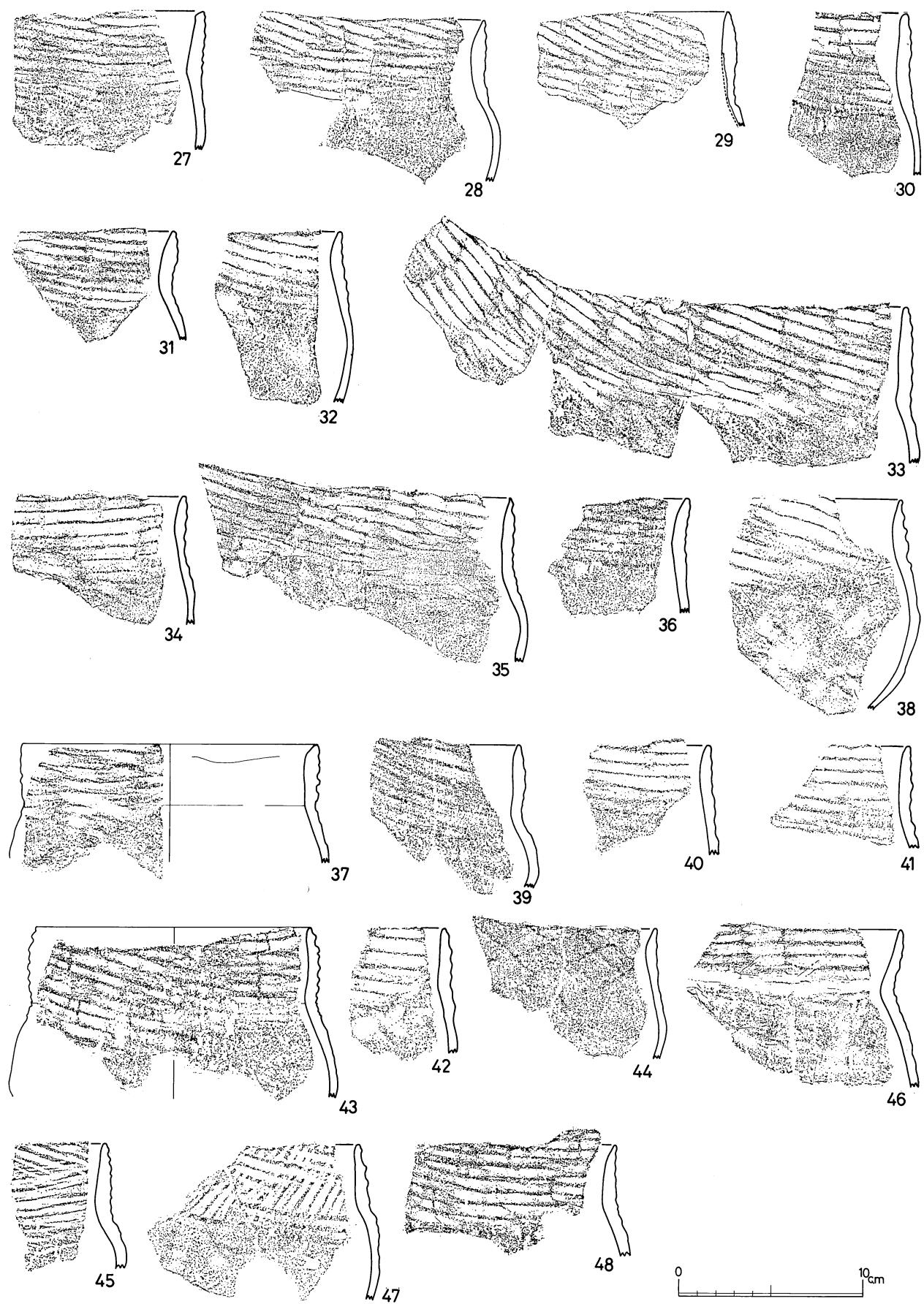
(④) その他のグループ (67) ~ (79)

タタキ目が磨滅して、判然としないものや、平行タタキが重複しているものを入れた。(67) は、山形状と思われるが、判然としない。(68) ~ (73) は、平行タタキを組み合わせている。(74) ~ (76) は、タタキの種類が判然としないグループである。(77) ~ (79) は、無文と思われる。

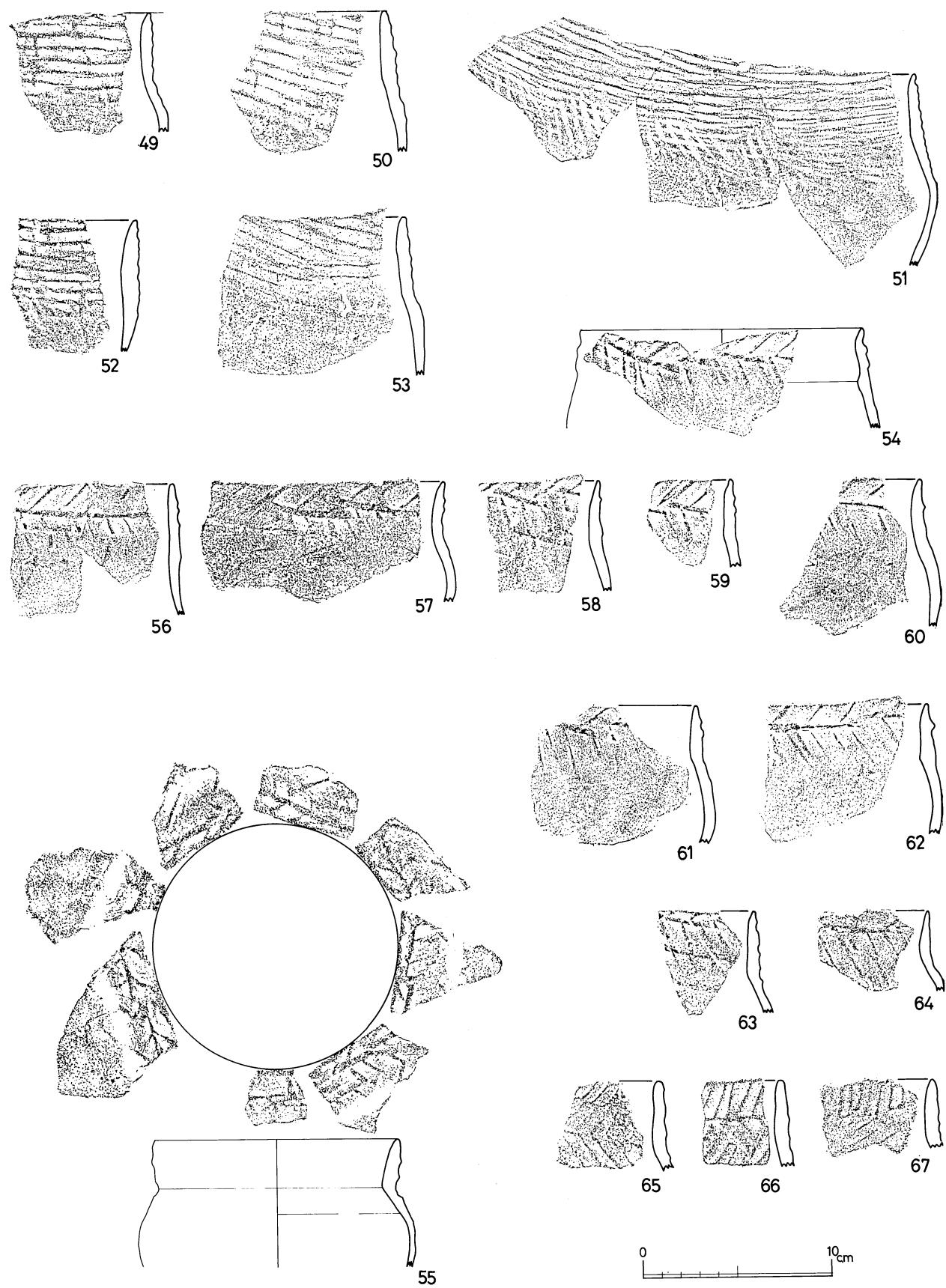
第38図はG-18区 SK01から出土したもので、接合復元によって唯一ほぼ完形になったものである。二次焼成を受けた痕跡はみられない。底部は丸く不安定で、全体的にいびつである。口縁部は雑な整形のため、大きくゆるやかな波状を呈している。外面は口縁部付近に幅1mm程度、凸線状で平行と思われるタタキ目がのこっているが、不明瞭でその単位は把えにくい。体部から底部にかけて指圧痕が明瞭にみられ凹凸を形成している。ところどころに亀裂がみられる粗雑な仕上げである。内面の調整は不明であるが、外面に比べてなめらかな器壁をもつ。底部付近に成形時のものと思われるヘラ痕がわずかにのこり、口縁部と体部を画する弱い陵線付近に、不明瞭ながら指圧痕がみえている。口縁部は若干肥厚しているが全体的に薄手である。小砂粒



第34図 G-18区SK01出土製塩土器実測図(1)

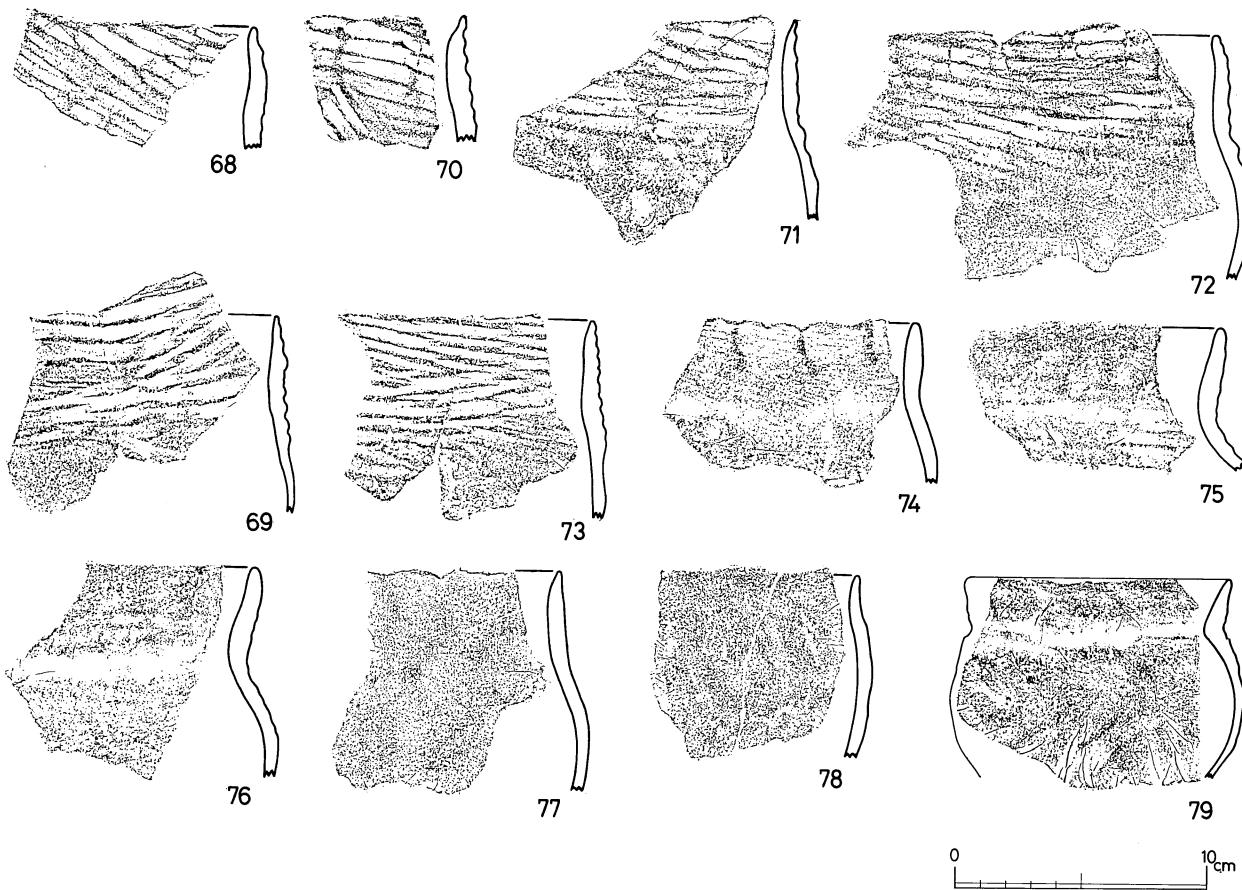


第35図 G-18区SK01出土製塩土器実測図(2)



第36図 G-18区S K01出土製塙土器実測図(3)

をわずかに含み、茶褐色を呈している。



第37図 G-18区SK01出土製塩土器実測図(4)

第39図はH-14区SK01下層出土の資料である。第40図はF-4区第3層の、古墳時代を中心とする包含層出土の資料である。今回は、資料だけ掲げておく。

以上、遺構より出土した製塩土器について概述した。ここで、大浦浜における製塩土器について、今年度の調査で問題点として挙げられた点を指摘したい。

(1) 弥生時代前期～後期までの土器は出土するにもかかわらず、後期終末から古墳時代初頭以前の、外表面にヘラ削りないしはナデ調整を施した土器⁽⁴⁾は出土していない。地域によっては、概に縄文時代から、そして、備讃瀬戸においては、弥生時代中期後半よりおこなわれていた製塩が、この時期大浦浜には成立していなかったことを示すのか、あるいは、「地域性により、上記のような製塩土器を用いずに、他の方法で塩を得ていたのかは、今後の問題点となろう。

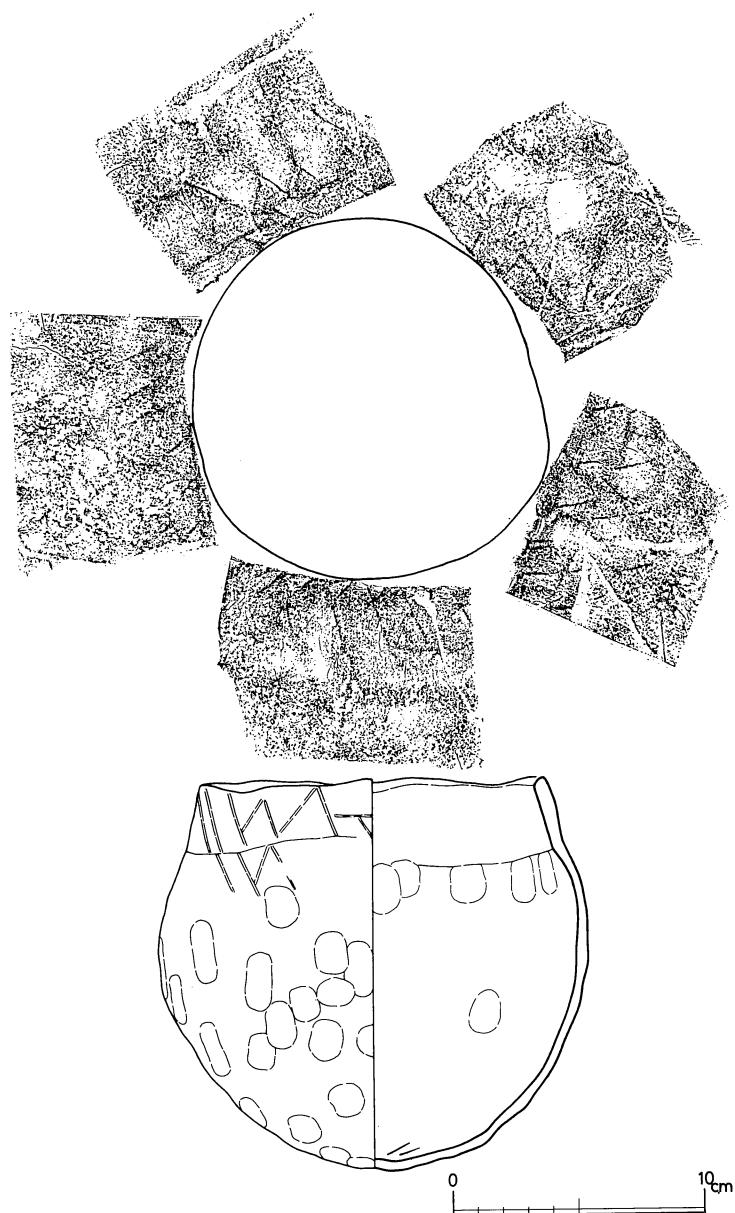
(2) G-18区SK01で出土した製塩土器は、二次的な火を受けていない。製塩土器は大量生産され、使用後は廃棄される⁽⁷⁾いわば使い捨ての土器である。それが、火の洗礼を受けていないのは、なぜかという疑問点である。

先にも述べたように、本年度だけでは、編年その他の作業は不可能であり、詳細については、本報告を待ちたい。

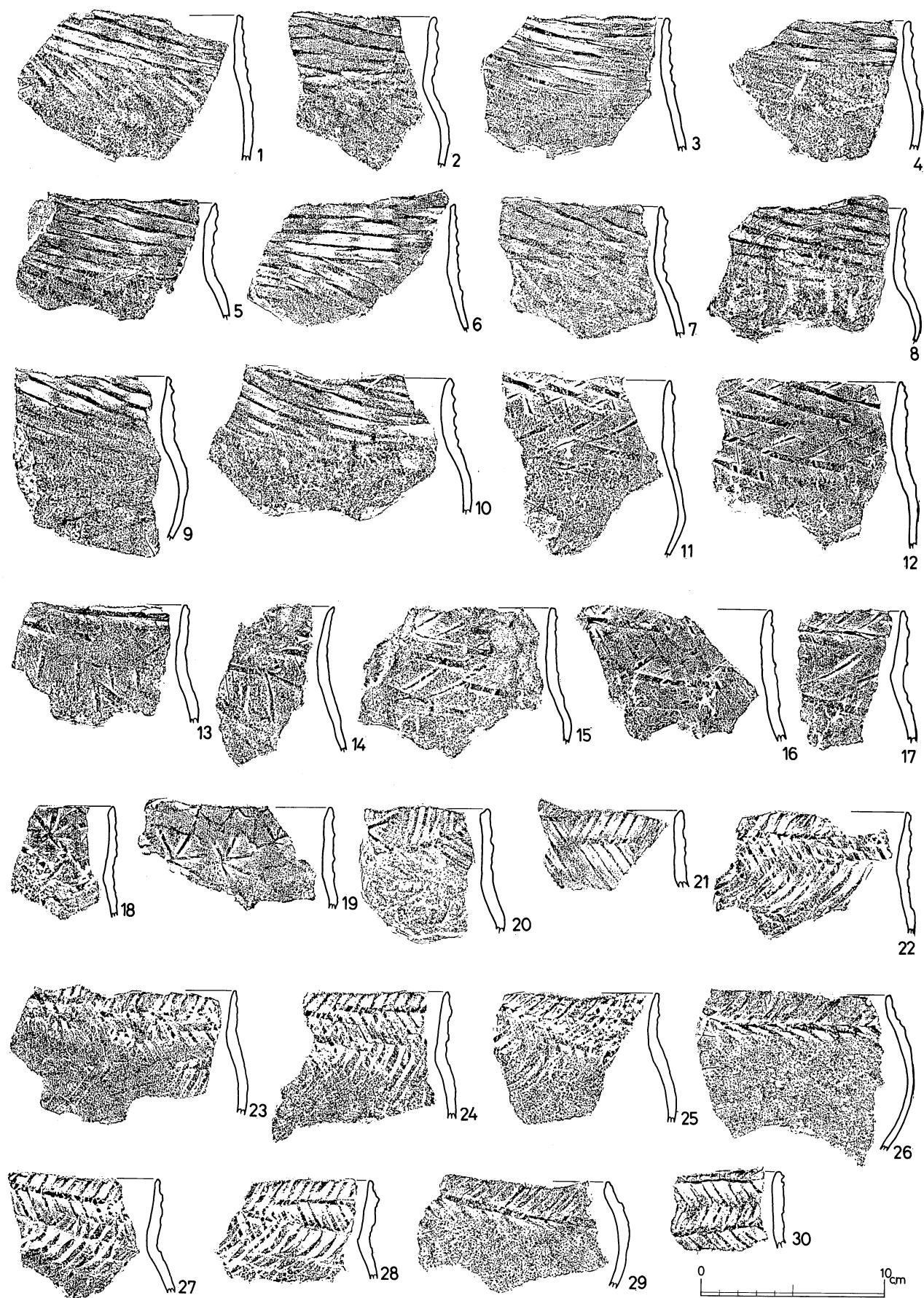
(安 田)

(参考文献)

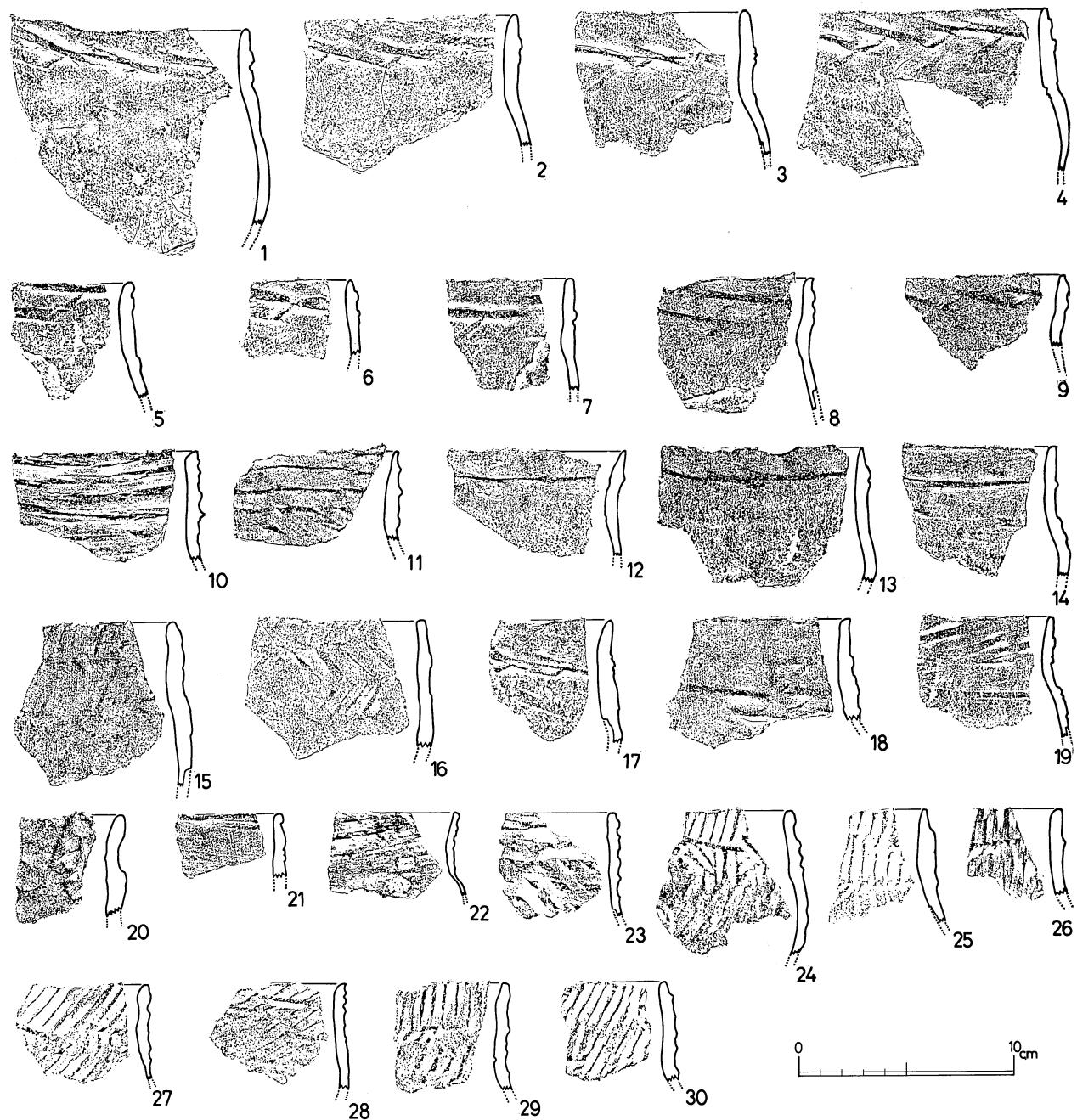
- (1) 大山真充 『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財予備調査報告(1)』 香川県教育委員会 1977
- (2) 近藤義郎 『日本塩業史大系 史料編 考古』 日本専売公社 1979の編年表を参考とした。
- (3) この方法は、『倉敷考古館研究集報14』の中で間壁葭子氏が述べているのを、引用させて頂いた。また、近藤義郎氏の「土器製塩の話」『考古学研究』103号(1979年)も、参考とした。
- (4) 岩本正二「弥生時代の土器製塩」『考古学研究』1974
- (5) 近藤義郎『日本塩業史大系 史料編 考古』 1978
- (6) 間壁葭子 「児島・上之町保育園内遺跡」『倉敷考古館研究集報』六 1969年



第38図 G-18区SK01出土製塩土器実測図(5)



第39図 H-14区SK01下層出土製塙土器実測図



第40図 F-4区第3層出土製塙土器実測図

(5) 奈良三彩小壺、船形土製品他(第41図)

奈良三彩小壺は、I-19区第2層から出土した。底部と胴部の破片である。底径4.5cm、残存高3.7cm。肩部は丸く、中央よりやや上で最も張り出し、胴部下間に段がある。高台は約5mmの高さで、八の字形にふんばっている。

胎土は黄白色で、外表には緑・白・橙色の釉がかかる。橙色の施釉が最後である。内面には見込み部分に白色の釉がかかり、緑釉も班点状に残っている。

船形土製品は5点出土した。いずれも手捏のものである。第41図の1は、F-20区第2層出土のもので、7のミニチア土器と共に伴している。船首と船尾を外と上方向に軽くつまみ出し、突出部をつくり出している。この突出部が全長に占める割合は少ない。2はJ-18区の古式土師器群と共に伴である。突出部の形態は1と同じであるが、船幅が広く、一方の突出部に穿孔がある。3はJ-21区第2層の出土である。一端が極端に大きく上方に造り出されており、この突出部は全長の約1/3を占めている。突出部には穿孔がある。4はH-13区第2層の出土である、一端が3同様に上方に造り出されている。もう一端は欠損している。手づねの痕がよく残っている。5はJ-19区第2層の出土である。欠損品であるが、一端を外方向に長く造り出しており、その両側にヘラ描きによる線刻が施されている。

以上5点の船形土製品の船底はすべて丸底になっており、竜骨を意識したものは認められない。船首と船尾の造り方に着目すると、1・2のように両端を軽くつまみ上げるタイプのものと、3・4のように一端又は両端を大きく上に造り出すタイプに分けることができるだろう。

2は古式土師器と共に伴しているが、他の4点は攪乱土層からの出土で時代は限定しづらいが、古墳時代のものであることは、攪乱土の出土遺物の状態況から見て間違いなかろう。

船形土製品の出土例は全国的に少ないものだが、県内では栗島、与島、喜兵衛島で出土しており、今後瀬戸内でも資料は増加すると思われる。

注

(1) 松本敏三「坂出沖の祭祀遺物」『瀬戸内海歴史民俗資料館だより』第10号

(2) 近藤義郎氏の教示による。

(6) 銅製品・鉄製品(第42図)

出土した銅製品は、J-21区第2層から耳環が1点と、調査区南東部に広がる奈良～平安時代の包含層から帶金具、銅錢などが出土した。

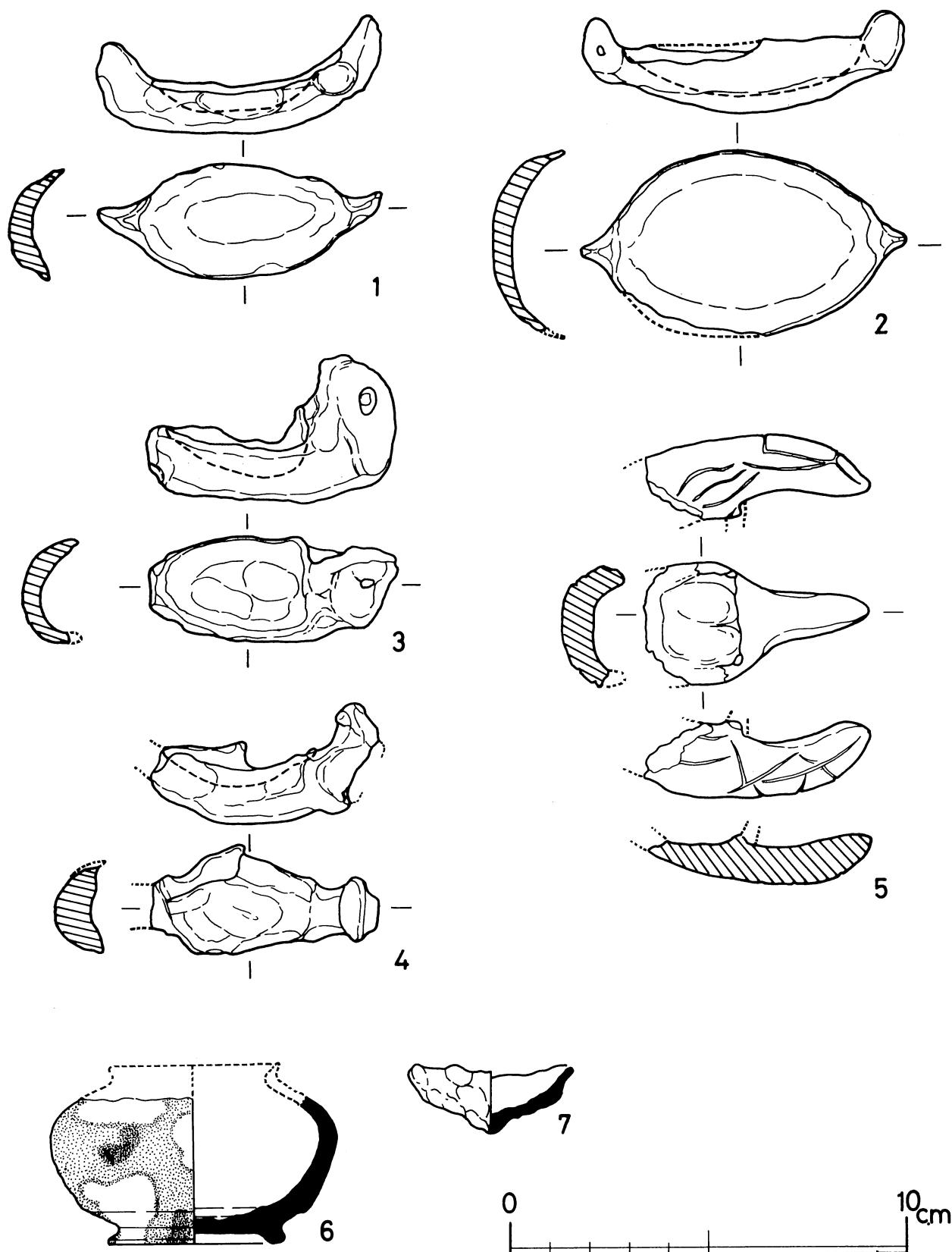
第42図の1は金銅製の鏡具で、B-8区第3層出土である。長さ3.3cm、幅2.3cmで薄い板状のもので、屈曲部が折れている。表中央部に鍍金が残っている。

2は丸鞘で、B-7区第3層出土である。長さ2.4cm、幅1.5cmで、裏に留金の足が3本ある。鍍金は認められず、漆塗りだったのだろう。

3は、金銅製の花形座金具である。B-8区第3層出土である。径2.1cmで中央に方形の孔があき、8本の毛掘り状の細い線で花弁を表現している。花弁にはハート形の孔があけられている。表面に鍍金が多く残っている。

4は小鈴で、B-8区第3層出土である。鈴の下半分のもので、細い孔が2ヶ所ある。つぶれて変形しているが、元は径1.5cmぐらいのものだろう。

5は釘で、B-8区第3層出土である。断面は方形で、頭部は欠損している。長さは3.8cmである。



第 41 図 船形土製品、奈良三彩小壺実測図

6～10は皇朝十二銭である。6は万年通宝で、約 $\frac{1}{3}$ が欠損している。萬は「内」につくる。

C-4区第3層出土である。

7は神功開宝で、B-5区第3層出土である。功の旁は「力」で、開は「門」につくる。

8も同じく神功開宝で、B-6区SK01からの出土である。功の旁は「刀」につくり、開の門構えは「門」につくり、旁の开は「井」につくる。

9は降平永宝で、E-5区第3層出土である。

10は長年大宝で、B-4区第3層出土である。裏面の縁がほとんどない。

以上が銅製品であるが、鉄製品の出土は少なく、帶金具や銅錢が出土した包含層から、刀子や不明品が2、3点出土している。

(7) 石製品

弥生前期の土器出土周辺からサヌカイトの石器、フレイク、チップなどが比較的多く出土した。他に扁平片刃石斧、蛤刃石斧などが出土している。

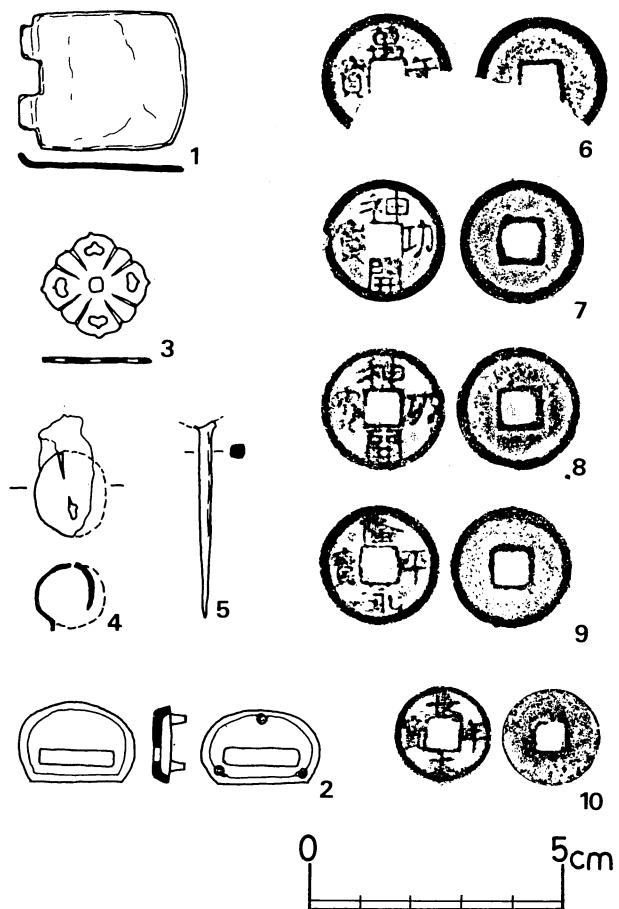
古墳時代の石製品は少なく、H-14区SK01から有孔円板と、J-17区第2層より滑石製の紡錘車がそれぞれ1点づつ出土している。

(8) 土錐・蛸壺

調査区南東部に良好な状態で残っていた、奈良～平安時代、古墳時代の包含層から、製塩土器などとともに、土錐、蛸壺が多く出土した。土錐は有溝、管状、棒状有孔土錐などであるが、前二者が量的に多い。蛸壺は釣鐘状のもので、須恵質のものは今のところ確認されていない。中世の遺構面からも、土錐、蛸壺が検出されている。

(9) 動物遺存体

動物遺存体は、15列より南の、古墳時代や奈良～平安時代の包含層、中世の粘土遺構群などから出土した。貝類は、サザエ、アサリ、ハマグリ、カキ、オニニシ、ヨメノサラ、ウミニナなどで、獣骨、鹿角、魚骨などが出土している。



第42図 銅製品実測図

8 おわりに

大浦浜遺跡の本年度の調査は、当初予想されていた以上に貴重な成果を上げることができた。本概報は55年度調査のうち、55年12月末までの調査知見をもとに作成した。調査面積に比べて出土遺物は多く、すでに整理用コンテナに700個に達し、毎日増え続けている。

今回約2ヶ月間の整理期間で、眼を通すことのできたものはごくわずかで、ここで多くのことを報告できない。

そのため本概報は整理作業の一段階の様子を示しているにすぎず、今後の本格的な整理や本報告作業で変更でのる所も多いと思う。

まとめでは、発掘や整理作業中に気付いた点などを中心に述べ、今後の参考材料としたい。

大浦浜遺跡は長期にわたる複合遺跡であるため、まず遺跡の変遷をみていくことにしよう。

大浦浜の西に位置するのが「たてわ山」である。この北麓に設定した第1トレントより縄文前期の土器が出土した。櫃石島では初めての出土である。この土器は口縁部外面に爪形状の刺突文を有し、羽島下層式の範ちゅうに入るものであろうが、凸帶がめぐる資料は珍らしく、今後類例の検討が必要であろう。この土器の出土地点は、現在の海岸線より250m奥まった地点で、標高は0.5mである。

早期の土器は櫃石島では大浦遺跡や海床遺跡で出土している。この両遺跡は標高約20mの低丘陵上にある。後・晩期の土器は大浦浜の標高約2mの砂浜から出土している。時期により出土地点が異なるのは、おもしろい現象である。これは縄文海進とよばれる生活環境の変化に対応した動きであろう。早期の押型文の頃はまだ旧石器時代と同様な生活様式が続いており、遺跡も低丘陵上に立地しているが、前期になると海水面もかなり上昇し、海に面した山裾付近に居住地が移るのである。瀬戸内西部では縄文後期前半頃に現在のような海岸線が形成されはじめると推測されているが、^{注(1)}櫃石島においても同様な時期に砂洲が形成され、その砂浜上での生活が始まったのである。以後中世までこの砂浜上に遺跡が営まれている。

弥生時代に入ると、前・中・後期すべての時期の土器が出土している。しかし前期のものが圧倒的に多く、さらにその中でも畿内第一様式古段階に相当するものが主体をしめる。

中・後期のものは甕が数個体分出土したにすぎず、遺跡の規模は極端に縮少しているようである。このような変化の背景には当時の生産基盤である稻作技術というものが考えられよう。

県内の弥生前期の遺跡は約13ヶ所ある。このうち觀音寺市室本遺跡が最古と位置づけられ、室本遺跡とほぼ同時期とされるのが、小豆郡土庄町の伊喜末遺跡・長浜遺跡である。

大浦浜も出土遺物からみて、これらの遺跡とほぼ同時期とみてよからう。これらの遺跡はいずれも海岸線上に位置している。一般に当時の水田は自然の低湿地を利用したとされるが、櫃石島においても、大浦浜の西奥の後背湿地が利用されたものと思われる。しかし可耕地の規模や生産性に限界があり、それ以上の発達ができず、前期後半以降の遺跡の規模は縮少せざるを得なかつたのである。

古墳時代に入ると、この浜では製塩が開始されている。開始の時期がまず問題となる。遺構から出土し、最も古いと思われる、製塩土器はG-15区SK01出土のものである。

共伴した土師器甕は所謂庄内式と布留式との両要素を合せもっているものである。

J区土器群からも古式土師器とともに製塩土器が出土している。製塩土器は脚台が付くもの

と、薄手のコップ状の二形式が出土しているが、量的に後者の方が多い。

瀬戸内の古式土師器の編年はまだ確立しておらず、今後の研究の進展に伴い、古墳時式前期の製塩土器についても細かな検討が必要となってきた。中・後期の資料については遺構一括や包含層から多くの資料が得られた。今後この資料整理に多くの時間が費されることになろう。

古墳時代の出土製塩土器を量的にみてみると、後期のものが圧倒的に多く、前期の脚台付は少なく、薄手コップ状のものはさらに少ない。このことは前期の生産規模が小さかったのに対し、後期に至り、製塩技術を含めた社会変化があり、生産規模が飛躍的に拡大したことを意味しているのだろう。

古墳時代末から奈良時代にかけての製塩土器は、B・C区の包含層から多く出土した。

瀬戸内では奈良時代に土器製塩が終るとされているが、今回共伴した須恵器や土師器は奈良後期から平安前期に至るものもあり、土器製塩の終えんについては再検討すべきである。この時代の包含層は現在調査中である。

土器製塩がいつ頃終焉を迎えたかは、今後の発掘や整理作業で次第に明らかになっていくことであろう。

中世に入っても文献上では瀬戸内で製塩が続けられている。しかし考古学的にはまったく空白である。

調査区南東部で粘土遺構群が検出された。出土遺物より鎌倉時代に属すると思われるが、性格については不明である。今後、精査が残されており、製塩遺構なのか、今後の課題としたい。この遺構群からは、室町時代の遺物は出土しておらず、鎌倉時代で大浦浜での生活は終りをつげるようである。これは何を意味するのであろうか。粘土遺構群を製塩施設と仮定すると、この頃製塩法に技術変化が起こり、大浦浜はこの変化に適応できなかったのであろうか。

また、文献史料では鎌倉後期頃から瀬戸内で海賊衆の名が散見されるようになる。製塩・漁撈活動を捨て、水手としての生活が始まったのであろうか。南北朝頃には小規模ながら寺院がこの島内に営まれている（がんど遺跡）。寺院の造営は、経済的に恵まれた状況になったことの現われであり、大浦浜の遺跡の終焉も、これらの現象と軌を一にしたものなのだろう。

さて、以上簡単に遺跡の変遷とその背景をみてきたが、製塩と祭祀について次に少し補足しておこう。

古代の製塩法で土器を使用するのは煎熬工程である。その前段階の採鹹工程を示す考古学的資料は少なく、民俗例や文献から推定されているにすぎない。

今日の調査は、製塩遺跡をほぼ全面発掘するため、採鹹方法を具体的に示す遺構などの検出が期待されていたが、今回の調査では残念ながら検出できなかった。但し粘土遺構の項で述べたように1つの推測は可能であった。

次に祭祀についてみることにする。祭祀に關係あると思われる遺構については不明であるが、遺物は、ミニチア土器、船形土製品、有孔円板、奈良三彩小壺、銅製品などが得られた。時代的にみると古墳時代と奈良時代である。これらの出土地点を示したのが、第43図である。大きくみて、2ヶ所、もしくは3ヶ所に分かれていることに気付く。J区を中心とした部分からはミニチア土器と船形土製品が多く出土している。ここからは完形の古式土師器が多く出土しており、西隣りのK区からは完形の須恵器が多く出土している。この部分は、南北に延びる砂洲と、たてわ山に狭まれた地点で、地形的にみて最も低くなる部分で、古墳時代には入江か、自然河川のそばだったと推定できる所である。完形の製塩土器も出土しており、古墳時代全般に

わたって、製塩、航海安全の祭祀が行なわれたのであろう。

H-13・14区から船形土製品1点と有孔円板が出土しており、少しづつ祭祀を行う場所が移っていたのかもしれない。

奈良時代の祭祀遺物は、三彩小壺、帶金具銅錢などがある。大浦浜で国家的な祭祀が行われたことは間違いないから、検討すべき点は多い。三彩小壺と銅製品の出土は約60m離れた地点からである。銅製品の出土地点をもう少し詳しくみると、帶金具などと、銅錢との出土地点は明確に分かれている。これらの遺物が1回の祭祀に用いられたものとすると、長年大宝の出土からの9世紀中葉以降のことになり、三彩小壺もこの時期まで下ることになる。一方出土地点を重視すると二回以上の祭祀を想定せざるを得ない。

瀬戸内海の国家的祭祀遺跡としては、大飛島^{注(2)}が有名である。この島では奈良から平安中期頃まで祭祀が行われ、三彩、帶金具、銅錢、鏡などが出土している。この島は櫃石島の西28kmのところに位置している。大飛島の西5kmに宇治島がある。この海岸から三彩の破片が採集されている。^{注(3)}櫃石島の南3kmの無人島羽佐島では縁釉陶器が出土している。さらにその南の与島の丘陵上からは神功開宝^{注(4)}が出土している。このように周辺の島々をながめてみると、当時の漁民の所有物としては不自然なものが出土しており、それらはいずれも国家的祭祀に使われた物と推定される。現在我々が想像する以上に、当時は瀬戸内海の島々では祭祀が行われていたのであろう。それが遣唐使に関連したものなのか、また別の事柄に関係したものなのかを追究していくことは今後の重要な課題といえよう。

大浦浜遺跡の調査は、本年度が第1次調査にあたり、次年度で北半分が調査され、完了する予定である。製塩や祭祀についてどのような新しい知見がもたらされるか期待しよう。

(大山)

注

- (1) 小野忠熙「本州西端地方における海岸砂丘の形成期の研究」『地理学評論』36-7
- (2) 鎌木義昌、間壁忠彦「大飛島遺跡」『倉敷考古館研究小報』1
- (3) 善通寺市在住、安藤文良氏所蔵
- (4) 香川県教育委員会「羽佐島遺跡」『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財調査概報(Ⅲ)』
- (5) 香川県教育委員会「与島西方遺跡」『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財

L	K	J	I	H	G	F	E	D	C	B	A	
												26
												25
												24
		◎	△△△	△△△								23
												22
			△△△	△△△								21
							▼					20
		▼	●			◎						19
		▼										18
												17
			◎									16
			▼									15
			◎									14
			▼									13
			◎									12
			◎									11
		◎										10
												9
								□□	□□			8
								□				7
								◎	◎			6
						◎	◎	◎	◎			5
								◎	◎			4
												3
												2
												1

第43図 祭祀遺物出土位置図

瀬戸内海の島々では祭祀が行われていたのであろう。それが遣唐使に関連したものなのか、また別の事柄に関係したものなのかを追究していくことは今後の重要な課題といえよう。

大浦浜遺跡の調査は、本年度が第1次調査にあたり、次年度で北半分が調査され、完了する予定である。製塩や祭祀についてどのような新しい知見がもたらされるか期待しよう。

(大山)

注

- (1) 小野忠熙「本州西端地方における海岸砂丘の形成期の研究」『地理学評論』36-7
- (2) 鎌木義昌、間壁忠彦「大飛島遺跡」『倉敷考古館研究小報』1
- (3) 善通寺市在住、安藤文良氏所蔵
- (4) 香川県教育委員会「羽佐島遺跡」『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財調査概報(Ⅲ)』
- (5) 香川県教育委員会「与島西方遺跡」『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財

第1表 土師器観察表

器種	番号	法量(cm)	坏 部	脚 部	色 調	胎 土	出 土 地 区	備 考
高坏	1-	口径 17.5 器高 6.2+α	底部より内弯し立ち上がり段を持つ。段より上部はかすかに外反するが口縁部にこあて外反が急激になる。 底部には、脚柱との接合部である凸部が見られる。 外面は非常に細かい刷毛目が見られる。		赤褐色	7mmまでの砂粒を含む。	J-15 第1群No.12	脚部欠損
	2	口径 17 器高 5.5+α	底部は、水平近く延びて段を持つ。段より上部は、かすかに外反する。 外面中央下部には、刷毛目が見られる。		外面 淡褐色 内面 淡黒褐色	5mmまでの砂粒を多く含む。	J-17 第6群No.4	脚部欠損
	3	口径 20.0 器高 6.3+α	底部より内弯しながら立ち上る段を持つ。段上部も内弯しながら立ち上がるが、口縁部に近づくと外反する。 内面に細かい刷毛目が見られる。		淡赤褐色	こまかな砂粒 金雲母を含む。	J-20 第5群No.5	脚部欠損
	4	口径 19.0 器高 13.2 脚底径 13.2	底部より内弯しながら立ち上がり口縁部近くで外反する。 外面に右下りの刷毛目が見られる。	脚柱は、中空であり、内面に絞り痕が見られる。 脚台は、内弯する。 脚柱から続く刷毛目が脚台に至ると、大きく右にまがる。	淡茶褐色	こまかな砂粒を含む。	J-18 第4群No.2	
	5	口径 17.0 器高 11.2+α	底部より内弯しながら立ち上がり口縁部にてかすかに外反する。	脚柱は、中空であり、坏底部よりまっすぐに延び、接合部において絞ってあり、若干細くなっている。	淡褐色	こまかな砂粒を含む。	J-14 第8群No.4	脚部欠損
	6	口径 19.0 器高 12.5 脚底部 12.5	底部より内弯しながら立ち上がり段を持つ、段上部はかすかに外反する。 口縁部は、非常にいびつである。	脚柱は、中空である。 脚台は、内弯し中央部に稜を持つ、脚柱・台共に内面はヘラケズリ。	淡赤褐色	砂粒を含む。	J-17 第6群No.3	
	7	口径 19.0 器高 15.5 脚底径 13.5	底部より内弯しながら口縁部まで立ち上がる。 内面は、右下りの刷毛目が一部に見られるが、外面は荒がひどく観察不可能	脚柱は、中空であり、中央部がやや張りぎみである。 脚台は、わずかに内弯する。 脚柱と脚台の接合部において絞りがあり若干細くなっている。 脚柱内面にて坏部との接合時に使用されと思われる粘土が見える。	茶褐色	5mm程度の砂粒を多量に含む。	J-17 第6群No.2	
	8	口径 23.0 器高 15.3 脚底径 13.7	底部より内弯しながら立ち上がり段を持つ。段より上部は、かすかに外反して延びる。段より上部ははりつけである。 内面上部に刷毛目が一部見られる。	脚柱は中空である。 脚台はわずかに内弯し短かい。 脚柱は、中央部がわずかに張りぎみである。	淡茶褐色	こまかな砂粒を含む。	J-18 第4群No.1	
	9	口径 24.7 器高 14.3 脚底径 14.3	底部より内弯し、かすかな稜を持つ。 稜より上部は、外反する。	脚柱は、中空であり短かい。 脚台はかすかに外反する。 脚台に少しの刷毛目が見られる。 脚柱内面に坏部との接合時に使用したと考えられる粘土を見ることがある。	茶褐色	こまかな砂粒を含む。	J-18 第4群No.5	

器種	番号	法量(cm)	坏 部	脚 部	色 調	胎 土	出 土 地 区	備 考
高坏	10	口径 19.5 器高 12.2 脚底径 14.4	底部より内弯しながら立ち上がり段を持つ、段より上部は外反し口縁に近づくと急激な外反を行なう。	脚柱は中空であり短かく脚台は内弯し四方に円孔を穿つ。	淡赤褐色	砂粒と共に金雲母を含む。	J-20 第5群 No.12	
	11	口径 19.0 器高 13.4 脚底部 13.0	底部より内弯しながら立ち上がり小さな段持つ、段より上部はかすかに外反する。	脚柱は中空である。 脚台は内弯ぎみに延びる。 脚柱内面に絞り痕が見られる。	茶褐色	5mmまでの砂粒を含む。	J-18 第4群 No.4	
	12	口径 21.8 器高 14.1 脚底径 15.6	底部より内弯しながら立ち上がり稜を持ち、稜より上部は外反しするが、口縁近くで急激な外反を行なう。	脚柱は、中空である。 脚台は内弯するが中央部に小さな段を持つ。	淡茶褐色	6mmまでの砂粒を含む。	J-18 第4群 No.3	
	13	口径 14.3 器高 11.1 脚底径 10.1	底部より内弯しながら立ち上がり、胴部中央より上部は、垂直ぎみになる。	坏底部より3mm程度の間隔をおき、外反する脚台を持ち四方に円孔を穿つ。	外面茶褐色 内面 明茶褐色	砂粒を含む。	J-20 第5群 No.11	
器種	番号	法量(cm)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	色 調	胎 土	出 土 地 区	備 考
壺	14	口径 7.8 胴径 9.6 器高 8.1	口縁部は、わずかに外反する。 胴部は球形である。 底部は、丸底である。	内外面共に荒れがひどく観察不可能。	淡黒褐色	こまかな砂粒を多量に含む。	J-15 第1群 No.19	
	15	口径 10.0 胴径 9.6 器高 9.1	口縁部は、わずかに外反する。 胴部最大径が大きく張り出しが球形である。 底部は、丸底である。	内外面共に胴部下部に大きな指頭圧痕を残す。	茶褐色	5mm程度の砂粒を含む。	J-14 第8群 No.3	
	16	口径 10.0 胴径 9.6 器高 9.1	口縁部は大きく外反する 胴部は球形である。 底部は丸底である。	口縁部は、内外面共にナデ調整 胴部外面は、頸部近くに刷毛目 下部に叩き目が見られる。内面 は頸部下部に指頭圧痕が見られる。	淡茶褐色 一部 淡黒褐色	こまかな砂粒を含む。	J-24 No.2	
	17	口径 10.7 胴径 8.9 器高 8.5	口縁部は、外反し稜を持ち、再び外反する二重口縁である。 胴部は球形 底部は、丸底である。	口縁部外面は、こまかな横方向の刷毛目、外面底部近くは右下りの刷毛目がある。 内面頸部下部に指頭圧痕が見られる。	茶褐色	こまかな砂粒と共に金雲母を含む。	J-20 第5群 No.21	
	18	口径 10.3 胴径 14.3 器高 16.9	口縁部は、大きく外反し長い。 胴部は球形である。 底部は丸底である。	胴部中央部にて上下の組み合せが見られる。下部が外側にくるように、かさね合わせ、その上を粘土を張り横ナデにて組み合せを隠している。 胴部内面上部には輪積みがはつきりと見える。	外面及び内面上部 淡赤褐色 内面下部 淡黒褐色	良質粘土	J-15 第1群 No.24	
鉢	19	口径 11.7 器高 6.3	口縁部は、胴部中央より垂直ぎみに立ち上がり端部に近づくとわずかに外反する。 底部は平底である。	胴部内面において右下りの刷毛目が見られる。 外面は、砂粒等により荒れがひどい。	淡赤褐色 内外面一部は淡黒褐色	7mmまでの砂粒を多く含む。	J-21 第9群 No.5	
	20	口径 12.5 器高 6.8	口縁端部は、垂直ぎみに立ち上がる。 底部は平底である。	内外面共にナデ。 外面は、砂粒の突出が見られる。	淡赤褐色	6mmまでの砂粒を多く含む。	J-20 第5群 No.19	
	21	口径 18.2 器高 6.7	胴部は、底部より内弯しながら立ち上がる。中央部よりわずかに外反し稜を持っている。 口縁はわずか外反し端部は尖りぎみである。底部は小さな平底	内外面共にナデ。	明褐色 内面は黒褐色の部分が多い	こまかな砂粒を多く含む。	J-17 第2群 No.1	

器種	番号	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	出土地区	備考
鉢	22	口径 18.0	底部より内彎しなざら立ち上がるが中央部にて外反して稜を持つ。 口縁部は、垂直ぎみであるが、わずかに外反し、尖りぎみで終事する。	内外面共にナデ。	明褐色 内外面共に一部に黒褐色がある。	砂粒と共に金雲母を含む	J-20 第5群 No.12	底部欠損
	23	口径 16.8 器高 7.0	胴部は、内彎しながら立ち上がり稜を持つ。口縁はかすかに外反する。 底部平底。	外面口縁部に、細かな刷毛目。	淡褐色	5mmまでの砂粒を含む。	J-18 第4群 No.4	
	24	口径 16.0 器高 5.6	胴部は、内彎しつつ立ち上がり口縁部は急激に外反する。 底部は胴部より急激に突び出し高台を意識しているか。 突出部は、張り付けか。	外面口縁部に、細かな刷毛目。	淡茶褐色	こまかに砂粒を多く含む。	J-20 第5群 No.14	
甕	25	口径 14.9 胴径 18.2 器高 17.3	口縁部は、くの字に開き胴部にくらべて厚みがある。 胴部は、いびつであるが球形を示す。底部は丸底。	胴部内面中央部において接合部が見られる。 外面においては、接合部付近において、大きな指頭圧痕が見られる。	赤褐色	こまかに砂粒を多く含む。	J-18 北側畔	
	26	口径 13.8	口縁部は大きく外反し中央部に膨らみを持つ。	口縁部は、横ナデ 胴部外面に叩き目が見られる。	外面暗茶褐色 内面明褐色	砂粒を多量に含む。	J-15 第1群 No.2	胴部下部欠損
	27	口径 19.5	口縁部は、大きく外反するが端部は少し内側に向く。	口縁部内外面共に横ナデ 胴部外面に叩き目が見られる	明褐色	砂粒を多く含む。	J-18 第3群 No.3	胴部下部欠損
	28	口径 14.5 胴径 19.2 器高 15.6+α	口縁部は、くの字に開き、中央部にわずかな膨らみを持つ。 胴部は、球形である。	口縁部周辺は、右下がりの刷毛目。胴部は方向のさだまらない刷毛目。口縁部内面は、横ナデ 胴部内面では、へら痕・指頭圧痕を見ることができる。	暗茶褐色	砂粒を多く含む。 5mmまでの砂粒を含む。	J-17 第6群 No.5	底部欠損
	29	口径 10.2 胴径 15.4 器高 15.2	口縁部は垂直に近く立を上がり端部はわずかに内彎する。 胴部は球形、底部は平底である。	胴部外面に若干の叩き目を残すが、口縁部及び内面はナデ。 薄手の土器である。	茶褐色	良質粘土	J-18 第3群 No.8 9・10	
	30	口径 12.9 胴径 18.5 器高 17.5+α	ほぼ垂直の頸部から外反する口縁を持つ。 胴部は、全体として球形であるが、中央部に球形をじめきない所がある。	胴部外面の一部に叩き目が見られる。 口縁部は内外面共に横ナデ。	暗茶褐色	4mmまでの砂粒を多量に含む。	J-18 第6群 No.6	底部欠損
	31	口径 14.1 胴径 23.3 器高 22+α	口縁は、くの字に開く。 胴部は、球形である。	口縁外面において粘土の高まりが見られる。頸部及び胴部上部に刷毛目が見られる。 内面において口縁部と胴部の接合部が見られる。 接合部においてへら痕・指頭圧痕が見られる。	明茶褐色	7mmまでの砂粒を含む。	J-15 第1群 No.4	
	32	口径 23.1 胴径 32.8 器高 36.7	口縁部は、わずかに開きぎみである。 胴部は、球形であり、底部は小さな平底。	外面全面にかけて刷毛目が見られる。中央部までは左下りであるが、下部においては、統一性はない。	灰茶褐色 一部 灰黒褐色	5mmまでの砂粒を多量に含む。	J-15 第1群 No.1 3・7	

第2表 ミニチュア土器観察表

器種	番号	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	出土地区	備考
壺	1	口径 3.1 胴径 3.4 器高 2.5	口縁部内彎 胴部球形	内外面に指頭圧痕が見れるが、外面が内面にくらべ小さい。	淡茶褐色	こまかん砂粒を含む	I-23 第2層下層	I形式
	2	口径 3.0 胴径 3.6 器高 3.0	口縁部内彎 胴部球形	口縁部は、内外面共に横ナデであるが、胴部には、指頭圧痕が見られる。 底部内面に、粘土の高まりが見られる。	淡褐色	こまかん砂粒を多量に含む	I-23 第2層下層	I形式
	3	口径 2.7 胴径 3.7 器高 3.1	口縁部内彎 胴部球形	胴部内外面に指頭圧痕が見られる。内面は、底部近くから口縁部にかけての長い圧痕である。外表面は、底部近くに小さな圧痕である。 底部内面に、粘土の高まりが見られる。	褐色	砂粒を多く含む良質である。	I-23 第2層下層	I形式
	4	口径 3.1 胴径 4.0 器高 3.2	口縁部内彎 胴部球形	内外面に指頭圧痕が見られる。内面は、底部近くから口縁部にかけての長い圧痕である。 外表面は、口縁部を除いて全面に見ることができる。 底部内面に、粘土の高まりが見られる。	淡褐色	こまかん砂粒を含むが良質である。	I-13 第2層下層	I形式
	5	口径 3.5 胴径 4.2 器高 3.0	口縁部内彎 胴部球形	内外面に指頭圧痕が見られる。内面は、全面に見られる。 外表面は、底部近くに見られる。外表面は、荒がひどく詳しくは観察できない。 底部内面に粘土の高まりが見られる。	淡茶褐色	砂粒が多い	I-23 第2層下層	I形式
	6	口径 3.5 胴径 4.2 器高 3.3	胴部球形であるが、口縁部は、垂直に立ち上がる部分もある。	全体として肉厚に造られているが、口縁部は薄くなっている。 口縁部は、内外面共に指頭圧痕が見られる。外表面近くに小さな圧痕が見られる。	暗茶褐色	良質の粘土 金雲母を含む	G-11 第2層	I形式
	7	口径 3.8 胴径 4.1 器高 3.6	口縁部は、かすかに外反す。 胴部球形 底部はやや平底ぎみである。	内外面に指頭圧痕が見られる。内面は、底部より口縁部近くまでの長い圧痕である。外表面は底部近く、口縁部において見られる。 底部内面にかすかに高まりが見られる。	淡赤褐色	こまかん砂粒を多く含む。	I-23 第3層	II形式
	8	口径 4.1 胴径 4.3 器高 3.4	口縁部は、かすかに外反する。 胴部球形	内外面に指頭圧痕が見られる。内面の圧痕は、外表面にくらべ大きい。 口縁部内面は、横ナデ 底部内面に粘土の高まりが見られる。	淡褐色	砂粒を多く含む。	I-23 第2層下層	II形式
	9	口径 4.0 胴径 4.3 器高 3.5	口縁部は、わずかにくの字に外反する。 胴部球形 底部不定形	内外面に指頭圧痕が見られる。内面の圧痕は、外表面にくらべて大きい。外表面に横ナデも見ることができる。	淡褐色	砂粒を少し含む。	I-23 第2層下層	II形式

器種	番号	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	出土地区	備考
壺	10	口径 5.4 胴径 3.5 器高 3.0	口縁部は、内彎するが大しく開く。 胴部球形	口縁部は、ハリ付けである。 内外面共にナデ調整と思われる。 内外面共に荒がひどい	淡灰茶褐色	砂粒多い 金雲母を含む	J-23 第3層下層	II形式
	11	口径 4.2 胴径 3.5 器高 3.0	口縁部は、急激な外反を行ない大きく開く。 胴部球形	外面頸部に小さな指頭圧痕が見られる。 胴部内面は、内彎するが垂直ぎみに立ち上がる所もある。	褐色	砂粒を含むが良質である。	I-16 第2層	III形式
	12	口径 5.4 胴径 4.2 器高 3.6	口縁部は、外反し水平ぎみに大きく開く。 胴部中央より底部に向けて急激なカーブを描く。	外面頸部底部近くに指頭圧痕が見られる。	淡灰茶褐色	8mmまでの砂粒を含む。	J-21 第3層下層	III形式
	13	口径 5.1 胴径 4.2 器高 4.3	口縁部は外反し、大きく開く。 胴部は、中央部にてふくらみを持つ。	内外面に指頭圧痕が見られる。 内面の圧痕は外面にくらべて大きい。外面の圧痕は、強い圧痕ではない。	淡灰茶褐色	こまかに砂粒を多く含む	J-21 第3層下層	III形式
	14	口径 3.9 胴径 3.2 器高 4.9	口縁部は外反し大きく開く。 胴部は、垂直ぎみに立ち上がる。 底部は、尖りぎみである。	内外面に、かすかに指頭圧痕が見られる。内外面共にナデによる調整を行なったようである。	褐色	砂粒を多く含む	J-21 第3層下層	III形式
	15	口径 4.7 胴径 5.4 器高 4.9	口縁部は、外反し大きく開く。 胴部球形。 底部は平底である。	胴部内外に指頭圧痕が見られる。 外面は底部近く、内面は、頸部下部。口縁部は、ナデによる調整。	淡赤褐色	こまかに砂粒を含むが良質	I-10 第3層下層	III形式
	16	口径 胴径 器高 3.8 3.7+ α	胴部球形	外面に指頭圧痕を見ると共にナデによる調整も見られる。	褐色	良質粘土 金母雲を含む	G-12 第3層	口縁部 欠損
鉢	17	口径 4.6 器高 2.9	口縁部は、垂直ぎみに立ち上がる。 胴部は内彎する。 高台を持つ。	胴部は、ナデによる調整。 胴部と高台部の接合部において指頭圧痕が見られる。 高台は、造り出しだある。	暗茶褐色	こまかに砂粒を含む。	J-21 第3層下層	
	18	口径 5.6 胴径 5.7 器高 2.7	底部より内彎し、口縁部に近づいて垂直近く立ち上がる。	口縁部は、内外面共に指頭圧痕が見られる。外面は底部近くまで見られるが、内面胴部は横ナデによる調整。	茶褐色	砂粒を多く含む。	J-21 第3層下層	
	19	口径 胴径 器高 5.0 1.8+ α	底部より内彎し胴部上部で垂直近く立ち上がる。	外面に指頭圧痕が見られる。 内面には、ナデと思われる所がある。	淡茶褐色	砂粒を多く含む。	J-21 第3層下層	口縁部 欠損
	20	口径 胴径 器高 4.6 2.6+ α	底部は小さな平底。 胴部は急激に内彎する。	内外面共に荒がひどく、観察は難しいが、外面底部近くに指頭圧痕が見られる。	淡茶褐色	砂粒を非常に多く含む。含	J-21 第3層下層	口縁部 欠損

第3表 須恵器観察表

番号	種類	出土地点	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
第30図-1 (図版17-3)	蓋杯(蓋)	F 24-1層 -2層	口径 14.0 (残存高 4.5) 稜径 14.5	口縁部はほぼ垂直で端部はわずかに外反している。 稜はシャープにつくり出している。	天井部外面4/5回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転、左方向。 焼成、やや不良。 胎土、密。わずかに砂粒含む。 色調、外面灰色。 内面やや赤っぽい。
2	〃	F 23-2層 F 24-1層 -2層	口径 11.5 (残存高 3.7) 稜径 11.8	口縁部に内湾しながら下る。 端部は若干外反し内傾しているが、まんなかが少し凹みぎみである。 稜は小さな突起状である。	回転ナデ調整。	全体的に自然釉がかかっている。 焼成、良。 胎土、密。大粒の砂粒を含む。 色調、灰色。
3 (図版17-1)	〃	F 23-1層 -2層 F 24-1層 -2層	口径 12.3 器高 5.1 稜径 12.7	口縁部はほぼ垂直に下り端部はやや外反ぎみで内傾し、中ほどが凹んでいる。 稜は小さく、2をひとまわり大きくしたような器形である。	天井部外面6/7回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転、左方向。 焼成、良好。 胎土、密。大粒の砂粒を若干含む。 色調、青味がかった灰色。
4	〃	I 19-2層	口径 12.7 (残存高 3.2) 稜径 15.8	口縁部はかなり内傾しているが比較的シャープである。 稜は外下方に長く張り出し、端部は丸い。 天井部は明瞭な段を有する。	回転ナデ調整。 口縁部の基部内側には沈線状の凹みが一周する。	焼成、良。 胎土、やや粗。1mm程度の砂粒を多く含む。 色調、青味がかった灰白色。 蓋杯身の可能性もある。
5	〃	〃	口径 12.0 (残存高 3.9)	稜の痕跡は消滅している。 短い口縁部が垂直に下り端部は丸い。 器厚は薄い。	回転ナデ調整。	焼成、良。 胎土、やや粗。小砂粒をわずかに含む。 色調、やや黄色味がかった灰白色。
6 (図版17-4)	〃	D 14-3層 上面	口径 15.4 器高 1.6 つまみ径 2.6 つまみ高 0.5	口縁部を短く下方に折っている。 端部は丸味を帯びている。 天井部中央に適当なつまみを付す。天井部はほぼ平らであるが若干のひずみがある。	天井部外面約1/3ていねいな回転ヘラ削り調整。 内面は口縁部付近を除く広範囲にわたって不整方向ナデ調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転、右方向。 焼成、良。 胎土、密。白砂粒を含む。 色調、やや黒っぽい青灰色。
7	〃	F 4-3層	口径 17.8 器高 0.8	天井部はほとんど水平に近い。 口縁は嘴状をなし、端部は丸い。	天井部内面は口縁部を除いて一定方向ナデ調整。 他は回転ナデ調整。	焼成、良好。緻密。 胎土、密。小砂粒を若干含む。 色調、やや黄色味がかった青灰色。
8	蓋杯(身)	F 24-1層 -2層	口径 11.4 器高 5.1 たちあがり高 5.1 受部径 13.4	たちあがりは若干ふくらみぎみに内傾し、端部は外反する。 端部上面にははっきりした稜線が認められる。 受部は外上方にのびて断面三角形を呈し、端部は丸い。 底は丸味を帯び、器厚は薄い。	底部2/3回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転、左方向。 焼成、良。 胎土、密。小砂粒を若干含む。 色調、やや黒っぽい灰色。 底部外面に焼成時の付着物が認められる。 受部から底体部にかけて自然釉がかかる。 底部外面にヘラ記号。
9 (図版17-2)	〃	F 24-2層	口径 10.0 (残存高 3.2) たちあがり高 1.6 受部径 11.8	たちあがりは内巻しながら内傾し端部付近でやや外反する。 受部はほぼ水平で端部は丸い。	回転ナデ調整。	焼成、良。 胎土、密。やや大粒の砂粒を多く含む。 色調、黒っぽい灰色。 砂粒が多いため内外面に亀裂が目だつ。受部外側から体部にかけてわずかに自然釉がかかる。

番号	種類	出土地点	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
10	蓋杯(身)	I 19-2層	口径 11.1 (残存高 3.3) たちあがり高 0.6 受部径 13.4	たちあがりは若干外反ぎみに内傾している。基部が太く断面三角形を呈する。 受部は外上方にひらき、先端が丸く上方に折れている。	回転ナデ調整。	焼成、やや不良。 胎土、粗。砂粒ほとんど含まず。 色調、外面青灰色。 内面やや白っぽい。 断面赤っぽく一部空洞がみられる。
11	〃	〃	口径 11.0 (残存高 2.4) たちあがり高 0.5 受部径 13.4	たちあがりは短く外反ぎみに内傾する。端部は比較的シャープである。 受部はほぼ水平で長く、端部は丸い。	底部外面2/3回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	焼成、良。堅緻。 胎土、密。砂粒ほとんど含まず。 色調、やや茶色がかかった灰白色。
12	〃	G 25-1層	口径 12.2 (残存高 3.4) たちあがり高 0.7 受部径 15.2	たちあがり約45°に内傾しており、内面なかほどにあまり明瞭でない一条の沈線が認められる。端部は丸い。 受部は外上方に張り出し、先端を丸く仕上げている。	底部外面2/3回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	焼成、良。 胎土、やや密。2~3mm程度の砂粒を若干含む。 色調、青灰色。
13	〃	F 4-3層下 4層上	口径 13.5 器高 5.1 たちあがり高 1.6 受部径 15.5	たちあがりは長く、外反ぎみである。内傾度は弱く、端部はやや丸いが、内面少し下がったところに一条の沈線がめぐっており稜をやや意識したものとも思われる。 受部は外上方にのび、若干丸味をおびた端部を有し、断面三角形を呈する。	底部外面5/6回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転、右方向。 焼成、良。 胎土、やや密。小砂粒を多く含む。 色調、青灰色。
14	〃	F 4-3層下 4層上	口径 11.8 (残存高 3.0) たちあがり高 1.4 受部径 14.6	たちあがりは内傾し、中央より上にあがったところでふくらみをもち、端部は比較的シャープである。 たちあがりの基部は内外面とともにヘラ状のものでくつきり境をついている。	回転ナデ調整。	焼成、良。堅緻。 胎土、やや密。ほとんど砂粒含まず。 色調、青灰色。
15	〃	D 5-3層 上面	口径 16.1 器高 5.3 高台径 11.1 高台高 1.0	体部から口縁部にかけて外上方にのび端、部は丸い。 底部は若干カーブをもっているが、平らに近い。 底部端に外びらきのしっかりした高台を付す。	底部外面回転ヘラ削り調整。 底部内面ところどころに不整方向ナデ調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転、右方向。 焼成、良。 胎土、やや粗、小砂粒を含む。 色調、やや黄色味がかった灰白色。
16	〃	I 19-2層	(残存高 1.5) 高台径 9.9 高台高 0.8	高台は比較的高く、外方に大きく張り出し、内端部が若干内側に折れて接地している。 底部は平らであろう。	底部外面回転ヘラ削り調整の後ナデ調整。 底部内面ナデ調整。 他は回転ナデ調整。	焼成、やや不良。軟質。 胎土、やや密。小砂粒を若干含む。 色調、外面黄灰色。 内面灰色。
17	壺	L 20-3層	(残存高 3.7) 高台径 13.0 高台高 1.1	底部端に近いところに外方へ大きく張り出す高台を付す。内端部で接地する。 体部の器壁は厚く、最大1.5cmを計る。	体部内面回転ナデ調整。 他はナデ調整。	焼成、良好。堅緻。 胎土、密。小砂粒を若干含む。 色調、やや黒っぽい灰色。

番号	種類	出土地点	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
18	壺	L 20—2層 —3層	(残存高 2.7) 高台径 12.7 高台高 1.7	高台は長く、外開きでしっかりとしている。 接地面は平ら。 底部から体部にかけてなだらかに丸味を帯びる。	回転ナデ調整。	焼成、良。 胎土、やや密。 色調、灰白色。
19	高杯	I 19—2層	(残存高 4.2) 底部径 14.0	脚部は外反しながら端部に至る。 端部は若干内傾ぎみである。 スカシ窓の3mmほど下に一条の沈線が廻っている。	回転ナデ調整。	焼成、良好。堅緻。 胎土、密。砂粒ほとんど含まず。 色調、青灰色。 スカシ窓の数不明。
20	々	N 19—2層 —3層	(残存高 6.3) 基部径 2.6 脚底径 9.5 脚部高 4.6	脚部は外反しながらのび、先端はほぼ垂直にしている。	杯部底部内面一定方向ナデ調整。 他は回転ナデ調整。 脚部内面上方に絞り痕。	焼成、良好。 胎土、やや粗。白っぽい砂粒を多く含む。
21	々 (図版17-8)	K 17—2層	口径 15.3 器高 8.3 基部径 3.3 脚底径 9.5 脚部高 4.3	杯部は大きく、なだらかに口縁部へ続き、端部は丸い。 脚部は大きく開き、先端はやや外傾している。端部は丸い。 短脚で、大きく遍平な杯部をもつ。	回転ナデ調整。 (杯部内面は磨滅のため調整不明)	焼成、やや不良。 胎土、密。 色調、やや黄色味がかった灰白色。
22	々	々	(残存高 6.6) 基部径 3.2 脚底径 8.8 脚部高 5.2	脚部は他の高杯同様大きく開くが、先端が約50°の角度で内傾している点が特異である。	杯部底部内面ナデ調整(放射状) 他はていねいな回転ナデ調整。	焼成、良好。堅緻。 胎土、密。ほとんど砂粒含まず。 色調、やや黄色味。がかった灰白色。
23	々	K 17—3層	(残存高 4.0) 基部径 2.6 脚底径 9.0 脚部高 3.6	基部が細く大きく開く。同タイプの高杯の中では小型に属する。 脚部先端は若干外傾し、端部は少し外側にくびれている。	回転ナデ調整。	焼成、良好。堅緻。 胎土、密。若干小砂粒を含む。 色調、白っぽい灰色。 脚部先端付近は焼きひずみのため彎曲している。 脚部内面に3・2cmにわたって縦直線のヘラ記号。
24	々	K 20—3層 下部	口径 11.6 (残存高 5.8) 杯部高 4.2 基部径 3.1	杯部は丸味をもち、短い口縁部がやや内傾ぎみに直立する。端部は丸い。 同時期の杯蓋を杯部に転用した如き形態である。	杯部底部内面ごく一部に一定方向ナデ調整。 他は回転ナデ調整。	焼成、良。 胎土、やや密。少砂粒を多く含む。 色調、青灰色。
25	々	K 20—3層	(残存高 5.0) 基部径 2.6 脚底径 9.4 脚部高 4.6	脚部は基部が細く大きく開く。 先端は外傾ぎみに折れたあと段をなし、さらに外側に張り出す。 端部は丸い。	杯部内面一定方向ナデ調整。 他は回転ナデ調整。 脚部内面上部に絞り痕がみられる。	焼成、良好。 胎土、やや密。小砂粒を多く含む。 色調、灰色。
26	々 (図版17-7)	K 20—3層 溝中	口径 13.1 器高 9.6 基部径 3.2 脚底径 9.5 脚部高 5.6	杯部は丸味を帯び、だらだらと口唇部に到り、端部は丸い。 脚部は先端が凹みながら外傾し端部は丸い。	回転ナデ調整。 脚部内面絞り痕が認められる。	焼成、良。 胎土、やや密。大粒の砂粒を多く含む。 色調、白っぽい灰色。 脚部下方に2cm余りの直線のヘラ記号。
27	々	K 20—3層 溝中	(残存高 4.7) 基部径 2.8 脚底径 9.1 脚部高 4.2	脚部は短く、大きく開き、先端はいったん垂直におりたあと、端部が丸く外側に肥厚している。 ただし、この端部は波うった感じで、細かい欠損が多く、粗雑である。	杯部底部内面一定方向ナデ調整。 他は回転ナデ調整。	焼成、良好。堅緻。 胎土、密。ほとんど砂粒含まず。 色調、白っぽい灰色。

番号	種類	出土地点	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
28	高杯	K 20-3層	基部径 2.5	杯部底部と脚部の一部をのこすのみで全体の形態は不明であるが、おそらく26のような形状を示すものと思われる。	回転ナデ調整。 脚部は回転ナデ調整の段階で生じた明瞭な稜線が認められる。	焼成、良好。 胎土、密。ほとんど砂粒含まず。色調、白っぽい灰色。
29	々	F 5-3層	口径 10.0 器高 6.6 基部径 3.1 脚底径 7.7 脚部高 3.3	かなり小型で短脚である。 体部から口縁部にかけて外上方に若干内彎ぎみにすっとび、端部は丸い。(器厚はほぼ均等) 脚部先端は外傾ぎみに折れ、端部は丸味を帯びているが比較的シャープである。	杯部底部外面2/7回転ヘラ削り調整。内面わずかにナデ調整痕がみられる。	ロクロ回転、左方向。 焼成、良好。 胎土、密。小砂粒を含む。 杯部内面にパラパラと釉がかかる。
第31図-30	甌	K 9-6層 上面	口径 11.6 器高 13.1 基部径 6.0 体部最大径 9.8 孔径 1.5	口径基部は太い。体部は球形に近いが、最大径で若干の稜をもつ。最大径は体部の1/2より少しあがったところにあり、その上に円孔スカシを穿つ。 口頭部は外上方にはまっすぐのび、いったん外方へ屈曲させて段をなし、再び外上方に開き、端部はやや内傾する平坦面を形成している。 波状文等の文様帶は伴わない。	体部外面1/2回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。 口頭基部内面の沈線は接合時の痕跡であろう。	ロクロ回転、左方向。 焼成、良。 胎土、やや粗。砂粒を多く含む 色調、やや黒っぽい灰色。 底部外面を除いて全体的にまばらに釉がかかっている。
31	々	I 19-2層 包含層	(残存高 4.4) 残存体部最大径 9.5	器壁はかなり厚く、底部は丸い	外面あらい回転ヘラ削り調整。 内面回転ナデ調整。	ロクロ回転、左方向。 焼成、良。 胎土、粗。比較的大粒の砂粒を多く含む。 色調、青灰色。
32 (図版17-10)	脚付甌	K 16-2層	口径 12.5 器高 12.5 基部径 5.1 脚底径 9.5 脚部高 3.5	甌部は底部から体部に至って急激に彎曲し、わずかに外傾ぎみに口縁部に至る。端部は丸い。 器厚はほぼ均等で甌部1/2より少しあがったところに浅い沈線を1条巡らしている。 短い脚部には長方形スカシを3方向に穿孔している。スカシ窓横の縦方向2条のヘラ痕はスカシ窓割りつけの痕跡であろう。 脚部先端は内傾する。	甌部底部内面一定方向ナデ調整。 他は回転ナデ調整。	焼成、良。 胎土、やや粗。小砂粒を多く含む。 色調、灰白色。
33	々	J 24	口径 12.5 器高 16.6 基部径 5.6 脚底径 11.1 脚部高 5.5	体部はほぼまっすぐに立ちあがっているが、口縁部は弱い稜をもって内傾し、端部は丸い。 体部中ほどに二条の平行な沈線を施している。	甌部底部内面不整方向ナデ調整。 他は回転ナデ調整。	焼成、やや不良。 胎土、粗。大粒の白砂粒を多量に含む。 色調、灰白色 表面は少し風化している。
34	甌	I 19-2層	口径 15.8 (残存高 2.1)	口縁部は、外側に折り返され、上端が水平な平坦面となっている。 形態はおそらくすぐ肩部に続く短頸の甌であろう。	回転ナデ調整。	焼成、良好。 胎土、密。小砂粒をわずかに含む。 色調、青灰色。
35	短頸壺	F 4-3層	口径 7.8 (残存高 3.9)	口縁部は、短く、直線的な外開きであり、端部は平坦をなしている。 外開きになった分だけ端部が外傾している。	回転ナデ調整。	焼成、良。 胎土、密。小砂粒を多く含む。 色調、外面青灰色(部分的に灰色)。内面やや黒っぽい青灰色。 口頭部に「十」のヘラ記号。

番号	種類	出土地点	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
36	甕	K 17-2層	口径 24.8 (残存高 3.6)	口縁部は玉縁状を呈する。 口縁部上端面上に一条の細い沈線が巡る。	回転ナデ調整。	焼成、良。 胎土、やや密。細砂粒を多く含む。 色調、青灰色
37		H 24-1層 2層	(残存高 2.5) 脚底径 19.8	脚部の一部であろう。 先端より少しあがったところに断面三角形の突帯がめぐっている。 接地面はほぼ平坦で若干凹みぎみである。	回転ナデ調整。	焼成、良。 胎土、やや粗。小砂粒を含む。 色調、灰白色。
38 (図版17-7)	提瓶	F 4-3層	(残存高13.2) 基部径 3.5 体部径 13.0 体部厚さ 9.1	把手は形骸化がすすみ、ボタン状突起として付されている。	口頸部およびボタン状突起はハリツケによる。 体部外面平らな側、回転カキ目調整。丸味をおびた側1/2回転ヘラ削り調整と回転ナデ調整。 頸基部付近は回転ナデ調整。	ロクロ回転、右方向。 焼成、良。 胎土、密。小砂粒と若干の大粒の砂粒を含む。 色調、やや青味がかった灰色。 頸基部から肩部にかけて自然釉がかかる。
39 (図版17-8)	々	K 20-3層	口径 7.5 器高 24.8 基部径 5.3 体部径 20.0	口頸部は外方に直線ぎみに開き 端部は丸い。口頸部なかほどに浅い沈線を施している。 肩部に把手の形骸化を示す断面三角形の突起を持つ。	体部外面1/2回転ヘラ削り調整。 (体部の一方の面はほとんど欠落しているが回転カキ目調整はなかったであろうと思われる) 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転、左方向。 焼成、良好。 胎土、やや密。大粒の白砂粒を含む。 色調、褐色がかった青灰色。
40		K 17-2層	口径 6.9 (残存高 5.0)	薄手で表面は波打ったような仕上がりとなっている。先端はゆるく外反し、端部は丸い。	回転ナデ調整。	焼成、良。 胎土、粗。 色調、やや褐色がかった灰白色。
41	平瓶	K 17-2層	基部径 4.5 (残存高11.4) 体部最大径 16.2	底部は丸く安定性に欠ける。 体部最大径は体部の中央よりやや上がったところにある。	体部最大径を境に、下方が回転ヘラ削り調整。 底部内面ナデ調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転、左方向。 焼成、良。 胎土、密。砂粒ほとんど含まず。 色調、やや黄色がかった灰白色。 肩部に「キ」のヘラ記号。
42	甕(?)	D 26-1層 - 2層	口径 9.0 (残存高 5.9)	口径が小さく丸く彎曲する破片 から小型の甕と考えられるが、器壁の厚い特異なものである。 端部は丸く、先端から2.3cm おりたところに1条の沈線がめぐっている。	回転ナデ調整。	焼成、良。 胎土、やや密。小砂粒を若干含む。 色調、青灰色。
第32図-43	大甕	K 20-3層 溝中	器厚0.6~0.9		外面は平行叩き目文様に櫛目状のカキ目調整を重ねている。 内面は同心円叩き目文(青海波文)が顕著にのこる。	焼成、やや良。 胎土、やや粗。大粒の砂粒を含む。 色調、灰白色。 肩部から体部にかけての破片と思われる。
44 (図版17-5)	蓋杯(蓋)	G 18土坑	口径 14.0 器高 4.0	稜の痕跡はほとんどなくなっている。口縁端部は丸味を帯びて いるが、若干面取りの形跡がある。 扁平な蓋である。	天井部外面1/2回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転、左方向。 焼成、良。 胎土、やや密。小砂粒を含む。 色調、やや暗い青灰色。
45 (図版17-6)	蓋杯(身)	G 18土坑	口径 12.2 器高 4.5 たちあがり高 1.2 受部径 14.6	受部はほぼ水平でなかほどが肥厚している。 たちあがりは外反せず、むしろまんなかの部分がふくらみぎみに内彎し、端部は面取りの痕跡	底部外面4/5回転ヘラ削り調整 底部内面一定方向ナデ調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転、左方向。 焼成、良好。 胎土、密。小砂粒を若干含む。 色調、やや褐色がかった青灰色。

番号	種類	出土地点	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
				が認められる。 底部は丸く不安定である。		
46 (図版17-9)	高杯	G18土坑	口径 14.0 器高 10.0~10.5 基部径 4.0 脚底径 10.4 脚部高 5.8	基部は細く大きく開き、先端はやや内傾する。	杯部底部内面一定方向ナデ調整 外面底部近くには一部回転ヘラ削り調整がみえているが脚部接合時の回転ナデ調整によってほとんど消えている。 他は回転ナデ調整。 脚部内面に絞り痕がみえている。	ロクロ回転、左方向。 焼成、良好。堅緻。 胎土、密。ほとんど砂粒含まず。 色調、外面青灰色。 内面底部やや白っぽい青灰色。

(注) ○各器種の部分名称は『陶邑 I』(大阪府文化財調査報告第28輯、大阪府教育委員会1976年) によった。
○実測図の→は回転ヘラ削り調整の方向を示す。

第4表 製塩土器 (H18区S P03出土) 観察表

插図	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
33-1	底径 5.5cm 器厚 脚部6mm 鉢部4mm 残高 3.6cm 脚高 1.5cm	脚台底部の内面ゆるく内反 底部や傾むきがみられる。	○鉢部器表…たたき目 ○接合…指による接合 ○脚台底部から、内面底部にかけてナデ調整 ○脚台内部…指頭圧痕あり ○絞りあり	色調…明茶褐色 胎土…1~2mmの砂粒をふくむ 焼成…普通
33-2	底径 4.7cm 器厚 脚部8mm 鉢部7mm 残高 4 cm 脚高 2.5cm	脚台底部は外反している。 底部はやや傾むきあり。 立ち上りは、やや急である。	○鉢部器表…たたき目 ○接合…指による接合 ○脚台底部から、内面底部にかけてナデ調整 ○脚台内部…指頭圧痕あり ○脚台器表…たたき目らしきものあり ○絞りあり	色調…ピンクがかった褐色 胎土…1~2mmの砂粒をふくむ 焼成…普通
33-3	底径 5.1cm 器厚 脚部8mm 鉢部7mm 残高 3.8mm 脚高 2.8cm	脚台底部は外反している。 底部の傾きは急である。	○鉢部器表…たたき目 ○接合…指による接合 ○脚台底部から、内面底部にかけてナデ調整 ○脚台内部…指頭圧痕あり ○脚台器表…たたき目らしきものあり ○絞りあり	色調…茶褐色 胎土…1~2mmの砂粒をふくむ 焼成…やや悪い
33-4	底径 5.7cm 器厚 1.6cm 残高 3 cm	脚台底部の傾きはない。	○接合…指による接合 ○脚台底部から内面底部にかけてナデ調整 ○脚台内部…指頭圧痕あり ○脚台器表…たたき目らしきものあり ○絞りあり	色調…色あせした褐色 胎土…1~2mmの砂粒をふくむ 焼成…普通
33-5	底径 4.7cm 器厚 脚部7mm 鉢部4mm 残高 4.1cm 脚高 2.5cm	立ち上がりが急である 脚台底部の傾きはない	○接合…指による接合 ○器表…たたき目 ○脚台底部から、内面底部にかけてナデ調整 ○脚台内部…指頭圧痕あり ○絞りあり	色調…ピンクがかった茶色 胎土…1~2mmの砂粒をふくむ 焼成…やや悪い
33-6	底径 5.5cm 器厚 脚部9mm 鉢部6mm 残高 2.8cm 脚高 2.2cm	脚台底部にやや傾きがある	○接合…指による接合 ○脚台底部から内面底部にかけてナデ調整 ○脚台内部…指頭圧痕あり ○脚台器表…たたき目らしきものあり ○絞りあり	色調…明茶褐色 胎土…2~4mm前後の砂粒をふくむ 焼成…やや悪い
33-7	底径 5.5cm 器厚 1.1cm 残高 2.8cm 脚高 2.1cm	脚台底部はやや傾きがある	○接合…指による接合 ○脚台底部から内面底部にかけてナデ調整 ○脚台内部…指頭圧痕あり ○絞りあり ○脚台器表…たたき目らしきものあり	色調…赤茶色 胎土…1mm前後の砂粒をふくむ 焼成…普通
33-8	底径 5.4cm 器厚 脚部1cm 鉢部7mm 残高 3.1cm 脚高 2.6cm	脚台底部の傾きはない	○接合…指による接合 ○脚台底部から内面底部にかけてナデ調整 ○脚台内部…指頭圧痕あり ○絞りあり ○脚台器表…たたき目らしきものあり	色調…やや黒ずんだ赤茶色 胎土…2mm前後の砂粒をふくむ 焼成…良好
33-9	底径 5.5cm 器厚 脚部1cm 鉢部5mm 残高 4.5 cm 脚高 3 cm	脚台底部の傾きはない 立ち上がりはやや急である	○接合…指による接合 ○脚台底部から内面底部にかけてナデ調整 ○脚台内部…指頭圧痕あり ○絞りあり ○脚台器表…たたき目らしきものあり	色調…明茶褐色 胎土…1~4mm前後の砂粒をふくむ 焼成…良好

挿 図	法 量	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考
33 — 10	底径 6.0cm 器厚 脚部 9mm 鉢部 6mm 残高 3.5cm 脚高 2.6cm	脚台底部にやや傾きあり やや立ち上がりが急である	○接合…指による接合 ○脚台底部…ナデ調整 ○脚台内面は指頭圧痕のみ ○脚台器表…たたき目らしきものあり ○絞りあり	色調…ピンクがかったうす茶色 胎土…1～2mmの砂粒をふくむ 焼成…良好
33 — 11	底径 5.5cm 器厚 脚部 9mm 鉢部 7mm 脚台 2.8cm 残高 4.3cm	脚台底部に傾きあり 立ち上がりはゆるやかである	○指による接合 ○鉢部器表面はたたき目 ○脚台底部は横ナデ ○脚台内面は指頭圧痕のみ ○脚台器表にたたき目あり ○絞りあり	色調…赤っぽい茶色 胎土…1mm前後の砂粒をふくむ 焼成…良好
33 — 12	底径 5.4cm 器厚 脚部 9mm 鉢高 2.2cm 残高 2.5cm	脚台底部に傾きあり	○指による接合 ○脚台器表面はたたき目 ○脚台底部は横ナデ ○脚台内面は指頭圧痕のみ ○脚台器表面はたたき目あり ○絞りあり	色調…赤っぽい茶色 胎土…1～3mm前後の砂粒を ふくむ 焼成…良好
33 — 13	底径 4.9cm 器厚 脚部 7mm 鉢部 6mm 脚高 2.4cm 残高 3.0cm	脚台底部にやや傾きあり	○指による接合 ○鉢部器表面はたたき目 ○脚台底部は横ナデ ○脚台内面は指頭圧痕あり ○絞りあり	色調…明茶褐色 胎土…1mm前後の砂粒をふくむ 焼成…やや良好
33 — 14	底径 5.1cm 器厚 脚部 7mm 鉢部 4mm 脚高 3.0cm 残高 4.8cm	脚台底部の傾きはない 立ち上がりはやや急である	○指による接合 ○鉢部器表面にたたき目 ○脚台底部はナデ調整 ○脚台内面は、指頭圧痕あり ○絞りあり	色調…明茶褐色 胎土…2mm前後の砂粒をふくむ 焼成…良好
33 — 15	底径 4.2cm 器厚 脚部 8 mm 鉢部 4 mm 脚高 2.7cm 残高 3.5cm	脚台底部の傾きはない 立ち上がりは、ゆるやかである	○指による接合 ○脚台底部はナデ調整 ○鉢部器表面にたたき目 ○鉢部内面は、ナデ調整 ○脚台内面は、指頭圧痕のみ	色調…明茶赤色 胎土…1mm程度の砂粒をふくむ 焼成…普通
33 — 16	底径 5.2cm 器厚 脚部 9 mm 鉢部 5 mm 脚高 2.5cm 残高 2.8cm	脚台底部の傾きはない	○指による接合 ○脚台底部はナデ調整 ○鉢部器表面にたたき目 ○脚台内面は、指頭圧痕のみ ○絞りあり	色調…茶褐色 胎土…1～2mmの砂粒をふくむ 焼成…普通
33 — 17	底径 4.8cm 器厚 脚部 8 mm 鉢部 5 mm 脚高 2.3cm 残高 4.2cm	脚台底部の傾きなし 立ち上りは、やや急である	○指による接合 ○脚台底部はナデ ○脚台内面は、指頭圧痕のみ ○鉢部器表面は、タタキ目 ○絞りあり	色調…茶褐色 胎土…2～4mmの砂粒をふくむ 焼成…良好
33 — 18	底径 5.2cm 器厚 脚部 8 mm 残高 2.4cm	脚台底部にやや傾きあり	○指による接合 ○脚台底部ナデ ○脚台内面は指頭圧痕のみ ○絞りあり	色調…赤茶色 胎土…1～2mmの砂粒 焼成…普通
33 — 19	底径 5.0cm 器厚 脚部 1.0cm 残高 2.6cm	脚台底部の傾きなし	○指による接合 ○脚台底部はナデ ○脚台内面は指頭圧痕のみ ○絞りあり	色調…ピンクがかった茶色 胎土…2mm前後の砂粒をふくむ 焼成…良好

挿 図	法 量	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考
33 - 20	底径 4.4cm 器厚 脚部7mm 胴部4mm 残高 2.0cm	脚台底部の傾きなし	○鉢部と脚部を連続して作る。 ○脚台器表にたたき目あり ○脚台内面は指頭圧痕のみ 鉢部内面はナデ調整	色調…赤茶色 胎土…2mm前後の砂粒をふくむ 焼成…良好
33 - 21	底径 4.6cm 器厚 脚部7mm 残高 2.0cm	脚台底部にやや傾きあり	○指による接合 ○脚台底部はナデ ○脚台内面は指頭圧痕のみ 鉢部底面にナデ調整あり	色調…暗赤茶色 胎土…1～2mmの砂粒をふくむ 焼成…良好
33 - 22	底径 4.5cm 器厚 脚部8mm 鉢部4mm 脚高 2.3cm 残高 2.8cm	脚台底部に傾きなし	○指による接合 ○脚台底部から内面までナデ調整 ○脚台器表面はたたきの上からナデ調整	色調…赤茶色 胎土…1～2mmの砂粒をふくむ 焼成…良好
33 - 23	底径 4.2cm 器厚 脚部5mm 鉢部3mm 脚高 2.2cm 残高 4 cm	脚台底部に傾きなし	○指による接合 ○脚台底部はナデ調整 ○脚台内面は指頭圧痕のみ ○鉢部器表面はたたき ○絞りあり	色調…茶褐色 胎土…1～4mmの砂粒 焼成…普通

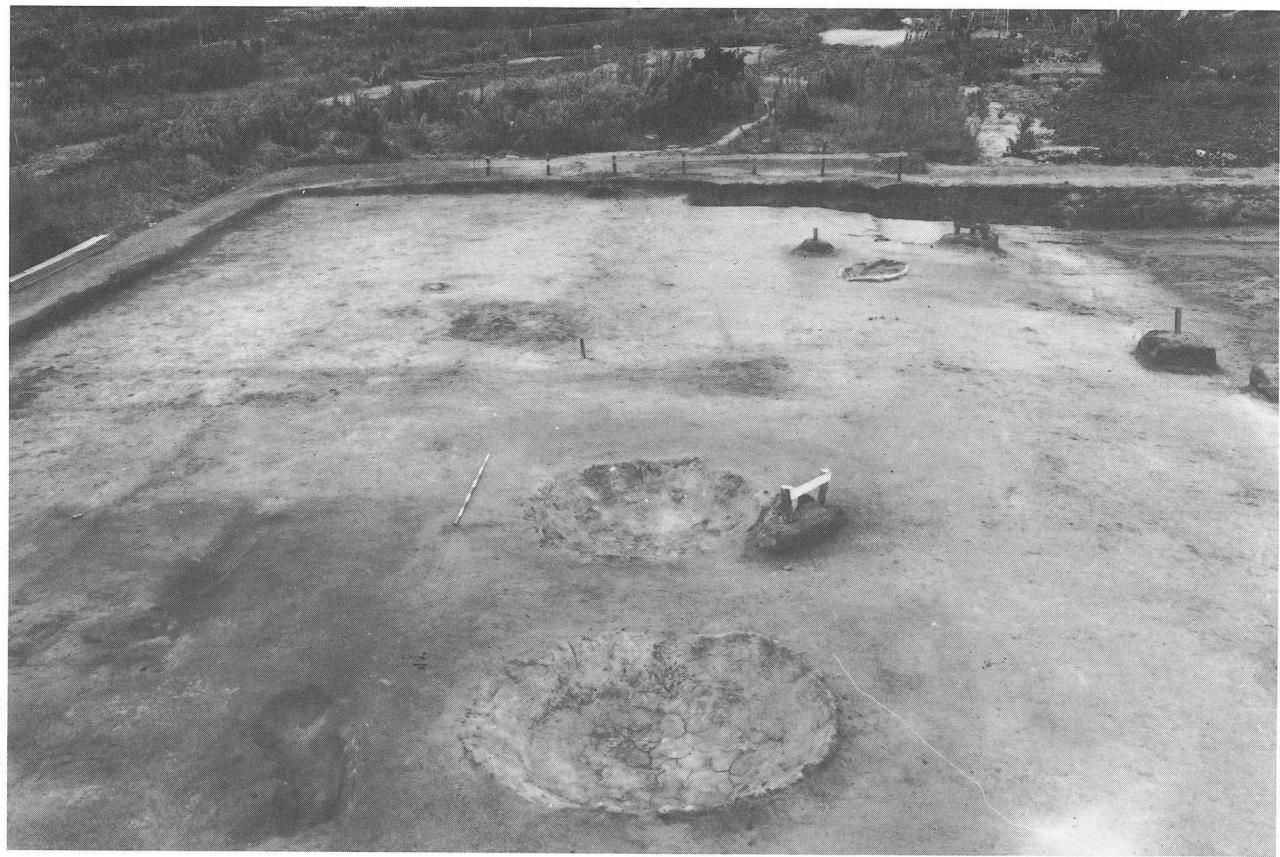
図版



大浦浜遺跡調査区全景航空写真（朝日新聞社提供）



(1) 調査区遠景（北東から）



(2) E～H-21～26区全景（南から）



(1) SX01検出状況（北から）



(2) SX01検出状況（西から）